三　畜　産　業

一　産馬　産馬事業は古來此地方に於て發達したるもゝ一なるが如し、是れ到る處に其飼料に富める原野多きと藩政時代に之を奬勵したる結果に外ならず、藩政時代には古くより産馬役人として馬生産方元締役、馬生産方役人、郡方横目郡方役人、大肝煎、村肝煎等ありて産馬馬籍の調査の外掫駒市場に出張して之を監督せり、貞享三年になれりといふ掫駒の制によれば、藩内二才駒は毎秋市場に引出し馬匹を相して等級を定め之を五階段に分てり、第一を召上馬といひ、駿逸を選び飼主より藩主に献納せしめ馬主に金五兩を賜ふことゝせり、第二を種用馬とし是亦秀駿を選び買ひ上ぐるなり、第三は御免馬と稱して門閥ある藩士に任意に撰び購はしむ。第四を臺所馬といふ、第五を掫馬とす、掫代金は金五兩を起ゆるを得ず、文久の頃改革して馬商に利益を與ふ方を設け、二才駒賣買には現金を以てせずして買得馬一匹毎に金五兩を馬買商に貸與し、翌秋の掫駒時に返濟せしめたり、本郡の掫駒場は岩谷堂に行はれ頗る盛況を呈せるもの丶如し、當時の岩谷堂馬市の狀況を記せる中に「諸方の人語清濁相同じからず買賣の競ひ忽ち爭起り肩を摑み耳を引き擲が如く斯くして後三五輩會して手拍子鳴らし頓に和睦成る云々」と明治六年牛馬取締規則を定められ出産死亡を屆け又賣買出入を明かにせしむ、同十八年産馬維持規則を定め管内共同して牡馬二才の時に至り競賣したる代償の八分を馬主に附し二分を收入して産馬資金とし村役場に馬籍ヶ設け出生死亡共に屆出しむ、明治二十七年組合規約に關する準則を示し各所其設置を見るに至りしも個々の思想を以て其區の經濟を計る外なきなり。本郡産馬畜産給合は一時財政紊亂し殆と收拾すへからさる苦境に陥りしが、現組合長萩田甚助氏就任以來極力之れが整理を遂行し、郡亦相當指導する所ありて漸く財政狀態順調となり、大正六年度より優良種牡馬を購入し、現在二十頭を有するに至り之れを各町村に配置し、又國縣有種馬の貸下を得之れを交配し、産馬の增殖を圖り、一方優良馬匹に對しては奬勵金を下付する等産馬界に盡力しつゝあるを以て、軍馬購入に際しても漸次其聲譽を博するに至れり。

二　其他の家畜　牛の飼養は馬に比し頗る遜色あり。之れ古來此地方は地勢上牛の運搬に待つべきもの少きと、馬匹の飼養に壓倒せられ、農耕駄載一に之に據れるに外ならず、近時乳肉の需要多きを加ふに至り、漸く其飼養數を增加せり。

豚兎は農家に於てはよく飼養し、漸次其數を加ふるも未だ以て盛なりと言ふ能はず。緬羊山羊の類に至りては殆んと飼養せざるに等し。

家禽は鷄を第一とし、副業として行はる、主として採卵を目的とし肉用として飼育し市場に出すもの少なし。

家畜一覽（大正十年十二月末現在）

	和種		雜種		洋種		計	
	牝	牡	牝	牡	牝	牡	牝	牡	計
牛	—	—	—	—	—	—	一二五	八三	一九〇
馬	三七六	八四	一、五六七	七八七	一九	一六	一、九六五	八八七	二、八五二
豚	—	—	—	—	—	—	二九一	二六	四一七

家禽一覽（大正十一年六月末現在）

	飼養戸數				飼養羽數
	十羽未滿	十羽以上五十羽以上	計		
鶏	四、二四五	一〇一	四、三四六		二三、六二四
鴨	一六	〇	一六		一二七

四　鑛　業

本郡東部山間地は至る處鑛物に富み、古來鑛坑少なからず、米里村の古歌養・鶯金山は寛永以前に於て盛に採掘せられ同根津場銅山は元文寛保頃に休山せりと傳へらる。されば其後に至るも當地方は鑛業地として嘱目せられ試掘せられし所多し。就中伊手村の金銅鑛米里村の鐵鑛は近年に至る迄採掘製錬せられ、品質産額に於て最も有利に目せられつゝありしも、歐州大戰後の物價暴落に伴ひ何れも休山するに至れり。

亞炭は郡内至る處無盡藏に存在し、之れか試掘出願する者甚た多く、其生産亦年卅萬貫を下らさるべし薪炭代用（主に風呂焚用）として毎戸に用ひらる現今膽澤郡に移出しつゝあり。

鑛業一覽（大正十年度統計）

採掘鑛區	町村名	鑛山名	鑛區	坪數	鑛種
伊手村	米里村	栗木・戸中	一〇	二九六、四一五	金銀銅鐵
黄金坪	伊手村	一	五	二八〇、六六三	銅鐵
			四	四四六、〇三七	銅鐵

試掘鑛區

岩谷堂町	岩谷堂町	一	一三三、三〇〇	亞炭
〔岩谷堂町田原村 里村玉村藤〕	岩谷堂町	一	七四五、一〇〇	同上
羽田村	玉里村	一	九八二、三〇〇	同上
田原村	羽田村	一	二六七、一〇〇	同上
藤里村	田原村	三	二三〇、三〇〇	同上
伊手村	藤里村	一	一、八六三、一〇〇	亞炭石油
玉里村	東磐井興田村	一	四〇八、〇〇〇	金銀銅重石
福岡村	玉里村	三	七一五、四〇〇	亞炭
稻瀬村	和賀郡中内村	一	九七六、一〇〇	石炭
稻瀬村	稻瀬村	一	二〇〇、〇〇〇	同上
稻瀬村	岩谷堂町	一	九七七、四〇〇	同上
計		一五	八、〇四四、六〇〇	

五　林　業

郡内林野の推定面積は貳萬七千餘町歩にして、全地積の七割六分餘を占め、私有林野のみにても約一萬四千町歩なりとす。故に林業の盛衰は郡經濟に多大の影響を及ぼすべきは敢て言を要せさる處なり。然るに多年亂伐狼採と野火侵入の結果は公有林野の殆んとは荒廢に歸せしめたり。私有林の一部にも如

斯狀態を呈しある處あり、故に用材薪炭材の伐採量は年と共に減耗の傾向を呈せり。されば縣郡町村は協力一致し、公有林野の整理經營並に荒廢地の復舊及ひ一般林業の奬勵につき、一段の努力を爲し今や漸く斯業發達の機運を促進するに至れり。

一　公有林野の整理及經營

部落有林野の統一及入會地整理　本郡玉里梁川藤里岩谷堂の一町三ヶ村に於ける部落有林野貳千八百餘町歩は既に統一を了し、尙黑石姉村に於ける黑石姉帶入會共有林野は之を整理し、百五拾六町歩所有權を獲得せり。

外に部落有林野は愛宕●羽田●田原●廣瀨●稻瀨の各村に合計臺帳面積壹千九百七十六町歩。入會地梁川村に若干あるも、目下部落民と協商中なるを以て統一整理さるゝも近きにあるべし。

町村有林野の經營　町村有林野の總計面積は實測九千百餘町歩にして、愛宕村を除き各町村之を有せざるはなし。其の內譯左の如し。

岩谷堂町	約四〇〇町歩	羽田村	一三九
黑石村	三九六	田原村	六〇
藤里村	五三二	伊手村	二、二五〇
米里村	三、二八一	玉里村	八六四
梁川村	一、一三三	福岡村	三
廣瀨村	二四	稻瀨村	一

之等の町村は施業計劃を樹立し、着々造林實行中なり。

而して實行造林計劃の町村は米里●伊手●玉里●藤里●岩谷堂●黑石の一町五ヶ村にして貳千町歩を超過せり。故に官行造林の事業は餘程進涉し郡內二ヶ所に一の關公有林野官行造林署の擔當區官舍設置され二名の事業實行官駐在し、專ら之を擔任せり。されば町村自營の造林と相俟つて鬱蒼たる森林地造成され、以て林產物の圓滿なる供給並に治水上の効果を擧ぐるの日遠きに非らざるべし。

二　私有林野の經營

郡內私有林野の臺帳面積は壹萬壹千拾六町歩にして、內幾部を除きては殆と樹林地又は造林の適地なり。濶葉樹及赤松は人工造林を要せずして繁茂の素質を有す。然れども最近歐州戰爭中異常なる經濟界の發展の爲め伐採その度を超ゆ、さなきだに本郡は一般に輪伐期を短縮し、雜木林七、八年生にして伐採するの例あるを以て、過度の伐採と共に後繼樹の生立を不良ならしめ、併せて林地を荒廢せしむる虞あり。故に郡に於ては天然造林の造成或は優良薪炭林の造成、及び人工植栽の奬勵等怠りなく近くは縣に於て藤里●米里の二ヶ村の私有林中に指導林を設置して、森林造成の範を示す等私有林經營上の便に供せり。

竹林は主として苦竹●淡竹●孟宗竹●黑竹●布袋竹等にして合計面積約十三町歩を有す。中には新に竹林造成するものあるも從來のものは多く、天然の儘に放置し人工的の作業を試みるもの尠し。

今林產物の主なるものを擧ぐれば、丸角●挽材●枕木●樽丸●木葉柾●杉皮●薪材●木炭等にして大正十年の產額は六拾貳萬五千圓餘なり。

三　國有林野の現況

郡内國有林は黒石●藤里●伊手●米里●玉里●廣瀬の六ヶ村に存在し、合計壹千參百五拾八町歩を有す。内黒石村存在國有林參百八拾六町歩餘は、同村正法寺の保管林に編入さる。而して國有林は何れも鬱蒼たる天然赤松老齢林、壯齢林或は雜木林又は針葉樹の人工造林の幼齢林なりとす。

林野一覽（大正十一年三月末現在）

國有林野	山林								原野				計			
	保安林		供用林		部分林		計									
	箇所	反別	箇所	反別	箇所	反別	箇所	反別	箇所	反別	箇所	反別	箇所	反別	箇所	反別
町村有部落有社寺有私有計	一	九	一	一、三五八、五町	一	一	一	九	一	一	一	九	一	一、三五八、五町	一	一、三五八、五町
民有林野				四、九二七、七町		六九二、二町				二〇、三〇町				一〇、八二四、一町		一六、六三四、九町

林産物	用材	枕本	柾	薪	炭	萱	其他	計
數量	三三、四五〇石	八、四〇八坪	二一、二六七束	六〇三、〇一四貫	七一、六二五丸		一	
價格	八二、四六三円	七八五錢	一、〇九九円	三三、六〇三円	一五四、〇三四円	二〇〇、三二八円	二五、四七三円	二八二、三六五円	八六九、三六三円

備考　栗實　九、六石　松茸　二、九五七斤　其他菌　四、六三貫　自然蔬菜　二、三九七貫

六　水　産　業

稲瀬、愛岩、羽田、黒石諸村の北上川沿岸は、鮭、鱒、鮎、鰻、鯉等を産す。之を本業として從事するもの一、副業とするもの約六十人其の産額左表の如し。

（品名）	（數量）	（價格）
鮭	八六〇貫	一、七二六円
鱒	二五〇	四五〇
鮎	二九〇	八〇二
鰻	四〇一	一、五〇七
鯉	八五	四二六
其の他	一	一、〇四七
計	一	五、九八〇

春夏の候北上川に鮴（クキ）丸太（マルタ）と稱する魚類多く遡上し來る撒網を以て之を漁獲す、色彩美にして味佳なり、近く網に入るを見直ちに下物として命ずるを得べし。故に漁場に來り宴遊するもの少なからず、適當の設備をなし以て客を待たば地方特殊の遊覽場となすを得べし。

七　工　業

一　概　況

本郡の産業は農業大部を占め、工業に至りては專業とする戸數に於て約三分三厘、兼業者を合して八分

に過きず。工産品の主なるを擧くれば岩谷堂町の酒類、味噌、簞笥、羽田村の銅鐵器、福岡村の傘、愛宕羽田の氷豆腐、愛宕、羽田、田原の素麺等にして菓子類亦著はる。岩谷堂自酒、岩谷堂羊羹は其質の善良なるを以て世に知らる。惟ふに本郡の工業は他に比して發達したりといふべからず、指導奬勵以て將來の萬全を期すべきなり。

二　主なる工業

羽田村鑄造業　其起源明ならず。或云藤原清衡の時に起り平泉盛全時代に於ては御鑄物師の稱を賜はり、其保護の下に活動したりしが、藤原氏滅亡の後は俄かに寄邊を失ひ、各地に離散して纔かに生計を立つるに至りしと。又云、葛西氏の頃羽黒堂に千葉某といへるものあり、鑄物師として數代葛西氏に仕へしと。今に工場の遺地遺物を存す。現業地田茂山に斯業ありしと認むべきは遙かに其後にして、確かなる記錄によれば田茂山に及川喜右衛門光廣といへるものあり。天和三年鑄物師開業をなし、其子に至りては其業益々盛に名字帶刀御免を蒙り、其業益々繁昌し、子孫相受け今日に至れりと。惟ふに、田茂山に於ける斯業の發達は或は之を中心として派出せるにあらざるか、維新前後に至りては工場の數二十餘に達し、各家其業を競ひ頗る隆盛を極めたりしが、其後漸く衰頽し、明治十八九年頃に至りて僅か四五を存して、他は休業するに至れり。心あるもの之を憂ひ、挽回の策を立てしも、大勢は如何ともすること能はざりき。明治二十一年に至り、同業者相圖り經營方法並製品の統一販路の擴張方法を定め、漸く曙光を認むるに至れり。其後に至り、同業者水田和吉氏等其作品殆んど地方向實用品にして販路を更に擴張すべからざるを慮り、先進地を視察し改良に意を注ぎしは其功沒すべからざるなり。明治四十三年より銅器改良講習會を開き、三ヶ年を通したり。之れより當地の銅器製品全く面目を改めたり。現今重なる工場は水田鑄造所及源鑄造所にして、其他の工場を合すれば約二十五、其製産年額總べて三十萬を下らず。

岩谷堂町の簞笥製造業　岩谷堂町に産し、古より岩谷堂簞笥の名あり、材料豐富なるより實用向を旨とするを以て、都會より寧ろ農村に賞用せらる。宮城縣地方に最も多く輸出せられ、其産額年々十万圓を上下せり。

上口内の傘製造業　中島家の臣に渡邊茂兵といへるものあり。天明餓饉後、邑内の侍士産を失ひ、甚だ困窮せるを見て、切に副業の必要を感せり。會々御番所役人御境横目石田五左衛門製傘の技に堪能なるを聞き、之に師事し研鑽倦まず遂に良匠の名を得たり。之れ上口内傘の起源なり。其後菊田五左衛門中川佐右衛門等同志十數名を得、益々其業を擴張せり。邑主中鳥氏其業の有益なるを認め之れに奬勵を加へしにより産額急に加はり、遂に特産品となるに至れり。現今に於ては其技大に進み、工場の設備亦成れるを以て産額大に增加して十三萬に止り、外觀も亦漸く舊套を脫せり。

工業一覽

指物類	七、五〇〇圓	金屬製品 鍋釜鐵瓶	二〇〇、〇〇〇圓	酒類	二、六二二、〇〇〇石
桶樽類	二、七五〇圓	刃物類	四、三五〇圓	醬油	三八、五〇〇圓
下駄類	七、八二〇圓	青銅眞鍮器	六、〇〇〇圓	味噌	一、三八三、〇〇〇石
					四、四六〇圓
					三六、五〇〇貫
					二、六〇〇圓

麺類	五四七、〇〇石	漁網地	一、五三〇反	藁製品	八、五五三圓
素麺	一六、八〇四貫	傘骨	四五、〇〇〇圓	畳表	四〇、〇〇〇圓
氷豆腐	一八、八〇〇貫	蝋燭	八七、四五〇圓	其他	三七、九三九圓
	一六、九二〇圓				
	五、九八一貫				
	二九、九〇〇圓				
計	九九〇、六三六圓				

八　商業

一　概況

一本郡は交通運輸の機關完からざるため、商業の發達を妨ぐること少なからず。本郡唯一の商業地たる岩谷堂に於て唯一線の縣道により他地方との賣買受授をなすに過きず。然れば郡内物貨の集散も郡内東北部はよく岩谷堂と行はるゝも、南部に至りては殆んど水澤に吸取せらるゝの觀あり。

二　諸會社

本郡は概して單獨の事業に於ては其發展を計り、相當の企劃をなすも未だ大資本を投じて大事業を企つる氣運に至らざるの觀あり。

今左記諸會社一覽表を掲ぐ。

諸會社一覽

法人名	所在地	目的	設立年月日	資本
贈江軌道株式會社	岩谷堂町字一日市町十三番地	旅客及貨物ノ運送	大正元年十月七日	五〇、〇〇〇円
玉里村麹製造合名會社	玉里村	麹製造販賣	大正四年十月一日	
合名會社江谷農商會	岩谷堂町字六日町四十四番地	金錢貸付及貸借紹介	大正四年十二月廿五日	五、〇〇〇
高民合資會社	米里村字人首町二番地	米雜及薪炭販賣	大正六年五月三十日	
合名會社三藤吳服店	岩谷堂町五百四十九番戸	吳服太物古着卸小賣仲繼製造販賣	大正七年六月一日	四三、〇〇〇
南部鐵瓶鑄造合資會社	羽田村二百二十六番戸	南部鐵瓶諸鐵器鑄造販賣	大正七年八月二日	五、〇〇〇
羽田商事株式會社	羽田村乙十一番戸	農藝器具穀類肥料其他諸種ノ物品販賣及商品委托販賣	大正八年十一月二十五日	三〇、〇〇〇
岩谷堂羊羹合名會社	岩谷堂町字舘下二十二番地	地方産物ノ羊羹製造販賣本事業ニ要スル原料供給及伸介其他附帶スル事業	大正九年一月一日	七、〇〇〇
岩谷堂運送合名會社岩谷堂支店	岩谷堂町字舘下十八番地	一般貨物ノ運送及附帶事業	大正九年三月二十三日	五〇、〇〇〇
岩谷堂倉庫株式會社	岩谷堂町字川原町五二及五三番地	貨物ノ保管寄托有價證券不動産並ニ物資ニ對スル金融及附帶スル一切ノ業務	大正九年四月十一日	五〇、〇〇〇
合資會社岩谷堂製材所	岩谷堂町字舘下三番地	製材及製板業	大正九年六月廿五日	四、七〇〇
岩谷堂肥料株式會社	岩谷堂町字中町三番地	石灰岩ヲ原料トスル石灰肥料工業用石灰、豫防用石灰及炭化石灰ノ製造及販賣各種肥料ノ購買販賣各種ノ農藝具種子苗木ノ販賣	大正九年七月廿一日	五〇、〇〇〇
合資會社村井商會	同町字川原町二十八番地	味噌醬油醸造販賣各種粉製麺販賣及之ニ附帶スル事業	大正九年十月十五日	一七、〇〇〇

合資會社小野田商店	米里村字人首町五十六番地	薪炭製造販賣	大正九年十月三十日		
合資會社長壽屋酒造店	岩谷堂町字川原町八十三番地ノ二	酒類醸造及賣買	大正九年十二月一日	二〇、〇〇〇	
財團法人保光會	岩谷堂町字向山四十番地曹洞宗光明寺內	光明寺ノ維持經營ニ要スル費用ヲ供給ス	大正十年三月十五日	七、九〇〇	
愛宕蠶種合名會社	愛宕村字東下川原百二十五番地	蠶種製造販賣及之ニ附帶スル事業	大正十年五月十八日	四、五〇〇	
稻瀨商事合資會社	稻瀨村大字照澤字下臺十九番地	酒類醸造及賣買酒類醸造販賣及本業ニ要スル原料供給仲介其他附帶スル事業	大正十年六月廿五日	一七、五五〇	
三立薪炭商行合資會社	岩谷堂町字館下六番地	薪炭製造販賣及本業ニ要スル原料供給仲介其他附帶スル事業	大正十年九月廿三日	二、〇〇〇	
贈江盧元賣捌合名會社	同町五百五十五番戸	盧元賣捌業	大正十一年四月五日	二五、五〇〇	
北上窯業合資會社	稻瀨村大字稻瀨字柏原八十三番地	瓦、土管、練瓦、其他粗製陶器ノ製造販賣	大正十一年四月廿一日	四、二二〇	
合資會社千葉久商店	岩谷堂町字中町九十五番地	小間物及荒物販賣	同年五月五日	三、八〇〇	
同木村印刷所	同町字横町十五番地	印刷業及之ニ附帶スル事業	同年七月三十一日	三、〇〇〇	
贈江電力株式會社柳澤發電所	玉里村字柳澤		大正六年五月三十日		
贈江電力株式會社岩谷堂出張所	岩谷堂町字横町		大正六年五月三十日		
水岩自働車株式會社岩谷堂車庫部	岩谷堂町字中町		大正八年七月廿三日		
岩谷堂肥料株式會社製造所	玉里村字玉崎		大正九年十月二十日		
贈江電力株式會社電工散宿所	羽田村		大正十年十二月一日		

九　金融機關

産業の發展に伴ひ金融機關の發達を要するは自然の勢なり。現今郡內に於ける銀行には盛岡銀行支店を始とし、三陸・水澤・九十・の支店・派出所あり。其の他のものと共に左表に掲ぐ。

銀行一覽（大正十年十二月末日現在）

法人名	所在地	目的	所在地ノ設立年月日	資本金
株式會社盛岡銀行岩谷堂支店	岩谷堂町字川原町七十九番地	普通銀行業	明治廿一年二月十五日	七、〇〇〇、〇〇〇
株式會社三陸銀行岩谷堂支店	岩谷堂町字六日町九十四番地	右同	明治三十二年十二月十五日	二、〇〇〇、〇〇〇
株式會社水澤銀行岩谷堂支店	岩谷堂町字横町三十一番地	證券割引及代金取立、爲替及荷爲替、諸預及貸付	大正九年四月一日	五〇〇、〇〇〇
株式會社九十銀行岩谷堂支店	岩谷堂町四百六十四番戸	普通銀行業	大正九年十月一日	二、五〇〇、〇〇〇
株式會社三陸銀行岩谷堂支店人首出張所	米里村字人首町		大正六年十月一日	
株式會社盛岡銀行岩谷堂支店野手崎派出所	梁川村字館下		大正十年二月十五日	
株式會社盛岡銀行黑澤尻支店口內派出所	福岡村字新町三十四番地		大正十年三月五日	
水澤銀行羽田派出所	羽田村		大正十年三月十五日	
水澤銀行黑石派出所	黑石村		大正十年五月二十日	

郵便爲替振替表（大正十年度）

一、郡費累年比較表

年度	會議費	事業費	其ノ他	算盤出納	決議事業ノ大綱
明治三十年	三六円	三六円	八〇六円		郡視察費設置
同三十一年	一六六	六〇七	六〇六		農私郡町同
同三十二年	六二一	九五	一、六七〇		業立視村試
同三十三年	四七三	一、六四	二、三七	醫師講習費	技術作
同三十四年	六〇	四、三七	四〇	郡換診醫設置	術生會地
同三十五年	五七七	三、八三一	三四	醫業學校新設	員設町、手盛
同三十六年	九七七	三、〇二四	三八	幼稚園年齢学校生徒補助費	設置村農會講習、等ノ補助費、
同三十七年	六四七	一、四六二	八六	輪農事試驗場ノタメ其ノ他ニ於テ建設了ル土地ノ增加費	通農共郡他視學右同ニ移換
同三十八年	八八	一、九九	三三〇	尚兵補助新設	醫同業上、停止、所得補助
同三十九年	八〇	三、八四	六六	農業學校補助費	醫師講習費
同四十年	九九	三、三二	八四	幼稚園年齢学校生徒補助費	醫業學校新設
同四十一年	七六	四、〇二七	八三	醫業學校補助費	醫業學校補助費
同四十二年	七六	五、七三	八六	醫師講習費	郡換診醫設置
四十三年	七二	七、〇九二	八四〇		

郵便貯金累年表（大正十年度）

	六年	七年	八年	九年	十年
人數	九、一一六	一〇、六三四	一五、七三一	一六、一八一	一六、一三一
金高	九五、三七四	一五五、七八五	一九八、八四七	一八一、一三一	一三一、七四〇

農工銀行貸附表

年末現在高		年内貸附	
口數	金額	口數	金額
一、三五九	五三八、六九九	一六九	一〇一、一七一

質屋表

店數	貸出		受戻		流質	
	口數	金額	口數	金額	口數	金額
一二	四、〇三七	一一、五一九	四、一一〇	一〇、六一二	一〇七	六五

郵便振替貯金累年表

	振出及受入		拂出及拂渡	
	口數	金額	口數	金額
振替	一一、七〇〇	二六二、〇四七	八、六四	三一、〇九九
貯金	一三、七七	五五七、七八一	一、一一六	一八、一〇七

同四十四年	七八八	六、七一七	八六三	八、三六八	郡吏員設置
同四十五年 大正元年	七四五	七、一九八	九七三	八、九一六	林業技手新設 其ノ他ニ於テ祭服新調
大正二年	六四五	六、九一三	九四五	八、五〇三	公衆電話加入 膽江聯合物產品評會
同三年	七一八	七、一五〇	一〇七	七、九七五	衛生展覽會開催 町村改良奬勵
同四年	七九一	八、二四五	九三二	九、九六八	冷藏庫建設
同五年	七九五	八、四一五	一、八九六	一一、一〇六	其ノ他ニ於テ建物建築積立增加 在郷軍人分會及產業組合補助
同六年	八二七	九、二九一	八九九	一一、〇一七	畜產組合補助
同七年	八九八	一四、一八七	九〇五	一五、九九〇	公會堂建築補助
同八年	一、一五〇	三〇、三九一	一、四三六	三三、〇七七	產業組合主事補 膽江分場設置 郡道調査
同九年	一、四三〇	二八、六三〇	一七一	三〇、二三一	郡道改修
同十年	一、六五三	四一、二二五	二六、六四六	六九、五一四	其ノ他ニ於テ借入金償還 災害復舊工事

二、大正十年度郡歲入歲出類別決算額

歲入

財產收入	二六
雜收入	五六五
各町村分賦額	三七、九四八
繰越金	三五、九六七
國庫補助金	一七五
縣補助金	一、一二六
寄附金	一、一五〇
雜收入	九九九
計	七八、〇四六

歲出

會議費	一、六五三
郡吏員費	四七一
土木費	四、六六七
教育費	七、三三六
衛生費	七五
勸業費	三、九二六
統計費	六〇
郡費取扱費	九三
郡會議員選擧費	—
神社費	四四
郡有財產積立費	四四六
地方改良諸費	三六一
電話費	四八
雜支出	五〇六
道路調査費	二、三〇九
教育補助費	六〇〇
勸業費	三、九六五
勸業補助費	二、九六九
在郷軍人分會補助	一〇〇
青年團補助	一五〇
神職督務所支所補助	五〇
借地料	二八五
巖手試驗場膽江分場設置寄附金本年度支出額	二、九五〇
郡債費	二五、五〇九
災害復舊土木費	一〇、五九一
道路改修費	三五〇
計	六九、五一四

第五章　交　通

一　陸　路

郡内に東街道と稱する古道あり。傳云、平泉時代に於ける河東の大道にして東稻山麓より北行して本郡の南端黑石村に入り、村内高清水を經て羽田村黑田助に通じ、田原村石山の高臺を通り、豊田館下より岩谷堂の丘陵地に入り、稻瀨村柏原を經て石山の邊に至り、稻瀨の渡を渡りて當時の官道に達せるものなりといふ。今はその遺趾として田原村石山、稻瀨村柏原にその名を存するのみ、藩制時代に至り東山街道氣仙街道・口内街道、登米街道等ありしも、沿革明ならず、明治に至り三十二年に縣道水澤大船渡線の改修あり、大正六年縣道水澤千厩線、水澤宮守線の改鑿を起し、同九年其工を終ふ。大正八年十二月郡内樞要の里道六線路を選び(別表參照)て、郡道に認定し、同十年郡債を起し、道路橋梁の大修繕をなせり、同十一年岩谷堂黑澤尻線、岩谷堂猿澤線、岩谷堂大原線(別表參照)の四線路を縣道に認定せられたり。

縣道一覽表

路線名	舊名	延長	經過地	摘要
水澤大船渡線	米里街道	三里一八町一一間	岩谷堂町、玉里村	
水澤千厩線		一四〇一一間	米里村、黑石村	
宮守線		一里一間	岩谷堂町、玉里村、梁川村	本線ハ水澤大船渡線ヨリ玉里村ニテ分岐ス

岩谷堂線	猿澤街道	四	七	三
猿澤岩谷堂線	興田街道	五	一	三
大原線	黒澤尻街道	二	六	一
岩谷堂黒澤尻線	立花街道	二	三	五
梁川黒澤尻線				

岩谷堂町、田原村
岩谷堂町、藤里村
伊手村
岩谷堂町、稲瀬村
梁川村、福岡村

郡道一覽表

街道路	舊名	延長	經過地	摘要
猿澤街道	東山街道	四里七町	五間 岩谷堂町ヲ起點トシ田原村ヲ經テ猿澤村ニ至ル	
興田街道	氣仙街道	五里一	三間 岩谷堂町ヲ起點トシ藤里伊手ノ二ケ村ヲ經由シ興田村ニ至ル	
口内街道	口内街道	三里三	一七 岩谷堂町ヲ起點トシ稲瀬廣瀬ノ二ケ村ヲ經由シテ福岡村ニ至ル	
立花街道		二里三	五 梁川村野手崎ヲ起點トシ福岡立花ノ二ケ村ヲ經由シ黒澤尻ニ至ル	
黒澤尻街道	東街道	二里六	一 岩谷堂町ヲ起點トシ稲瀬立花ノ二ケ村ヲ經由黒澤尻ニ至ル	
生母衛道	登米街道黒石街道	三里四	二六 岩谷堂町ヲ起點トシ羽田黒石ノ二ケ村ヲ經由生母村ニ至ル	

本郡水路交通は本郡西部を流るる北上川に於てはやくより行はれたり伊達家の閥族、岩城氏岩谷堂に館するに及び船舶の便大に開け穀船、商船の區別をなし、穀船は貢米の輸送に限り、又商船は一般の便に供せられ主として雜穀を輸送し海產物、日用品を輸入したり。當時、上川船九十六雙と稱し、即ち現時の西磐井郡より本郡に至る間に九十六雙の帆船あり、狐禪寺、石ノ卷を始め沿岸部落の交通運輸を圖りたりしが、明治二十年東北本線の開通せらるゝや、運輸は漸次に鐵道に移れり、茲に至り船舶の往來大に衰へ、現今に至りては二三の帆船の往來して僅に昔日の面影を殘すのみ。

三　其の他交通機關

本郡の交通機關として明治の初年の頃より水澤岩谷堂間に簡古なる人力、車馬等の往復を見たりしが、大正元年水澤岩谷堂軌道株式會社の創立を始とし、大正八年水澤岩谷堂自動車株式會社の設立を見、大正十二年より水澤氣仙間に自動車を通ず（水澤より岩谷堂米里を經て盛に至る）共に定期の運轉をなし旅客の利便は勿論貨物の運送に至大の便を與ふるに至れり。

四　郵便電信電話

本郡に於て郵便局の開設せられたるは明治八年二月岩谷堂局をはじめとす。爾後、米里、黒石、福岡羽田、伊手、野手崎の七局順次年を追つて設立せらる。電信取扱の開始は明治三十年一月岩谷堂局にして、米里、伊手の二局之に次ぐ。電話は大正元年十一月岩谷堂局に開始せられ、現在加入者百〇八名を算す、猶逐年其の增加を示せり。（一覽表參照）

郵便局一覽表

局名	局設置年月日	通常郵便	小包	電信	內國爲替	外國爲替	貯金	市外通話	特設電話
岩谷堂局	明治八年二月十三日	同上	明治廿九年七月一日	明治三十年一月二十一日	明治二十一年六月一日	明治三十二年一月一日	明治十八年十月一日	明治四十四年九月三十一日	大正元年十一月六日

米里局	明治八年十二月十六日	同上	明治二十九年七月一日	明治四十年十二月一日	明治二十四年一月十六日	明治二十五年七月十日	明治十八年十月一日
黑石局	明治三十四年二月一日	同上	明治三十四年二月一日	—	明治三十四年二月一日	—	明治三十四年二月一日
羽田局	明治三十五年三月一日	同上	明治三十五年三月一日	—	明治三十五年三月一日	—	—
伊手局	明治三十五年七月十六日	同上	明治三十五年七月十六日	明治四十二年三月十一日	明治三十五年七月十六日	—	明治三十五年七月十六日
口内局	明治三十四年二月一日	同上	同上	—	明治三十四年二月一日	同上	同上
野手崎局	明治三十七年三月十五日	同上	同上	—	明治三十七年三月十五日	同上	同上

備考

第六章　教　育

一、學校教育

一、寺小屋

明治五年學制頒布以前、各地方に於ける手習師匠の教育事業は讀書算の自宅教授なりき。師匠は多く神官●僧侶●醫師●有志者●浪士等にして、子弟は、八九歳より十四五歳稀には二十歳頃迄通年又は冬期の間、毎日朝食後より夕方まで、いろは數字名頭字、國盡、苗字盡、商賣往來、消息往來、庭訓往來農業往來、農家手習狀、實語教、童子教、近道子寶、江戸往來、楠狀、孝經、小學、四書、五經等につき素讀或は習字をなせり。算術は八算見一、平方術等を稽古せり。斯くの如き教育を受けたる者は、地方士分以上及び庶人の子弟にして、稀には仙臺の養賢堂に學ぶ者もありたり。女子は家庭にありて女大學、女今川、女庭訓の素讀、いろは名頭字等を手習せり。各地の重なる師匠を擧ぐれば

岩谷堂　齋藤文治●筒井只之丞●瀧川一郎●高橋新十郎●潮田惣左工門●大浪量平●後藤保城●生野陽太夫等は庶人の師匠、岩城一郎●三瓶敬一郎は士分以上に朱子家訓四書左氏傳春秋等の讀講及び習字を教授し、鄕古廉造●小野寺幸右工門●八重樫友吉郎●齋藤武左工門等は珠算を教授せり。

愛宕　高野六兵衛は家代々師匠にして、村内師匠中最も子弟多く、千葉善左工門之れに次き、菊池覺平●高橋萬四郎●菊池專一●小幡虎之助●覺法院吉田豐人亦師匠たり。此の他岩谷堂の人、三瓶卓之進は

下川原に出張教授せり。

羽田　修驗教光院は田茂山、同滿性院は羽黒堂にて、大番士鎌田氏は鶯澤にて、地頭宮城氏は黒田助にて子弟を教授し、此の他田中氏・伊藤氏も亦師匠たり。

黒石　鳥海源右工門は、大番組の武士にして子弟最多く、藤波湛舜・北川勢龜・榊滿壽・志村源太夫安彦術治・千葉氏亦師匠たり。

田原　二瓶敬齋は原體の人安政の頃より石山沼の尻にて子弟を教授し、志村義之助亦仙臺より來りて師匠たりしが、戊辰の役白河に戰死せり。早川嘉藏は手習師匠より石山小學校訓導となり明治十一年まで勤續せり。土谷村肝入小松常藏・千田常善院は土谷村の師匠にして子常壽院孫常磐人等相續きて師匠たり。二瓶寛藏は敬齋の父藤澤盛と共に原體の師匠たりき。大田代部落に於ては宮城好之助仙臺より來り耕田寺に塾を開きたるも戊辰の役白河に戰死し殘後志村長右工門續く。齋藤實氏の父某羽階長四郎等亦師匠たり。此の外小田代部落に及川丈吉・同龜治・同七郎治・伊藤鳳傳・小山學慶・紺野儀七・同周治同本平・菅原安之進あり。

藤里　佐々木利右工門は最古く高清水にて、佐々木深藏は鹿野にて子弟十數を、師匠榮之助は上袖野澤にて、菊池萬之助は上外野澤にて、高橋多利藏は本杵根にて子弟を教授し、慶應より明治初年頃まで菅原實玄は勝軍寺、相澤周右工門は下宿、同廣治は上臺、師匠清四郎は竹原田、菊池傳四郎は迎井澤にて各子弟を教へたり。又智福院は古來世々師匠なりき。

伊手　稲田惠俊は神職稲田家の人、文政・文久の頃四十年間子弟の教育に從事常に百餘名あり。其の孫直江は、明治初年迄子弟を教授し現今中老の人士は多く其の門に出つ。菅野直記・高橋西松も亦上伊手、下伊手の師匠なりき。

米里　野口秀輔・小成田直記・懸田理安・成田慶藏・新田淡齋・佐伯龍藏等は一年を通し子弟を教授し、遠き部落は是等師匠の出張教授を請ひたり。

玉里　仙臺の人松本新十郎は次丸ゴメンにて、玉崎の別當玉泉院及川玉樹氏宅にて、氏家岩五郎・及川東・門脇安右衛門等自宅に於て二三十人の子弟を教授せり。

梁川　菅生には菅生院住職あり、野手崎には常寶院神主阿部岩尾・多寶院神主富田直江・出入司菊池庸孝・小梁川家中鈴木權右衛門・同皆人菊池文七あり、栗生澤に佐藤磯之助ありて各子弟を教授せり。

福岡　當地方は士分と農工商とは道場を異にしたり。士分子弟師匠は大泉平馬、足輕及女子の師匠は折笠彦太郎・早坂健左衛門は足輕の一部及上口内小池水押の師匠、伊東梅元は口内町新田に、近藤俊治は仁田に、及川藤藏は杌木田に、昆野榮枝は下口内に、小野良道は同じく下口内に師匠たり。

廣瀬　吉祥寺大德寺は代々寺小屋、歌書に佐藤庄太夫、一の關に關村直記、輕石に神尾龜五郎等各私塾を開きて子弟を教授せり。

稲瀬　下三照に菊池理太郎、上三照大内順治、下門岡に千田又藏・千田豐三郎・内野壽海、上門岡に菊池直三郎・菊池玄良、内門岡に白井永雅、石關に菊池英齊・小原伊右衛門、内倉澤に及川東之丞、倉澤に及川惠隆・及川太平・廣野周吉・岩淵傳三郎・千田半五郎ありて讀書を教授し下門岡に菊池重兵衛上三照三浦萬三郎、外倉澤に川口彦兵衛、内倉澤に菅野圓助・菊池卯十郎・及川彌三郎ありて和算を教授

せり。而して大内千田(又)・菊池(英)・菊池(直)・及川(東)・川口・及川(太)等は著名にして子弟最多かりき。

教場は大抵疊又は薄縁を敷き平机を列へ跪坐し、師匠は交る交る子弟を自己の前に呼出して直接教授し、又年長優秀者をして年少者を教授せしめたり。毎年十二月廿五日の頃道場上りと稱し、子弟相集り四百文二百文位の金錢或は餅酒等を師匠に呈するを例とし、入學、退學の如き事此の際に行はれたり。其の外年始、端午、刈上の節には師匠宅にて餅を搗き、或は丸餅・鏡餅・酒等を持參して謝意を表し、休暇は是等の節又は毎月十五日及舊正月七日(廿五日天滿宮祭日)中に與へられたり。

當時又正月の頃七日乃至十日間一道場と稱し、師匠を聘し入費を共同支出し珠算・料理・謠曲の類を講習員中の宅に於て講習せり。恰も現今の通俗教育講習會の如きものなりき。

教科書として學制頒布當時まで用ひたるものを擧ぐれば左の如し。

明治元年頃には訓蒙窮理圖解上中下　天變地異

同　三年頃には地方往來　西洋事情初篇一―二、二篇一―四　輿地誌畧一―六

同　四年頃には泰西勸善訓蒙上中下　筆算通書一―六

同　五年頃には童蒙をしへ草初篇一―三　二篇一―五　絵入智慧の環初篇―四篇　祠の卷　萬國盡卷　日本國盡卷　名所の卷　筆算例題　史略一―四　地學のしをり　理學訓蒙上中下　訓蒙窮理問答一―四　物理訓蒙上中下篇

同　六年頃には筆算通書入門一―二　單語篇一―三　校正王代　覽一―五　六上下、七上下　後篇二、三上下　四上下　挿繪萬國通商往來　爪生氏日本國盡一―八　訓蒙博物問答一　二

同　七年頃には小學讀本一―五(水澤縣版)　筆算訓蒙一―二　數學教授本　世界國盡一―五　日本地誌略一―三　同附圖一―三　物理階梯上中下　博物新編一　二上下三

二、小學校

明治五年八月學制頒布に依り明治六年頃より小學校を建設す。

〔備考＝六年七月全國を八大學區に定め一大學區を三十二中學區とし、一中學區を二百十小學區とし全國に大學八校、中學は二百五十六校、小學校は五萬三千七百六十校人口六百につき小學校一つの豫定なりき。同年同月水澤縣より學區取締役を任命して擔當區域を巡視、監督せしめぬ。その下に七年學事世話係をおき八年六月に至り一、二、三等の學校係をおき只管校舍營造物の管理を分掌せしむ。九年學區取締及び教師を東京に招集し教育施設、學事に關する協議會を開く。六年より十五年に至る間は教科を分ちて、上等・下等とし八級より一級に至り半年毎に進級す。

十二年に至り義務教育年限十六ヶ月となる。十五年六月には教則改正の結果初等、中等、高等の三等とし、初等、中等は各六級より一級に至り、高等は四級より一級に至る。亦何れも半年毎に進級する制度なりき。此の間何々小學校、又は分校と稱したりき。〕

郡内に本校二十五、分校五に達し、十四年教育令時代には、校數三十二、兒童數男二千四百五十八、女三百六十四、教員四十八名あり。此の當時の教員は手習師匠を採用したる者多し。

〔備考＝十三年十二月改正教育令により義務教育年限三年とし、十五年に至り義務年限を三ヶ年乃至

四ヶ年とす。本郡に於ては十二年より學務委員の任命を見る。」

十九年小學校令發布、何々尋常小學校と改稱し、本郡には本校三十四、分校二、岩谷堂町に組合高等小學校あり。高等小學校設置せざる村の尋常小學校を卒へたるものは此の組合高等小學校に進む。二十七、八年頃より高等小學校設置せざる村は、尋常小學校の上に補習科二年乃至三年を置きたり。三十一年の頃より高等科を併置するもの漸次增加し、廢合亦行はれ、三十三年八月義務教育年限四年と郡に郡視學を置く。三十五年には、尋常小學校二十三、尋常高等小學校四、分校十、組合高等小學校一となり四十年四月改正により義務教育年限六ヶ年となり、四十一年より實施す。四十一年には組合高等小學校を廢し、尋常小學校二十一、尋常高等小學校七、分校十一となり、大正十三年四月には尋常小學校四、尋常高等小學校十三、分校二十五、學級數尋常科百三十四、高等科二十二、兒童數尋常科七千百六十四、高等科一千八十三、教員數本科正教員百二十、專科正教員十二、準教員十八、代用教員十七に至れり。

教科書として用ひたるもの左の如し。

明治八年頃には西國立誌編一―九　師範學校編小學讀本　筆算全書一　日本略史上、下　日本史略一―四　地理初步全　萬國地誌略一―五

同　九年頃には小學讀本一―六　小學算術書一―三

同　十年頃には三陸地誌略上、中、下

同　十一年頃には小學和算新書一―七　小學普通書學本一―五

同　十二年頃には日本外史一―二三

同　十三年頃には修身兒訓一―十

同　十四年頃には六諭衍義鈔　幼學綱要一―七　十八史略一―七

同　十五年頃には和漢孝義鈔一―二　生徒必携習字の手本一―四

同　十六年頃には言行類編　古今紀要一―四

同　十七年頃には小學筆算全書一―三

同　十八年頃には修身彙訓一―十　通常動物、植物、金石小誌三

同　十九年頃には小學習字帳

同　二十年頃には普通讀本一編上下……四編上下　小學珠算全書七

同　廿一年頃には日本讀本一―八

同　廿五年頃には國民修身書一―八

同　廿六年頃には日本修身書一―六

同　廿七年頃には小學國文讀本一―八　尋常小學習字帳一―五

同　廿九年頃には小學日本地理　小學外國地理　帝國小史　高等小學筆算教科書一―四

同　卅三年頃には小學新修身一―四　尋常(高等)國語讀本一―八　尋常高等小學習字帳一―八　小學國史一―四

同　卅六年頃には小學地理上下

同　卅七年頃には尋常高等小學修身書一―四　高等小學算術書一―四　尋常高等小學讀本一―八　同書ヰ方手本一―四上下　小學理科筆記帳一―四

明治四十二年頃には尋常高等小學修身書一―六（一―二）　尋常高等小學算術書三―六（一―二）

同　四十三年頃には尋常高等小學讀本一―十二（一―四）　同書ヰ方手本一―十二（一―四）　尋常高等小學地理一―二　尋常高等小學日本歷史一―二　尋常高等小學理科書一―二　尋常高等小學新定書帳男女共通及女子用

大正七年頃には尋常高等小學理科學習帳一―二　尋常小學國語讀本一年より逐次改正

同　五年頃には小學日本地理一―二　同外國地理一―二

同　十一年頃より尋常高等小學國史上―下

同　十二年頃より尋常小學理科尋四用

學校園實習地　各校には學校園の設あり、其の數十六、一千二百七十三坪あり、又高等科には農業を加設し、實習地反別田三百坪、畑反別三千三百八十四坪あり。

基本財産及學林　町村は學校教育の將來に備ふる爲め、學校基本財産の造成を圖り、總額現金一萬六千二百八十三圓餘、有價證券二千八百圓、土地百五町四反二畝廿四歩あり。樹栽地反別百三十七町五反四畝七歩、樹數十九萬三千五百十二本、其の成績頗る良し。

町村教育費　大正十一年度は十二萬圓を越え町村費の大半を占むるに至り、年一戸平均十五圓八十錢在學兒童一人十四圓餘にして、年々兒童數と共に膨脹するも設備相當に整ひ、四十二校六千〇十二坪兒童一人當り〇・七二坪校地二萬四千二百五十三坪兒童一人二坪九合にして狹隘を感せず。

兒童貯金　勤儉貯蓄の思想涵養の一法として、近來兒童貯金を奬勵し、現在總額一萬六千七百五十六圓、一人當二圓餘あり。

兒童保護會　明治三十八年の頃より創設せられ、今や各町村基金を造成し會費を共出し、學用品の外雨具其の他の日用品の給貸與をなす等成績見るべきもの少からず。殊に福岡村杁木田の如きは、基金一千六百餘圓を有し分校兒童全部に學用品の給與をなす。里人創設功勞者後藤玄達翁の爲めに分校々庭に頌德碑を建立せり。

學校衛生　學校教育の進展と共に、漸く重んぜられ明治四十年頃にはトラホーム檢診醫のみ設けたりしが、今や各校學校醫あり總員十一名年手當三十圓より五十圓を給せり。大正十三年三月二十四日江刺郡學校衛生會を組織し夫々活動するに至る。

岩谷堂尋常高等小學校　學級數二四、兒童數一、一五四、就學歩合九九・三三、出席歩九六・二三、經費二・五七七・一九〇圓教員高橋松治郎・千田豐三・小川道助・鹿野新八・菊地享治・千葉トヨ・及川清助及川清七・及川與吉・境田英夫・今野潔・今野春雄・及川與藏・菊地武直・佐藤德藏・八重樫武雄・遠藤トキエ・菅原フミヱ・阿部ミサホ・山内キユメ・高野貞藏・及川龜三郎・及川敬五・及川キヨシ・館澤テル・小野達雄・小野寺ミサホ・佐々木セツ。

愛宕尋常高等小學校　學級數一五、兒童數九〇六、就學歩合九九・七二、出席歩合九五・一六、經費一二、〇一八、五〇〇圓、教員高野俊治・菊池巳代治・菊池武樹・及川留平治・菊池昌治・菅原謙・千田正雄

阿部文夫●潮田カヨ●小澤テル●和川克郎●高野義雄●佐藤彦三●佐々木マリヤ●菅野庄作●菊地カツ

羽田尋常高等**小學校**　學級數一一、兒童數四九五、就學歩合九九●一七、出席歩合九七●〇〇、經費七、四六九圓四三〇、教員古玉賢治●齋藤節夫●菊地巽●荒川正雄●千葉サキヨ●及川英子●千葉忠之進●千葉亮壽●伊藤岩吉●矢吹久造

黒石尋常高等**小學校**　學級數八、兒童數四〇三、就學歩合九五●七四、出席歩合九六●〇五、經費六、〇〇五圓〇〇〇、教員成田讓●佐々木甚四郎●石川彦次郎●千田莊一●榊勳平●佐々木熊太郎●佐々木一郎北條ウメ●佐藤トヨ

小田代尋常高等**小學校**　學級數六、兒童數二六二、就學歩合九九●五七、出席歩合九四●八一、經費四、一一一圓九四〇、教員澤口瀧太郎●及川庄吾●千田義豐●橋村スヱ●紺野勝之進●高野佳爾

石谷尋常小學校　學級數六、兒童數二四三、就學歩合一〇〇●〇〇、出席歩合九五●六六、經費六、九四一圓二二〇、教員本校菅原藤太郎●及川祿郎●若松正八●小野タツ子●菅原カナメ●渡邊忠勇

大田代尋常小學校　學級數三、兒童數一三〇、就學歩合一〇〇●〇、出席歩合九五●九八、經費六、八五九圓二八〇、教員後藤伊勢之助●阿部キチヨ●橋村國雄●後藤サカキ

藤里尋常高等**小學校**　學級數九、兒童數四二六、就學歩合九九●七六出席歩合九六●〇七、經費七、一七八圓三〇〇、教員木村悉●菊地德兵衛●菅原恒●今野正庸●河東田五右工門●菅原千代子●木村チカ●菊地スヱ●菅原喜兵衛

伊手尋常高等**小學校**　學級數四、兒童數二三一、就學歩合一〇〇●〇〇出席歩合九六●〇六、經費四、三三三圓九〇〇、教員佐藤春雄●佐藤タツヨ●佐藤マサ●佐藤佐

上伊手尋常小學校　學級數四、兒童數二二三、就學歩合九九●二〇、出席歩合九四●四八、經費二、一五三圓七〇〇、教員佐川金松●菊地孫助●小野直雄●大平キヨシ

下伊手尋常小學校　學級數三、兒童數一二五、就學歩合一〇〇●〇〇、出席歩合九六●〇九、經費三、二四五圓五六〇、教員大平恒郎●菅原穩●佐藤ハツミ

人首尋常高等**小學校**　學級數一二、兒童數六〇三、就學歩合九九●五五、出席歩合九六●〇九、經費九、八四七圓〇〇〇教員千葉梅藏●菊地撰二●佐賀眞平●佐藤東吉●小野正人●小原精一●淺倉キヨシ●渡邊耕一●菅原東吉●千田寅藏●高瀨達郎●千葉務●小野トヨ

玉里尋常高等**小學校**　學級數一〇、兒童數五〇一、就學歩合九九●一五、出席歩合九五●八五、經費七、五一九圓七〇〇、教員本校　吉田豐●菊池與市●菅野晋助●佐藤淺之助●菅野政美●菅原ウタコ●佐藤リワ●菊地喜一●後藤アヤ●淺沼秀穗●佐藤萬吉

野手崎尋常高等**小學校**　學級數一三、兒童數五六二、就學歩合九九●五一、出席歩合九五●一五、經費一一〇七七圓〇一〇、教員杉田直吉●菊池龜覺●角南春瑞●菊池龜之助●鈴木與右工門●阿部眞臣●菊地肇伊達宗成●菊地トモ●佐藤マサノ●及川安治●最上ヨシ子●伊藤矩子●今野タケ●菊地睦●及川一雄

上口內尋常高等**小學校**　學級數一一、兒童數五一一、就學歩合九九●三一、出席歩合九三●四五、經費九、二六七圓九四〇、教員齋藤傳藏●近藤賢三●菅野本藏●千葉善作●昆野コト子●昆野倉吉●菅田幸男●菅村泰家●菊池正人●伊東祐司●新田サカノ●及川保男

廣瀨尋常高等小學校　學級數八、兒童數四〇〇、就學歩合九九●七七、出席歩合九四●七五、經費六、九二四圓五五〇、教員折笠榮●佐藤伊右工門●櫻井スミヨ●小原覺治●伊東祐一●草彌義章●後藤文吾

稻瀨尋常高等小學校　學級數一八、兒童數九二六、就學歩合九九●七三、出席歩合九五●三四、經費一三、一七三圓七八〇、教員本校及川恒孝●渡邊堅三郎●高橋清之丞●及川已代之丞●小澤利右工門●上野貞雄●菊池若龜●小野鐵彌●小野キヨセ●高橋長作●及川ノユミ●及川庄次郎●千田アヤ●白井憲阿●佐藤昌一郎●及川諫●高橋ケン●菊池チヤ●及川六三郎●堀込俊夫

教育功績者　是等教員中功績者として表彰又は叙勳せられたものは

明治卅七年言葉の泉賞與	岩手縣	高橋藤七
大正十一年銅製火鉢壹對賞與		
大正九年勳八等端寶章		
大正十三年從七位勳七等		
大正十一年銅製火鉢壹對賞與	江刺郡長	菅野庄作
大正十一年勳八等端寶章		
大正十年同		
明治卅四年金五圓賞與	巖手縣	伊藤岩吉
同　四十一年金貳拾圓賞與	同	古玉賢治
大正四年木杯壹組賞與	巖手縣	後藤伊勢之助
大正十一年銅製火鉢壹對賞與	江刺郡長	
明治卅四年金五圓賞與	巖手縣	齋藤傳藏
大正十一年銅製火鉢壹對賞與	江刺郡長	櫻井スミヨ
大正十三年二月十一日銀時計賞與	岩手縣	紺野啓三郎

三、高等女學校

岩谷堂町立岩谷堂實科高等女學校は、大正七年六月一日の開校にして、前身は明治四十二年小學校に附設せる女子實業補習學校なり。當初修業年限二ヶ年生徒定員九十名なりしを、大正十一年四月三ヶ年百二十名に變更し、經費八千二百五十餘圓を支出し、當時職員八名ありき。更に元郡立江刺蠶業學校々舍校地及金三千圓を郡より交付を受け校舍寄宿舍等を改造して九月生徒を收容せり。大正十二年三月七日修業年限を四ヶ年生徒定員百六十名變更の件認可せらる。本校創立以來の卒業生百七十名、郡内郡外各地にありて、或は教育に從事し、或は家庭の人となりて成績何れも優良なり。現在は在學生百四十二名職員校長高橋藤七、教諭大里文雄●同松尾ハル●同倉持イク●同伊藤梅吉●同及川庄三郎●同馬場トク助教諭佐々木ミツ●囑託教師小川道助の九名なり。

四、實業補習學校

時勢の進運に鑑み、郡は明治卅五年より毎年實業補習學校に對し、三百圓乃至百圓の補助費を支出し普及奬勵の結果、明治四十四年の頃には十七校の設置を見たるも、中には名實伴はざるものあるを以て改善を促せるに却て大正元年に至り廢校するもの續出したるが、大正十三年に至り各町村に補習教育機關の設置を見、愛宕●黑石●田原●藤里●伊手●人首●玉里●梁川●廣瀨●口内●稻瀨の各農業補習學校十三、羽田農工補習學校一、岩谷堂農業補習學校一、學級數一五、生徒數七六五、教員數七八、經費七、

四八八圓餘、是等の學校は新令に依る修業年限二年又は三年の通年制にして皆成績良好、殊に人首校は大正十一年十月文部省より表彰せらる。

五、元江刺鑛業學校

元郡立江刺鑛業學校は明治四十二年四月一日の開校にして修業年限本科二ヶ年別科六ヶ月定員八十名なりしが、入學志願者漸次減少するを以て大正十一年三月遂に廢校となる。

二、社會教育

私立江刺圖書館

岩手縣教育會江刺郡教會の經營にして、岩谷堂尋常高等小學校に設置し、明治四十二年四月開館、經費毎年百圓、藏書一、九九三冊、巡回文庫四、郡内を四區に分ち各區三ヶ月間の豫定にて回覽す。

町村立圖書館

學制頒布五十年を記念し且は社會教育の施設として、各町村に圖書館を設置し、大正十年十二月より大正十三年三月迄に開館したるもの十三、經費二千三百五十圓、職員は三十一名ありて小學校教員兼務す。

教育會

從來江刺郡教育會の私設ありて、明治三十二年より四十一年迄二十圓乃至百五十圓の郡費補助をなせるが、明治四十二年以來岩手縣教育會江刺郡郡會となり、成績益々擧れるを以て、尚郡費より毎年三百圓乃至七百圓を補助して、教員の修養及社會教育事業に當らしめ、現在會員一九五名、大正十三年度豫算九百圓、主なる事業は展覽會、講習會、講演會、教育研究、管外視察、郡誌編纂等なり。猶明治四十一年より郡内を東部(米里村・伊手村・藤里村・玉里村)西部(岩谷堂町・愛宕村・稻瀨村)南部(黑石村・田原村・羽田村)北部(梁川村・福岡村・廣瀨村)の四支會に分ち會員修養、社會教育等の施設をなす。

青年團

從來各町村に青年會の設ありしが、大正五年五月江刺郡青年會聯合會を組織し、次いで嚴手縣青年團體聯合會の設けらるゝに及び江刺郡部會に改め部長之が會長たり。郡制時代大正六年より毎年百圓乃至百五十圓を補助す。年々施設せる主なる事業は、補習教育・貯金・圖書回覽・講演會・競技會・視察旅行試作・植林・基金造成・共同作業・公共事業幇助・風紀改善等にて大正十一年各團體經費總額一、五一五圓、資產現金一、〇八七圓七一〇、有價證券五〇圓、造林樹數三、七〇〇本、畑二反歩、團體數一三、團員數二、二七四にして精神修養を重んじ奉公の誠を盡すを第一義とす。梁川青年團の如きは、明治神宮造營工事に奉仕し爾來年々五、六名の團員をして代參せしむ。先年日本青年會館建設の擧あるや、團員各自勞役に服し其の所得金を以て一、七三三圓を醵出したり。大正十三年二月十一日其の會の施設及會員指導宜しきの故を以て團長菊池龜覺は岩手縣青年團聯合會長牛塚虎太郎(本縣知事)より表彰せられ同年十二月十五日には縣正廳に於て東宮殿下御成婚記念として時事新報社義勇表彰會より社會公共事業の功績顯著なるの故を以て表彰せられ東宮並に妃殿下の御肖像を後藤(祐明)本縣知事より傳達せらる。尚米里青年團は大正十二年三月二十八日付を以て修養並訓練の成績顯著の故を以て文部・内務兩大

臣より表彰せられたり。

處女會

從來各小學校は、冬季卒業女子を集めて、裁縫等の補習をなせるが、大正七年以來處女會設置奬勵の結果、現在は其の數十三、會員數八三一、大正十一年度町村處女會經費總額三五一圓、年々施設せる主なる事業は、家事裁縫●讀算の補習●貯金●講習講話會●圖書回覽●基金造成共同作業●製作品展覽會等にして成績の見るべきもの尠からず。大正十三年五月十一日江刺郡聯合會處女會の組織を見聯合運動會其の他講習會等着々活動の域に入れり。

少年團

模範青年養成の目的を以て組織せるもの、岩谷堂●黒石●田原●玉里●梁川の一町三ヶ村團員は主として小學校兒童其の數一千餘名、行事は講話●遠足●雜誌回讀等主なるものなり。

田原少年團の如き二、三年この方年々十數里の氣仙海岸に海濱學校生活をなせり。

戸主會

本郡に於ては縣が民力涵養の趣旨に基き、大正八年八月六日羽田村の組織を始めとし、漸次各町村に及ぼし、同年十二月二十日を以て全郡の組織を完了したり。

戸主會は其の目的を貫徹するため、規約を定め其の實行に付き毎年春秋二回總會を開き、實行方法に關する協議を爲し、着々實績を擧げつゝあり、實行事項の要項として、一忠君愛國の精神を涵養すること、二敬神崇祖の念を養成すること、三公共及公德の觀念を養成すること、四弊風の改善に努むること五勤儉貯蓄を實行すること、六生活を簡素にすること等にして、其の事業の一たる大戰記念戸主會貯金は縣下第一位の良成績を收め、大正十二年十二月末現在に於て、金九萬參千四百貳拾壹圓に上り尙繼續實行中にあり。

現在戸主會數　十三。

會員戸數　七千六十六戸。

貯金實行人員　五千九百八十三人。

大正十三年十二月現在貯金高十一萬四千四十五圓五十七錢九厘となる。

歷代郡視學表

第十五大區學區取締	小澤藤左衛門	明治六年七月	
第十六區大學區取締	菊池庸孝	明治六年七月	
學區取締	佐川五郎七	同　八年	
江刺郡視學	北村爲清	同　三十三年四月一日	
同	小野純一郎	同　三十五年六月十六日	
同	齋藤館太郎	同　三十九年九月十二日	
同	猪狩卯兵衛	同　四十一年十一月十四日	
同	小林庄助	大正三年八月三日	
同	吾妻寅藏	同　五年四月十七日	
同	三浦準平	同　七年三月	

江刺郡視學	三田靈	大正八年九月一日	
同	高橋松治郎	同　十一年二月十三日	
同	多田金三郎	同十二年三月二日	

第七章　衛生　警察　兵事

一、衛生

明治維新前後は衛生思想甚だ低級にして痘瘡患者を疱瘡神と擬へ、之に逆へば病重ると稱し飲食物其他患者の意の儘に任せ或は之を負うて隣家を訪ぬる等病毒の蔓延を敢てなし、熱病流行期には「ニンニク」を門戸に掛し惡氣を掃ひ豫防の効ありと信じ、不幸にして惡疫其他の病魔に侵さるゝあれば『病送り』と稱して辻角に赤飯、御幣等を供へて病の輕減を祈り、總べて惡疫は神罰のなすところとなし加禱祈禱を重んじ看護の術を知らず、爲めに巫女・信徒の之に乘じて金錢物品を貪るが如きに至れり。

明治の中頃より衛生思想漸く發達し三十年頃に及び交通・教育・産業の普及發達に伴ひ一段の向上を見るに至り春秋二季の大清潔法、種痘法施行及傳染病豫防法等の實施により各家庭及公衆衛生發達進歩し今や加禱祈禱の如き陋事漸次減退するに至れり。

一、傳染病

本郡に於ける傳染病としては往古より疱瘡・赤痢(あかばら)腸室扶斯(ぱう・熱病)等の諸病ありて年々死者を出すは遺憾なりとす。

過去五ヶ年間に於ける本郡傳染病患者發生狀況を示せは左の如し。

年別	赤痢		腸チフス		パラチフス		實扶内臥亞		痘瘡		計		備考
	發生	全治	死亡	發生	全治	死亡	發生	全治	死亡	發生	全治	死亡	
大正七年	一	一	一	一〇	三	七	二	二	一	一六	八	八	
八	三	二	一	二	二	一	二	一	一	二二	一四	八	

大正八年	四	四	ー	一〇六	八一	二五	ー	ー	ー	一四	一〇	四	ー	ー	ー	一二四	九五	二九	腸チフス中米里村最モ多ク五十二名ナリ
大正九年	一三	一〇	三	五六	三一	二五	四	四	ー	一二	八	四	ー	ー	ー	八五	五三	三三	
大正十年	三八	三三	五	一五〇	一二三	二八	九	九	ー	五	五	ー	ー	ー	ー	二〇二	一六九	三三	腸チフス中岩谷堂町最モ多ク九十六名ナリ
大正十一年	一	一	ー	一九	九	一〇	三	三	ー	一三	九	四	ー	ー	ー	三六	二二	一四	

其の他病勢又は傳染力の比較的緩慢なる傳染病ありて、其の被害又尠しとせす。本郡に古くより流行しあるものは、肺炎、肺結核、百日咳、痲疹、トラホーム、流行性感冒、花柳病、癩病等なり。之れ等の豫防並に治療上に關しては、別に定めらるゝ規則に係るものゝ外、各自に於て相當防衛上注意しつゝあり。

トラホーム

既往五ヶ年間に於ける本郡の檢診並治療の成績を掲くれは左の如し。

年別	期別	壯丁 受檢	壯丁 患者	壯丁 轉歸	接客業者 受檢	接客業者 患者	接客業者 轉歸	工場從業者 受檢	工場從業者 患者	工場從業者 轉歸	其ノ他 受檢	其ノ他 患者	其ノ他 轉歸	計 受檢	計 患者	計 轉歸
大正七年	一回	二九三	四九	二六	二〇二	一三	一四	二二四	三四	一七	一〇四	一三	一七	七二三	一三八	七四
	二回	三三六	四六	三六	二三四	八	五	五二	九	二	九五	八	八	七一七	八一	五二
大正八年	一回	三四〇	四〇	二四	二〇三	三	二	二五	一	一	七一	四	五	七三九	四八	三〇
	二回	三六七	三七	三三	一八三	一六	六	四三	三	三	一三七	二	二	七三〇	六〇	四〇
大正九年	一回	三二一	一五	一四	三三一	一二	四	六八	二	二	一七六	一一	一〇	六九六	四〇	三〇
	二回	四二〇	五二	二一	二四〇	一五	三	六〇	一二	一二	一二六	六	四	八四六	八五	三九
大正十年	一回	三二九	三八	二六	二八〇	一四	五	三七	三	二	一〇五	三	三	七五〇	五八	三六
	二回	四一六	四九	三一	二七八	一五	七	六二	八	ー	一五八	八	五	九一四	八〇	四二
大正十一年	一回	二五八	五〇	三〇	一三二	一一	七	四七	五	四	一四六	九	八	六八三	七四	四九
	二回	三九七	三〇	ー	一九一	一八	ー	三五	ー	ー	六七	三	ー	七九〇	五一	ー

備考　大正十一年第二回分轉歸調査未了ニ付之ヲ掲ゲズ

流行性感冒は大正七年春頃より惡性の流行性感冒郡内に猖獗を極め、之に侵されたるもの多く爲に靑壯年者の死亡したる者少からず。左に其の數を示す。

年別	人員
大正七年	一四四
大正八年	一〇九
大正九年	一九一
大正十年	六四
大正十一年	七四
計	五八二

二、衛生機關

◈**衛生組合**　郡内各町村には明治三十二年縣訓令に基き衛生組合の設あり、町村當局を援け傳染病豫防に關すること清潔方法施行に關すること、其の他衛生に關する諸般の事務に當り其の成績觀るべきものあり。

◈**隔離病舍**　傳染病豫防法に依る傳染病患者は、豫防上隔離を確實にすへきは法の命する所にして、市町村に傳染病院又は隔離病舍設置の義務あり。本郡に於ては各町村共殆んと隔離病舍の設け成るも、只黒石廣瀬の二ヶ村に未だ設置を見さるは遺憾とする所なり。岩谷堂町愛宕村は大正九年に於て隔離病舍組合を組織し病舍を統一し設備を完全にせり。

醫師藥劑師產婆　本郡に於ける醫師藥劑師產婆配在の狀況は左の如し。

	醫師	藥劑師	產婆
岩谷堂	一〇	二	五
羽田	二	ー	ー
田原	ー	ー	一
愛宕	二	ー	一
黒石	ー	ー	ー
藤里	一	ー	二

（大正十一年十二月末現在）

伊手	一	一	一	米里
玉里	二	一	三	一
福岡	二	一	一	梁川
稻瀨	一	一	三	廣瀨

三、其他の施設

產婆看護婦ノ養成　本郡に於ては產婆看護婦の養成を目的とし、明治三十二年度より同三十八年度に至る七ヶ年度間、一ヶ月一人金六圓の補助金を交付し、岩手病院に入所せしめ之を養成したるに、其の修得したるもの十二名を出し、今尙斯業に從事しつゝあり。

二、警　察

一、沿　革

明治九年四月二十五日磐井縣を廢し陸中國磐井、膽澤、江刺の三郡を本縣に屬せらる。明治九年五月四日舊磐井縣巡査七十八名を本縣巡査に採用し二名を乙第二出張所岩谷堂屯所に配置せらる。明治九年八月十九日警部巡査定員改正につき岩谷堂屯所に巡査四人人首分屯所に巡査三人を配置せらる。同年十二月四日警察出張所屯所位置改正につき岩谷堂屯所は第四出張所黑澤尻に人首分屯所は第八出張所橫田被管同年同月二十日水澤屯所を廢し更に警察出張所を置き岩谷堂屯所及人首分屯所之に被管明治十五年六月岩谷堂分署を置き、本郡一圓を管轄し、同十九年岩谷堂警察署と爲り、今日に至る。現在駐在所十二を管轄し巡査二十三人を配置せり。

二、一般ノ狀況

警察事故に關する一般狀況は人智の發達と生計狀態とにより漸次變化しつゝあるものゝ如し。即ち放火、强竊盜等の重大犯は逐年減少の傾向を呈し、智能犯たる文書僞造詐僞等の如きもの多數を占むるに至れり。又主として司法警察に重きを置きたる警察事務は漸次行政警察に迨ひ、最近に至りては衛生上の施設、火防及人事等に亘り人事相談所を附設して救濟の途を講するに至れり。

三、犯罪者數

岩谷堂警察署の記錄に依るに同署開設以來の犯罪者の種類人員左の如し。

放火	一四	詐僞取財	二〇七	私印盜用	九
强盜	二	賭博	二四〇	貨幣僞造	一
窃盜	五六三	毆打	四八	家宅侵入	一五
盜伐	一〇六	過失	九	恐喝取財	一四
委托物毀消	一七	官文書僞造	七	脅迫罪	一一
誣告罪	六	私文書僞造	八	遺失物漂流物隱匿	二六
冒認罪	二	官吏抵抗	五	姦通	一三
拐帶	五	墮胎	六	强姦	一

四、防火設備

消防組は各町村に設置あり。即ち組數十三組にして組頭十三人、小頭三十九人、消防手九百二十五人あり。大正十三年度に於ける警備費は金七千八百三十六圓四十錢にして各組共漸次組織を擴張し設備を

整ひ萬一の用に供し年々消防演習を行ひ訓練に努め平素は火盜難の豫防衛生施設等に盡力す。

三、兵事

明治五年十一月廿八日徴兵令布かれ國民皆兵の制となれるがその當時は一家の戸主官吏嗣子承祖の孫獨子獨孫及父兄に代りて家政を取るものは之を免じ又特に何人にても代人料若干金を納付する者は兵役を免るゝを得しめたり。

同十六年に至り之に改正を加へ戸主の年齢六十年以上の者の嗣子並に戸主の一部分のみを免除することゝなしなしたり。

後更に改めて不具廢疾及身體虛弱等により兵役に堪へざる者又は罪辟に觸れて兵役に就くの名譽を有せざるものを除く。

徴兵令實施當時は兵役の義務を解せざる者多く之れが忌避の策を講じ或は徒に廢絶家を再興し或は他家の養子となり或は神佛に祈願し服役を免れんとするの傾向ありしが年を經るに從ひ普通教育の普及發達と共に兵役義務の眞義を解するに至りこの弊風次第に遠ざかり日清日露の役起るや義勇奉公の念盛に起り今や兵役に就くは男子の本懷と心得奮つて應募するに至れり。

在郷軍人數、現役軍人數、戰役功勞者、町村軍人分會長、戰死者を擧くれば左の如し。

一、在郷軍人一覽表

町村名	陸軍				海軍			
	將校	下士	兵卒	計	將校	下士	兵卒	計
岩谷堂町	△八	△八九	△一八五	△二〇一	一	△一三	△四七	△一五〇
愛宕村	△一三	△七一三	△二〇八	△二一六	一	△一	二	△二
羽田村	一	△四四	△一〇一	△一〇五	一	一	五	六
黑石村	△一一	△一六	△四三	△四五	一	一	二	五
田原村	一	△一一	△八〇	△八一	一	一	二	二
藤里村	△三	△七八	△五一	△六一	一	二	二	二
伊手村	△一	△三二	△一三〇	△一三四	一	二	二	四
米里村	一	△一二	△一三〇	△一三一	一	一	△一三	一三
玉里村	△一二	△三四	△五五	△五九	一	三	一	四
梁川村	一	△六七	△一七二	△一七八	一	一	二	三
福岡村	一	△三八	△九八	△一〇一	一	△一九	一	一九
廣瀨村	一	二	六七	六九	一	一	二	二
稻瀨村	△一三	△六六	△一四〇	△一四七	一	△二四	△二三	△四七
計	△一六	△五〇七二	△一三九二四	△一四五九一六	一	△二八	△七三	△一六二

二、町村別現役軍人數

町村名	陸軍				海軍			
	將校	下士	兵卒	計	將校	下士	兵卒	計
岩谷堂町	一	三	二二	二六	一	三	八	一一
愛宕村	一	二	九	一一	一	五	七	一二
羽田村	一	一	九	一〇	一	一	二	三
黑石村	一	七	五	一二	一	四	二	六
田原村	二	二	二六	三〇	一	三	七	一〇
藤里村	一	一	一一	一二	一	二	一	三
伊手村	一	一	一四	一五	一	二	四	六
米里村	一	一	一九	二一	一	二	四	六
玉里村	一	二	一三	一五	一	二	四	六
梁川村	一	二	三二	三四	一	一	五	五
福岡村	一	一	一六	一六	一	四	一六	二〇
廣瀨村	一	四	一五	一九	一	三	七	七
稻瀨村	一	四	一七	二一	一	六	一一	一七
計	四	三〇	二〇八	二四二	一	三七	七五	一二

三、各町村軍人分會長名

岩谷堂町	三等軍醫	山本信之助	
羽田村	砲兵上等兵	高橋昌司	
田原村	步兵一等卒	菅原武雄	
伊手村	騎兵特務曹長	及川專治	
梁川村	步兵少尉	佐藤總吉	
愛宕村	砲兵少尉	小澤藤作	
黑石村	工兵上等兵	佐々木英之逞	
藤里村	步兵軍曹	佐藤留治	
米里村	砲兵伍長	菊池準一	
福岡村	步兵上等兵	宍戸久之丞	
廣瀨村	上等看護長	今春倉吾	
稻瀨村	輜重兵少尉	上野貞雄	

四、戰功者戰時關係受賞者

岩谷堂町　明治二十七八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
功七級	一	工兵第二大隊	工兵軍曹	千葉平右衛門
〃	勳八等	步兵第十七聯隊	步兵上等兵	石川正吉
〃	勳八等	步兵第十七聯隊	步兵一等卒	菊地寅藏
〃	勳八等	步兵第十七聯隊	步兵一等卒	大久保逢二

明治三十七八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	旭日章勳六等	第七師團彈藥大隊	三等獸醫	菅原忠左衛門
〃	旭日章勳六等	第八師團臨時馬廠	三等獸醫	相原伊三治
〃	瑞寶章勳六等	第十三師團糧食縱列	三等獸醫	菊地留五郎
〃	旭日章勳六等	第八師團第四補助輸卒隊	騎兵少尉	小泉明治郎
功六級	旭日章勳六等	步兵第二十六聯隊	步兵特務曹長	及川久藏
功七級	旭日章勳七等	步兵第五聯隊	步兵軍曹	菊地要之助
功六級	旭日章勳七等	步兵第五聯隊	步兵軍曹	菅原半兵衛
〃	瑞寶章勳七等	步兵第五聯隊	步兵伍長	千葉泰
〃	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵伍長	千葉伊勢治
〃	旭日章勳七等	步兵第五聯隊	步兵軍曹	佐藤辰吉
〃	旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵伍長	刀根時三郎
〃	旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵伍長	菅原新左衛門

功七級

旭日章勳七等	砲兵第八聯隊	砲兵軍曹
旭日章勳八等	第八師團糧食縱列	輜重兵伍長
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	二等看護長
瑞寶章勳七等	第八師團憲兵隊	憲兵曹長
旭日章勳七等	第八師團第五補助輸卒隊	憲兵軍曹
瑞寶章勳七等	第七師團憲兵隊	憲兵軍曹
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵伍長
瑞寶章勳七等	步兵第五聯隊	步兵軍曹
瑞寶章勳七等	步兵第五聯隊	步兵軍曹
旭日章勳七等	步兵第四聯隊	步兵軍曹
旭日章勳七等	步兵第五聯隊	步兵軍曹
功六級		
功七級	砲兵第十九聯隊	砲兵軍曹
旭日章勳七等	步兵第五聯隊	步兵上等兵
旭日章勳八等	步兵第五十二聯隊	步兵上等兵
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵上等兵
旭日章勳八等	後備步兵第五聯隊	步兵上等兵
功七級		
旭日章勳七等	步兵第五聯隊	步兵上等兵
瑞寶章勳八等	第八師團衛生隊	步兵上等兵
旭日章勳八等	第八師團電信隊	工兵上等兵
旭日章勳八等	第八師團糧食縱列	輜重兵上等兵
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒

菊地圓治	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
飯森喜助	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊
潮田琅治郎	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
齋藤增三郎	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
菊池太郎左工門	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊
本田幸十郎	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
小松庄四郎	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
菱沼喜惣治	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊
菊池三右衛門	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
及川吉三郎	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊
川村藤助	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
和賀卯左衛門	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊
菊地仁三郎	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
高野松右衛門	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊
千葉文一郎	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
菅野三之助	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊
菅原貞治郎	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
菊地專藏	旭日章勳七等	步兵第五聯隊
千葉十郎右衛門	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊
千葉德兵衛	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
千葉清四郎	旭日章勳八等	步兵第五聯隊
高野和五郎	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊
梅津知利	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊
佐藤德治	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊

旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
瑞寶章勳八等	騎兵第八聯隊	騎兵一等卒
瑞寶章勳八等	工兵第八大隊	工兵一等卒
瑞寶章勳八等	輜重兵第八大隊	輜重兵二等卒
旭日章勳八等	輜重兵第七大隊	輜重兵二等卒
旭日章勳七等	後備步兵第五聯隊	步兵一等卒
旭日章勳八等	後備步兵第五聯隊	步兵一等卒
旭日章勳八等	後備步兵第五聯隊	步兵一等卒
旭日章勳八等	後備步兵第五聯隊	步兵一等卒
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
瑞寶章勳八等	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒
旭日章勳八等	步兵第五十七聯隊	步兵一等卒
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
旭日章勳八等	第八師團砲兵彈藥大隊	砲兵一等卒
旭日章勳八等	砲兵第八聯隊	砲兵一等卒
旭日章勳八等	第八師團經理部	一等縫工卒
旭日章勳八等	第八師團糧食縱列	輜重輸卒
旭日章勳八等	第八師團彈藥大隊	砲兵輸卒
瑞寶章勳八等	後備步兵第五聯隊	步兵一等卒

横山庄助	高野彦惣	佐藤喜三郎
小松原留吉	及川一治	八重樫利七
高野彦惣	及川一郎	小野寺清四郎
及川一治	佐藤喜三郎	木村亘
及川一郎	八重樫利七	小澤與三郎
佐藤喜三郎	小野寺清四郎	佐藤丑五郎
八重樫利七	木村亘	佐藤金之助
小野寺清四郎	小澤與三郎	菊地德治
木村亘	佐藤丑五郎	菊地寅右衛門
小澤與三郎	佐藤金之助	佐々木令朝治
佐藤丑五郎	菊地德治	阿部久太郎
佐藤金之助	菊地寅右衛門	遠藤德太郎
菊地德治	佐々木令朝治	菅原東五郎
菊地寅右衛門	阿部久太郎	菊地彌四郎
佐々木令朝治	遠藤德太郎	菊地忠治郎
阿部久太郎	菅原東五郎	遠藤清治
遠藤德太郎	菊地彌四郎	高橋貞治
菅原東五郎	菊地忠治郎	熱海幸作
菊地彌四郎	遠藤清治	高野恒右衛門
菊地忠治郎	高橋貞治	
遠藤清治	熱海幸作	
高橋貞治	高野恒右衛門	
熱海幸作		
高野恒右衛門		

瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	乃高白菅野遠原清宮
瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	阿部根稲土愛太郎
瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	尖戸右衛門治吉
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊平迎勇助吉
旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊地蹴悠治
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	小石井文治郎
瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊地原八百藏
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	砲兵輜卒	高野東松貞
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	佐藤菊治郎
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	工兵一等卒	伊藤寅治郎
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	輜重輜輜卒	菅野菊治郎
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	輜重輜輜卒	原林太郎
瑞寶章勳八等	歩兵第廿一聯隊	輜重輜輜卒	海原富治郎
瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	輜重兵上等兵	東海林藏
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	輜重輜輜卒	菅原清四郎
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	輜重輜輜卒	伊藤
瑞寶章勳八等	第八師團砲兵彈薬大隊	輜重輜輜卒	菅野菊
瑞寶章勳八等	第八師團砲兵彈薬大隊	輜重輜輜卒	佐藤
旭日章勳八等	第十三師團兵站部	工兵一等卒	高野
瑞寶章勳八等	第八師團糧食縱列	砲兵輜卒	菊地
旭日章勳八等	第八師團彈薬大隊	砲兵輜卒	菊野
旭日章勳八等	第八師團彈薬大隊	歩兵一等卒	石井
瑞寶章勳八等	第八師團糧食縱列	歩兵一等卒	菊地
旭日章勳八等	第八師團補助輸卒隊	歩兵一等卒	菊地
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	歩兵一等卒	菊地
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	歩兵一等卒	尖戸
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	歩兵一等卒	阿部仁
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	歩兵一等卒	乃根稲
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	歩兵一等卒	高土
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	歩兵一等卒	白遠
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	歩兵一等卒	菅野
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	歩兵一等卒	渡原
瑞寶章勳八等	第十三師團兵站部	歩兵一等卒	菅石
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	歩兵一等卒	川
瑞寶章勳八等	第十三師團兵站部	歩兵一等卒	遠原
瑞寶章勳八等	第十三師團兵站部	歩兵一等卒	幸保
瑞寶章勳八等	歩兵第廿一聯隊	歩兵一等卒	末
瑞寶章勳八等	第八師團野戰病院	歩兵一等卒	清
旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	看護卒	吉平
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	看護卒	平
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	千鈴
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	柏葉
旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	地
旭日章勳七等	後備砲兵第一聯隊	歩兵一等卒	勇
旭日章勳八等	後備工兵第二大隊	砲兵一等卒	今
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	傳
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	輜重輜輜卒	蔵

瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	輜重輜輜卒	千鈴
旭日章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	葉
旭日章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	地
旭日章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	勇
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	今
旭日章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	傳
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	蔵
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	菅
瑞寶章勳八等	第十三師團兵站部	輜重輜輜卒	吉鈴
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	木
瑞寶章勳八等	第十三師團兵站部	輜重輜輜卒	田
瑞寶章勳八等	第十三師團兵站部	輜重輜輜卒	原
瑞寶章勳八等	歩兵第廿一聯隊	輜重輜輜卒	豐
瑞寶章勳八等	第八師團野戰病院	輜重輜輜卒	菊
旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	輜重輜輜卒	川
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	看護卒	菊
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	看護卒	伊
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	藤
旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	松
旭日章勳七等	後備砲兵第一聯隊	歩兵一等卒	佐
旭日章勳八等	後備工兵第二大隊	歩兵一等卒	治
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	正
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	輜重輜輜卒	五

瑞寶章勳八等	第七聯隊	輜重輜輜卒	郎
旭日章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	郎
旭日章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	郎
旭日章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	郎
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	郎
旭日章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	郎
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	郎
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	郎
瑞寶章勳八等	第十三師團兵站部	輜重輜輜卒	郎
瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輜輜卒	郎
瑞寶章勳八等	第十三師團兵站部	輜重輜輜卒	郎
瑞寶章勳八等	第十三師團兵站部	輜重輜輜卒	郎
瑞寶章勳八等	歩兵第廿一聯隊	看護卒	郎
瑞寶章勳八等	第八師團野戰病院	看護卒	郎
旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	郎
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	郎
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	郎
瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	郎
旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	郎
旭日章勳七等	後備砲兵第一聯隊	砲兵一等卒	郎
旭日章勳八等	後備工兵第二大隊	工兵一等卒	郎
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	郎
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	輜重輜輜卒	郎

第七章　衛生　警察　兵事

〃	旭日章勳八等	後備步兵第五聯隊	步兵一等卒	岩崎幸作	
〃	旭日章勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	今井惣之助	
〃	寶冠章勳八等		赤十字看護婦	逢下トラ	

愛宕村 明治二十七八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	旭日章勳八等	第二軍司令部	憲兵上等兵	相原五郎
〃	瑞寶章勳八等	近衛步兵第四聯隊	步兵上等兵	小澤懷德
〃	瑞寶章勳八等	步兵第十七聯隊	步兵一等卒	菊地庸治
〃	旭日章勳八等	步兵第十七聯隊	步兵上等兵	佐々木友治
〃	瑞寶章勳八等	步兵第十七聯隊	步兵上等兵	佐々木勘兵衛

明治三十七八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	旭日章勳八等	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	紺野勇吉
〃	旭日章勳七等	後備步兵第五十六聯隊	步兵上等兵	小澤辰三郎
〃	旭日章勳七等	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	高橋萬治郎
〃	旭日章勳八等	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	小澤萬右衛門
〃	瑞寶章勳八等	後備步兵第九十六聯隊	步兵一等卒	佐々木長左衛門
〃	瑞寶章勳八等	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	佐々木滿之助
〃	瑞寶章勳八等	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	佐藤惣兵衛
〃	瑞寶章勳八等	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	小澤巳之吉
〃	瑞寶章勳八等	後備步兵第五十六聯隊	輜重輸卒	高橋七兵衛
〃	瑞寶章勳八等	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	佐々木仁三郎
〃	旭日章勳七等	後備步兵第五十六聯隊	步兵曹長	佐藤永七
〃	旭日章勳七等	第十五師團補助輸卒隊	步兵伍長	高橋登一郎
〃	瑞寶章勳八等	第十五師團補助輸卒隊	輜重輸卒	菊地茂兵衛
〃	旭日章勳八等	騎兵第八聯隊	騎兵一等卒	高橋喜善
〃	瑞寶章勳七等	國民步兵	騎兵伍長	鈴木太郎右衛門
〃	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵上等兵	佐々木友治
〃	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵上等兵	菊地喜平治
〃	旭日章勳八等	第八師團第十九聯隊補助輸卒隊	步兵伍長	小澤巳三郎
〃	瑞寶章勳八等	第八師團第十九聯隊補助輸卒隊	輜重輸卒	佐々木久
〃	旭日章勳八等	第八師團第十九聯隊補助輸卒隊	輜重輸卒	及川養作
〃	瑞寶章勳八等	工兵擔任第二十三聯隊補助輸卒隊	輜重輸卒	高橋永助
〃	旭日章勳八等	第六聯隊補助輸卒隊	輜重輸卒	佐々木庄治郎
〃	旭日章勳八等	第六聯隊補助輸卒隊	輜重輸卒	佐藤清三郎
〃	旭日章勳八等	第六聯隊補助輸卒隊	輜重輸卒	高橋吉右衛門
〃	瑞寶章勳八等	第八師團補助輸卒隊	輜重輸卒	高橋竹松
〃	旭日章勳八等	第九師團補助輸卒隊	輜重輸卒	佐々木角左衛門
〃	旭日章勳八等	第五師團補助輸卒隊	輜重輸卒	菊地喜三治
〃	瑞寶章勳八等	第十師團補助輸卒隊	輜重輸卒	菊地初吉
〃	瑞寶章勳八等	步兵第五十七聯隊	步兵二等卒	佐藤養作
〃	旭日章勳八等	步兵第五十七聯隊	步兵上等兵	高橋初吉
〃	旭日章勳八等	後備步兵第十七聯隊	步兵一等卒	石川九右衛門
功七級	旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵上等兵	菊地金之助
功七級	旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵上等兵	岩淵德治
				高橋寅吉

功七級

旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	高橋長三郎
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	小澤豐治
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊補充大隊	紺野才兵衛
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	佐藤東三郎
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	小澤謙吉
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	及川幸吉
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	菊地豐治
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	佐藤寅之進
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	千葉武之進
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	熊谷近之丞
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	昆野倉治
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	後藤清五郎
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	高橋文三郎
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	吉田清一郎
旭日章勳七等	歩兵第五聯隊	佐嶋八重吉
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	及川龜治
旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	佐藤榮治
旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	高橋治右衛門
旭日章勳八等	後備歩兵第六十二聯隊	菊地初吉
旭日章勳八等	後備歩兵第六十二聯隊	菊地貞松
旭日章勳八等	後備歩兵第三十二聯隊	菊地伊三郎
旭日章勳七等	後備歩兵第五聯隊	菊地唐治
旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	佐々木道二
瑞寶章勳七等	後備歩兵第五聯隊	菅野大五郎

功七級

旭日章勳八等	歩兵上等兵	高橋長三郎
旭日章勳八等	歩兵一等卒	小澤豐治
旭日章勳八等	歩兵一等卒	紺野才兵衛
旭日章勳八等	歩兵伍長	佐藤東三郎
旭日章勳八等	歩兵一等卒	小澤謙吉
旭日章勳八等	歩兵一等卒	及川幸吉
旭日章勳八等	歩兵一等卒	菊地豐治
旭日章勳八等	歩兵	佐藤寅之進
旭日章勳八等	歩兵一等卒	千葉武之進
旭日章勳八等	歩兵一等卒	熊谷近之丞
旭日章勳八等	歩兵一等卒	昆野倉治
旭日章勳八等	歩兵二等卒	後藤清五郎
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	高橋文三郎
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	吉田清一郎
旭日章勳七等	歩兵伍長	佐嶋八重吉
旭日章勳八等	歩兵上等兵	及川龜治
旭日章勳八等	歩兵一等卒	佐藤榮治
旭日章勳八等	歩兵上等兵	高橋治右衛門
旭日章勳八等	歩兵一等卒	菊地初吉
旭日章勳八等	歩兵一等卒	菊地貞松
旭日章勳七等	歩兵一等卒	菊地伊三郎
旭日章勳八等	歩兵二等卒	菊地唐治
瑞寶章勳七等	歩兵軍曹	佐々木道二
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	菅野大五郎
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	高野伊三郎
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	菊地萬
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	佐藤伊三郎
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	高橋慶治
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	高橋貞助
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	酉丸平吉
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	菊池昇
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	高橋清三郎
旭日章勳七等	歩兵特務曹長	伊藤伊七
旭日章勳八等	騎兵一等卒	吉田善太郎
旭日章勳八等	砲兵輪卒	佐々木惣吉
瑞寶章勳八等	輜重輪卒	高橋吉三郎
旭日章勳八等	工兵上等兵	佐々木廣太郎
瑞寶章勳八等	輜重輪卒	小澤理助
旭日章勳八等	歩兵一等卒	岩本永三郎
旭日章勳八等	歩兵上等兵	菊池初右衛門
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	菅野忠助
旭日章勳八等	歩兵一等卒	佐藤芳元
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	佐藤重之丞
瑞寶章勳八等	歩兵一等卒	高橋萬治
旭日章勳七等	砲兵一等卒	佐々木萬右衛門
旭日章勳八等	工兵軍曹	佐鳥與十郎
	輜重輪卒	佐藤幸藏

〃	旭日章勳八等	後備第二師團機關砲隊	熊谷孫三郎
〃	旭日章勳六等	後備歩兵第三十一聯隊	歩兵少尉　小澤懐德
功五級	旭日章勳六等	後備歩兵第三十一聯隊	歩兵中尉　菊池太惣治
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒　高橋與治右衛門
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒　佐々木里治
〃	旭日章勳八等	第十九師團補助輸卒隊	輜重輸卒　紺野庄三郎
〃	瑞寶章勳八等	砲兵第八聯隊	砲兵上等兵　菊池勝三郎
〃	瑞寶章勳八等	山砲兵第一聯隊	砲兵一等卒　菊地盛
〃	旭日章勳八等	第十五師團補助輸卒隊	輜重輸卒　相原榮治郎
〃	旭日章勳六等		憲兵中尉　相原五郎

羽田村

明治二十七八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	勳八等	工兵第二大隊	工兵一等卒	菊池彌兵衛

明治三十七八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	勳七等	第二師團後備獨立工兵中隊	工兵一等卒	菊池彌兵衛
〃	勳八等	歩兵第五聯隊第八中隊	補充兵歩兵一等卒	菊池松太郎
〃	勳八等	第八師團第二糧食縱列	輜重輸卒	千葉三左衛門
〃	勳八等	第八師團第三糧食縱列	輜重輸卒	佐藤福藏
〃	勳七等	後備歩兵第五聯隊	歩兵伍長	佐藤東右衛門
〃	勳八等	野戰砲兵第八聯隊第一中隊	砲兵輸卒	佐藤宮治
〃	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	兒玉卯右衛門

〃	勳八等	歩兵第五聯隊補充大隊	歩兵一等卒　梅田玉三郎
〃	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒　梅原利平
〃	勳八等	歩兵第五聯隊補充大隊	補充兵歩兵一等卒　及川重吉
〃	勳八等	歩兵第五聯隊補充大隊	歩兵一等卒　小野寺伊勢藏
〃	勳八等	歩兵第五聯隊補充大隊	歩兵一等卒　今野重治郎
〃	勳八等	歩兵第五聯隊補充大隊	歩兵一等卒　菊池利與治
〃	勳八等	歩兵第五聯隊補充大隊	歩兵一等卒　佐藤龜藏
〃	勳八等	第八師團第一糧食縱列	輜重輸卒　小野寺千七
〃	勳八等	歩兵第卅一聯隊	歩兵一等卒　小野寺彦治郎
功七級	勳八等	野戰工兵第八大隊	工兵曹長　小玉庄治右衛門
功七級	勳八等	工兵第八大隊	工兵上等兵　佐藤若記
〃	勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒　千葉倉藏
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒　淺川慶藏
〃	勳八等	第八師團第十補助輸卒隊	輜重輸卒　佐藤清一郎
〃	勳七等	歩兵第五聯隊補充大隊	歩兵曹長　佐藤久三郎
〃	勳八等	工兵第十三大隊	輜重輸卒　千葉利三郎
〃	勳八等	工兵第十三大隊	工兵伍長　高橋榮治
〃	勳八等	野戰砲兵第二十一聯隊	砲兵輸卒　今野萬吉
〃	勳八等	野戰砲兵第八聯隊	砲兵一等卒　佐藤三四郎
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒　後藤儀平治
〃	勳八等	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒　佐藤直之進
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒　菊池庄五郎
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒　佐藤喜助
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒　佐藤幸吉

功級	勲等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
一	勲八等	歩兵第五聯隊補充大隊	補充兵歩兵一等卒	千葉八十治
一	勲八等	歩兵第五聯隊補充大隊	補充兵歩兵一等卒	及川易平
一	勲八等	第八師團第十補助輸卒隊	補充兵輜重輸卒	佐藤俊平
一	勲八等	歩兵第五聯隊補充大隊	補充兵歩兵一等卒	千葉善五郎
一	勲八等	歩兵第五聯隊補充大隊	補充兵歩兵二等卒	千葉彌惣治
一	勲八等	第十五師團彈薬大隊	補充兵砲兵上等兵	菊池長作
一	勲八等	歩兵第三十一聯隊	補充兵看護卒	及川豁郎
一	勲八等	第八師團第五補助輸卒隊	補充兵輜重輸卒	佐藤義雄
一	勲八等	歩兵第五聯隊補充兵	補充兵歩兵一等卒	佐藤留治郎
一	勲八等	歩兵第五聯隊補充大隊	補充兵歩兵一等卒	千葉五郎左衛門
一	勲八等	歩兵第五聯隊補充大隊	補充兵歩兵一等卒	小林又兵衛
一	勲八等	後備歩兵第五聯隊	補充兵歩兵一等卒	田中政喜
一	勲八等	歩兵第五聯隊補充大隊	補充兵歩兵一等卒	佐藤清右衛門
一	勲八等	歩兵第五聯隊補充大隊	補充兵歩兵一等卒	小野寺今朝吉
一	勲八等	第十九師團補助輸卒隊	補充兵輜重輸卒	佐藤久藏
一	勲八等	第十九師團補助輸卒隊	補充兵輜重輸卒	佐藤慶治郎
一	勲八等	輜重兵第八大隊補充隊	補充兵輜重輸卒	小林三治郎
一	勲八等	第八師團補充馬廠	補充兵輜重輸卒組長	小林惣右衛門
一	勲七等	羽田村役場	村長	千葉濱之助
一	勲八等	羽田村役場	助役	及川靜夫

大正三年乃至九年戰役

功級	勲等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
一	勲七等	野戰砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	佐藤三四郎
一	勲七等	歩兵第七十四聯隊	歩兵軍曹	梅田喜代治
一	勲七等	横須賀海兵團	兵曹長	千葉伊勢五郎
一	勲八等	横須賀海兵團	一等水兵	古玉久左衛門
一	勲八等	横須賀海兵團	一等機關兵	及川逸三

黑石村　明治二十七八年戰役戰功者

功級	勲等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
一	旭日章勲八等	歩兵第四聯隊第四中隊	後備歩兵一等軍曹	山内健吉
一	旭日章勲八等	歩兵第十七聯隊第十中隊	豫備歩兵上等兵	渡邊俊太郎
一	瑞寶章勲八等	海軍	二等信號兵	村上永三郎
一	旭日章勲八等	近衛歩兵第一大隊第六中隊	歩兵一等卒	菅原與右衛門
一	旭日章勲八等	近衛歩兵第一聯隊第二中隊	歩兵上等兵	山内八十八
一	木杯三組御紋章付	黑石村長	村長	上照英
一	一時賜金	歩兵第十七聯隊第三中隊	後備歩兵一等卒	吉田小三郎
一	一時賜金	臨時第七師團輜重縱列	輜重輸卒	佐々木傳四郎
一	一時賜金	後備歩兵第五大隊第二中隊	後備歩兵一等卒	佐藤文治
一	一時賜金	歩兵第十七聯隊第四中隊	豫備歩兵一等卒	千田和右衛門
一	一時賜金	輜重兵第二大隊補充大隊	豫備輜重輸卒	藤本吉三郎
一	一時賜金	歩兵第四聯隊第五中隊	後備歩兵一等卒	渡邊平次郎
一	一時賜金	歩兵第十七聯隊第三中隊	歩兵一等卒	佐藤利兵衛
一	一時賜金	歩兵第十七聯隊第一中隊	歩兵一等卒	千葉島藏

明治三十七八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
—	瑞寶章勳七等	後備步兵第五十六聯隊第八中隊	後備步兵上等兵	渡邊俊太郎
—	旭日章勳八等	不明	輜重輪卒	伊藤庄助
—	旭日章勳八等	第八師團第三糧食縱列	輜重輪卒	佐々木傳四郎
功七級	旭日章勳八等	步兵第五聯隊第十中隊	補充兵步兵一等卒	及川松之丞
—	旭日章勳八等	後備步兵第十七聯隊第七中隊	後備步兵一等卒	北條清六
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊補充大隊	兵兵一等卒	伊藤專太郎
—	旭日章勳八等	第八師團第三野戰病院	豫備看護卒	千田諦道
—	旭日章勳八等	後備步兵第五十六聯隊第十中隊	後備步兵一等卒	千葉永之助
功七級	旭日章勳八等	步兵第五聯隊第三中隊	步兵一等卒	高野榮之助
功七級	旭日章勳八等	步兵第五聯隊第十二中隊	豫備步兵伍長	北條早太郎
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊第二中隊	豫備步兵一等卒	佐々木末吉
—	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊補充大隊	補充步兵一等卒	伊藤久治
—	旭日章勳八等	砲兵第八聯隊第一中隊	補充砲兵一等卒	佐藤忠治郎
—	瑞寶章勳八等	步兵第三十一聯隊第六中隊	補充步兵一等卒	菅原靜藏
—	旭日章勳七等	騎兵第八聯隊補充隊	一等看護長	村上泰助
—	旭日章勳七等	步兵第五聯隊附	一等看護長	榊興相
—	旭日章勳八等	輜重兵第八大隊補充隊	補充兵輜重輪卒	佐々木幸吉
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菅原馬吉
—	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	千葉久之助
—	瑞寶章勳八等	第八師團第九補助輪卒隊	補充兵輜重輪卒	千田留之進
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊	豫備步兵一等卒	石川仁兵衞
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊第一中隊	步兵一等卒	佐々木菊治
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊第一中隊	步兵一等卒	佐々木吉助

—	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊補充大隊	補充步兵一等卒	佐藤清治
—	旭日章勳八等	不詳	砲兵輪卒	千葉喜久藏
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊第十一中隊	步兵	藤原喜藏
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊第十一中隊	步兵	伊藤榮四郎
—	旭日章勳八等	砲兵第八聯隊第五中隊	砲兵一等卒	千葉佐藏
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊補充大隊	步兵一等卒	千葉諒二
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊補充大隊	步兵一等卒	及川幸之助
—	旭日章勳八等	第十五師團補助輪卒隊	補充輜重輪卒	菅原博業
—	旭日章勳七等	後備步兵第五聯隊第一中隊	後備步兵一等卒	菅原與治右衞門
—	瑞寶章勳八等	樺太電信隊	補充輜重輪卒	吉田今朝吉
—	旭日章勳八等	第八師團第三補助輪卒隊	補充兵輜重輪卒	菅原清七
—	瑞寶章勳八等	工兵第八大隊第四中隊付	輜重輪卒	及川龜七
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊第四中隊	補充步兵一等卒	藤原作右衞門
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊補充大隊第四中隊	補充步兵一等卒	千葉勝治
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊補充大隊第四中隊	補充步兵一等卒	佐藤長一郎
—	旭日章勳八等	第八師團第十九補助輪卒隊	補充輪卒	千葉作壽
—	瑞寶章勳八等	樺太電信隊	補充輪卒	吉田芳之助
—	瑞寶章勳八等	砲兵第八聯隊補充大隊第二中隊	砲兵二等卒	高野久之助
—	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊第二中隊	步兵一等卒	高野宗次郎
—	瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊第二中隊	步兵一等卒	馬場英記
功七級	旭日章勳八等	砲兵第八聯隊第四中隊	砲兵上等兵	山內丈三郎
—	旭日章勳八等	步兵第五十七聯隊第二中隊	後備步兵一等卒	藤本平藏
—	旭日章勳八等	步兵第五聯隊第三中隊	步兵一等卒	及川喜平治
功七級	旭日章勳八等	後備步兵第五聯隊第三中隊	後備步兵一等卒	村上子之吉

〃	瑞寶章勳八等	軍艦朝日	海軍一等水兵	菅原庄六
〃	旭日章勳五等	第七師團金櫃部付	三等主計	山内八十八
〃	旭日章勳七等	村長		佐々木榮三郎
〃	瑞寶章勳七等	助役		村上永三郎
〃	銀杯一	書記		高野喜吉
〃	文部省一時賞金三拾圓			黒石尋高小學校長　村上恭助

大正三四年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
西比利亞事件	一時賜金	山砲兵第一聯隊補充大隊第二中隊	後備砲兵一等卒	菅原良作
同	瑞寶章勳八等	後備砲兵上等兵	佐藤榮助	
三四年戰役	瑞寶章勳七等	山砲兵第一聯隊第五中隊	海軍三等兵曹	山内爲吉
同	瑞寶章勳八等	榛名艦乘込	三等兵曹	阿部末吉
同	瑞寶章勳七等	香取	一等水兵	千葉幾之助
同	瑞寶章勳八等	金剛	一等兵曹	尾形庄助
同	瑞寶章勳七等	武藏	一等兵曹	佐々木長藏
同	瑞寶章勳八等	金剛	一等水兵	山内主計
同	旭日章勳八等	筑波	二等主計兵曹	菅原登利藏
西比利亞事件	瑞寶章勳七等	工兵第八聯隊第二中隊	工兵特務曹長	阿部永之進
同	瑞寶章勳七等	砲兵第八聯隊第一中隊	砲兵特務曹長	藤原貞

田原村　明治二十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
功七級	勳七等		歩兵一等卒	菅原長治郎

明治三十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
功七級	勳七等		歩兵軍曹	及川伊助
功七級	勳八等		歩兵一等卒	佐藤與右衛門
功七級	勳八等		歩兵一等卒	菊地和十郎
功七級	勳八等		歩兵一等卒	高橋萬平
功七級	勳八等		歩兵一等卒	千葉磯之進
功七級	勳八等		歩兵一等卒	伊藤勇
功七級	勳七等		歩兵曹長	及川富秋
功七級	勳七等		輜重兵軍曹	及川清
功七級	勳八等		歩兵一等卒	千葉東吉

藤田村　明治二十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	旭日章勳八等	歩兵第十七聯隊	陸軍歩兵軍曹	菊池定之助
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第十七聯隊	陸軍歩兵一等卒	菊池伊勢藏
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第十七聯隊	陸軍歩兵一等卒	菊池靜夫
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	陸軍歩兵一等卒	菊池三治
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第十七聯隊	陸軍歩兵一等卒	千田善七
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第十七聯隊	陸軍歩兵一等卒	及川善助
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第十七聯隊	陸軍歩兵一等卒	佐藤花五郎
〃	瑞寶章勳八等	患者輸送部	輜重兵輸卒	菊池熊治郎

明治三十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	旭日章勳七等	後備歩兵第五十六聯隊	陸軍歩兵曹長	菊池定之助
〃	旭日章勳七等	後備歩兵第五聯隊	陸軍歩兵一等卒	菊池伊勢藏
〃	旭日章勳八等	青森歩兵第五聯隊	陸軍歩兵一等卒	菊池三治
〃	瑞寶章勳八等	後備歩兵第五十六聯隊	陸軍歩兵一等卒	菊池靜夫
〃	瑞寶章勳八等	後備歩兵第五十六聯隊	陸軍歩兵一等卒	千田善七
〃	旭日章勳八等	後備歩兵第五十六聯隊	陸軍歩兵一等卒	及川善助
〃	瑞寶章勳八等	第八師團第二糧食縱列	輜重兵輸卒	山内與右衛門
〃	旭日章勳八等	輜重兵第八大隊	輜重兵輸卒	朽木慶三郎
功七級		歩兵第五聯隊	陸軍歩兵上等兵	佐々木英治
〃	〃	工兵第八大隊	陸軍工兵一等卒	及川寅之助
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	陸軍歩兵一等卒	及川武之進
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	輜重兵輸卒	菊池龜治
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	輜重兵輸卒	中田音三郎
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	陸軍歩兵一等卒	及川森之助
〃	旭日章勳八等	騎兵第八聯隊	騎兵伍長	及川晉右衛門
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池熊造
〃	旭日章勳七等	歩兵第五聯隊	歩兵軍曹	菊池廣吉
〃	瑞寶章勳八等	第八師團糧食縱列	輜重兵輸卒	千田末吉
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	及川勇吉
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	及川伊藏
〃	旭日章勳八等	第八師團糧食縱列	輜重兵輸卒	小澤三右衛門
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	及川卯之松
〃	旭日章勳八等	第八師團第二糧食縱列	輜重兵輸卒	及川七三郎
〃	旭日章勳八等	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	及川彌作
〃	旭日章勳八等	後備歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	新田平助
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	同	及川儀十郎
〃	旭日章勳八等	同	同	千田熊二郎
〃	旭日章勳八等	第八師團第六補助輸卒隊	輜重兵輸卒	佐々木春藏
〃	旭日章勳八等	第八師團第五補助輸卒隊	同	菅野今朝松
〃	旭日章勳八等	輜重兵第八大隊	同	千田萬右衛門
〃	瑞寶章勳八等	第八師團第十五補助輸卒隊	同	高野兼治
〃	瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	遠藤敬吉
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	同	佐々木久吉
〃	瑞寶章勳八等	砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	河東田義平治
〃	旭日章勳八等	第八師團第十九補助輸卒隊	輜重兵輸卒	及川又三郎
〃	瑞寶章勳八等	同	同	菊池由吉
〃	旭日章勳八等	第三野戰病院	輜重兵輸卒	及川今朝藏
〃	旭日章勳八等	輜重兵第八大隊	同	小澤和十郎
功六級	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵伍長	山内直治
〃	瑞寶章勳八等	同	歩兵上等兵	小澤初之助
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五十二聯隊	歩兵一等卒	及川萬之助
〃	旭日章勳八等	野戰砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	矢作留藏
〃	旭日章勳八等	八雲乘組	海軍一等水兵	及川清三
〃	旭日章勳八等	朝日乘組	同	及川敬之助
〃	旭日章勳八等	三笠乘組	海軍一等水兵	及川庄助
〃	旭日章勳六等	第三師團彈藥大隊臨時軍馬檢疫部	一等獸醫	及川忠治
〃	瑞寶章勳六等	守品檢疫所	輜重兵少尉	高橋洗
		第十五師團輜重兵第十五大隊		

〃	旭日章勳六等	歩兵第四聯隊	歩兵少尉	小澤清三郎

歐洲戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	旭日章勳七等	香取	一等兵曹	及川庄助
〃	旭日章勳七等	第二特務艦隊司令部	海軍一等主計兵曹	柄木大之助
〃	同	第二特務艦隊司令部	海軍一等兵曹	佐藤留治
〃	旭日章勳八等	朝日乘組	海軍三等兵曹	菊池秀平
〃	瑞寶章勳八等	山城乘組	海軍三等兵曹	及川仁三郎
〃	同	特務艦青島	海軍一等水兵	及川伊三郎
〃	瑞寶章勳八等	獨立守備歩兵第四大隊	歩兵上等兵	佐々木嘉八
〃	旭日章勳八等	電信第一聯隊	工兵一等卒	柄木芳松

伊手村　明治二十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	〃	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	佐藤千松
〃	〃	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	今野久吉
〃	〃	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	鈴木勇三郎
〃	〃	砲兵第二大隊	砲兵一等卒	山崎和藏
〃	〃	輜重兵第二大隊	輜重輸卒	菅野賢三郎
〃	〃	輜重兵第二大隊	輜重輸卒	高橋庄三郎
〃	〃	輜重兵第二大隊	輜重輸卒	伊藤伊三郎
〃	〃	輜重兵第二大隊	輜重輸卒	佐藤忠三郎

明治三十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
功五級	勳六等	歩兵第五聯隊	歩兵少尉	渡邊正喜
〃	勳六等	歩兵第五聯隊	歩兵少尉	菊池巳代吉
〃	勳七等	歩兵第五聯隊	輜重兵軍曹	佐藤愛吉
功七級	勳八等	歩兵第五聯隊	輜重兵上等兵	渡邊一
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	佐藤賢治
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池與三郎
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	佐藤佐五兵衛
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	高橋龜右衛門
〃	勳八等	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	佐藤久四郎
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	小竹千吉
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	及川龜治
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	高橋豐治
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	千田龜松
〃	勳八等	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	千田龜三郎
〃	〃	騎兵第八聯隊	歩兵上等兵	及川竹三郎
〃	勳八等	野戰砲兵第八聯隊	騎兵一等卒	遠藤與三郎
〃	勳八等	野戰砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	佐藤善兵衛
〃	〃	輜重兵第七大隊	砲兵輸卒	高橋金右衛門
〃	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	渡邊保
〃	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	高橋光惠
〃	勳八等	第八師團司令部	輜重輸卒	出雲寅之助
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	上等看護卒	佐藤常吉
〃	勳八等	歩兵第五聯隊	上等看護卒	佐藤龜吉

一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	石田幸太郎
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	佐藤重三郎
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	佐藤倉吉
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵二等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	和川兵策
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	及川建治
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	高橋志津摩
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	佐藤勘之亟
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	及川東四郎
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵二等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	佐藤鶴治
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵二等卒
一	勳八等	第八師團補充馬廠	天久彌兵衛
一	勳八等	野戰砲兵第八聯隊	騎兵一等卒
一	勳八等	野戰砲兵第八聯隊	佐藤今朝之亟
一	勳八等	第八師團第十五補助輸卒隊	及川傳治
一	勳八等	輜重兵第八大隊	砲兵一等卒
一	勳八等	輜重兵第八大隊	菊池今朝右衛門
一	勳八等	步兵第五十一聯隊	輜重輸卒
一	勳八等	輜重兵第八大隊	佐藤長吉
一	勳八等	第八師團第十五補助輸卒隊	輜重輸卒
一	勳八等	第八師團第十五補助輸卒隊	橋本幸太郎
一	勳八等	第八師團第十五補助輸卒隊	輜重輸卒
一	勳八等	第八師團第二十五補助輸卒隊	柳田永助
一	勳八等	第八師團第三補助輸卒隊	輜重輸卒
一	勳八等	第八師團第十五補助輸卒隊	佐藤彦四郎
一	勳八等	第八師團第四補助輸卒隊	輜重輸卒
一	勳八等	輜重兵第八大隊	菅野初右衛門
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	高橋辰治
一	勳八等	步兵第五聯隊	輜重輸卒
一	勳八等	輜重兵第八大隊	千葉文治郎
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	佐藤德治
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒
一	勳八等	第八師團第七補助輸卒隊	佐藤東治右衛門
一	勳八等	步兵第五聯隊	輜重輸卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	紺野德太郎
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	佐藤新六
一	勳八等	步兵第五聯隊	輜重輸卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	佐藤菊右衛門
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒
一	勳八等	第八師團第七補助輸卒隊	柴田久治郎
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	佐藤千松
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	今野久吉
一	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒
一	勳八等	輜重兵第八大隊	鈴木勇三郎
一	勳八等	輜重兵第八大隊	步兵一等卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	佐藤留右衛門
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒
一	勳八等	輜重兵第八大隊	高橋庄三郎
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒
一	勳八等	步兵第五聯隊	菅野賢三郎

日獨戰爭

功級		所屬部隊	氏名
一	勳八等	横須賀	菊池太利治
一	勳八等	横須賀	高橋常治
一	勳八等	横須賀	高橋和助
一	勳八等	横須賀	佐藤三吉
一	勳八等	横須賀	菅野良三郎

米里村　明治二十七、八年戰役

功級		所屬部隊	氏名
一	勳等	步兵第十七聯隊	佐藤寅五郎
	旭日章勳八等		

〃	旭日章勳八等	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒
〃	瑞寶章勳八等	野砲兵第二聯隊	砲兵一等卒
〃	旭日章勳八等	歩兵第十七聯隊	歩兵伍長
〃	旭日章勳七等	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒
〃	旭日章勳七等	歩兵第十七聯隊	歩兵伍長
〃	旭日章勳八等	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒
〃	旭日章勳八等	輜重兵第二大隊	輜重輸卒
〃	旭日章勳八等	第七師團輜重彈藥縱列	輜重輸卒
〃	旭日章勳八等	第七師團輜重彈藥縱列	輜重輸卒

明治三十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	旭日章勳八等	輜重兵第七大隊	輜重輸卒	田村伊勢藏
〃	旭日章勳七等	歩兵第三十一聯隊	歩兵曹長	菊池久治郎
功七級	旭日章勳七等	歩兵第十七聯隊	歩兵軍曹	中山常之進
〃	旭日章勳八等	歩兵第三十一聯隊	歩兵一等卒	加藤留之助
〃	旭日章勳八等	歩兵第三十一聯隊	歩兵一等卒	牛澤專藏
〃	旭日章勳八等	歩兵第三十一聯隊	歩兵一等卒	佐藤善藏
〃	旭日章勳八等	歩兵第三十一聯隊	歩兵一等卒	後藤仁右衛門
〃	瑞寶章勳八等	砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	菊池清右衛門
〃	旭日章勳七等	歩兵第三十一聯隊	歩兵軍曹	千葉清
〃	旭日章勳八等	歩兵第三十一聯隊	歩兵一等卒	千田藤太郎
〃	旭日章勳八等	歩兵第三十一聯隊	歩兵一等卒	佐藤寅藏
〃	旭日章勳八等	砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	淺倉利藏
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵伍長	佐藤彌作
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	千葉寅吉
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	佐藤城
〃	旭日章勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	吉田昌藏
〃	旭日章勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	淺倉爲治
〃	旭日章勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	千田久作
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	千葉用治右衛門
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	佐藤榮
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	後藤留藏
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池萬吉
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	田村秀吉
〃	瑞寶章勳八等	野砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	淺倉與四右衛門
〃	瑞寶章勳八等	野砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	佐藤長太郎
〃	瑞寶章勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	菊池彌右衛門
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	家子熊治
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	遠藤清治郎
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	渡邊熊治
〃	瑞寶章勳八等	工兵第八大隊	工兵一等卒	杉田德藏
〃	瑞寶章勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	佐藤梅治
〃	瑞寶章勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輔卒	菊池常右衛門
〃	瑞寶章勳八等	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	及川源四郎
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池熊治
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	杉田千藏
				高橋浦治

一	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	菊池春吉
一	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	千葉清吉
一	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	田村卯三郎
一	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	佐賀平兵衛
一	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	千葉今朝吉
一	旭日章勳八等	歩兵第二十五聯隊	小澤多一郎
一	瑞寶章勳八等	騎兵第八聯隊	菊池新平
一	瑞寶章勳八等	輜重兵第八大隊	淺倉爲治
一	瑞寶章勳八等	輜重兵第八大隊	千葉安治
一	瑞寶章勳八等	輜重兵第八大隊	加藤儀左衛門
一	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	菊池新吉
一	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	平澤永太郎
一	旭日章勳七等	歩兵第五聯隊	菅野慶太郎
一	旭日章勳六等	歩兵第五聯隊	佐伯信
一	旭日章勳八等	第八師團	菊池正助
一	瑞寶章勳八等	臺灣歩兵第一聯隊	五十嵐喜八
一	瑞寶章勳八等	歩兵第三十一聯隊	家子喜太郎
一	瑞寶章勳七等	横須賀海兵團	佐藤要
一	瑞寶章勳七等	横須賀海兵團	千田喜富
一	旭日章勳八等	陸軍省	菊池常二

玉里村　明治二十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
一	旭日章勳七等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	後藤萬吉

一	勳七等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池萬之助
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池新右衛門
一	勳七等	歩兵第十七聯隊	歩兵上等兵	及川俊治
一	勳八等	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	菊池長右衛門
一	勳八等	輜重兵第二大隊	輜重輸卒	後藤幸右衛門

明治三十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
一	從七位勳六等	騎兵第二聯隊	騎兵中尉	菊池和太郎
一	勳七等	輜重兵第八大隊	輜重兵伍長	佐藤伊三郎
一	勳七等	歩兵第三十一聯隊	一等看護長	佐藤今朝治
一	勳七等	歩兵第五聯隊	歩兵伍長	菊池孫右衛門
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池八郎兵衛
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菅野伊三郎
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	菅野萬治
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菅野庄右衛門
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	懸田庄右衛門
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	佐藤伊勢之助
一	勳七等	歩兵第五聯隊	歩兵特務曹長	菊池懋
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	及川武右衛門
一	勳八等	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	菊池林藏
一	勳八等	歩兵第三十一聯隊	歩兵一等卒	菅村喜代松
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	美濃川勘之助
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵伍長	門脇孫市

一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊地宇右衛門
一	勳八等	歩兵第三十一聯隊	歩兵一等卒	佐藤榮之助
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	伊藤兵右衛門
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊地文三郎
一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	菊地梅治
功七級	勳八等	近衛歩兵第一聯隊	歩兵一等卒	後藤孫治
一	勳八等	騎兵第八聯隊	騎兵一等卒	菅野庄三郎
一	勳七等	野戰砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	伊藤瀧治
一	勳八等	野戰砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	後藤常吉
一	勳八等	野戰砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	菊地三治
一	勳八等	野戰砲兵第八聯隊	砲兵軍曹	菊地繁治
一	勳八等	工兵第八大隊	工兵伍長	伊藤萬太夫
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重兵上等兵	及川忠治
一	勳八等	輜重兵第二大隊	輜重兵上等兵	門脇運吉
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重兵輜重輪卒	菊地初吉
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重兵輜重輪卒	村田音右衛門
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重兵輜重輪卒	菊地伊七
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜重兵輜重輪卒	及川東四郎
一	勳八等	歩兵第五聯隊	補充兵歩兵一等卒	菊地卯左衛門
一	勳八等	歩兵第五聯隊	補充兵歩兵一等卒	菅野萬平
一	勳八等	歩兵第五聯隊	補充兵歩兵一等卒	菊地勇三郎
一	勳八等	歩兵第五聯隊	補充兵歩兵一等卒	及川和七
一	勳八等	歩兵第五聯隊	補充兵歩兵一等卒	菊地孫之亟
一	勳八等	歩兵第五聯隊	補充兵歩兵一等卒	遠藤利三郎

一	勳八等	歩兵第五聯隊	補充兵歩兵一等卒	横山忠四郎
一	勳八等	歩兵第五聯隊	補充兵歩兵一等卒	菅野己吉
一	勳八等	歩兵第五聯隊	補充兵歩兵一等卒	菊地直治郎
一	勳八等	野戰砲兵第八聯隊	補充兵砲兵一等卒	菊地清七
一	勳八等	野戰砲兵第八聯隊	補充兵砲兵一等卒	及川千代龜
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	菊地樋右衛門
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	菊地熊吉
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	及川民治郎
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	佐藤音治
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	後藤巳之助
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	後藤萬藏
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	高橋己之助
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	菊池庄太夫
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	菅野勘六
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	及川吉右衛門
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	千葉初右衛門
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	菅野孫右衛門
一	勳八等	輜重兵第八大隊	輜充兵輜重兵輜重輪卒	菊池福松
一	勳八等	輜重兵第八大隊	補充兵輜重兵輜重輪卒	菊地長右衛門
一	勳七等	工兵第八大隊	補充兵工兵一等卒	後藤倉之助
一	勳七等	横須賀海兵團	海軍一等兵曹	及川末治
一	勳八等	横須賀海兵團	海軍一等兵曹	菊池利藏
一	勳八等	横須賀海兵團	海軍三等兵曹	菊池節郎
一	勳八等	横須賀海兵團	海軍一等水兵	後藤敬之助

〃	勳八等	横須賀海兵團	海軍一等兵曹	佐藤丑右衛門

梁川村

明治二十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	菊地忠吉
〃	瑞寶章勳八等	野砲兵第二聯隊	砲兵一等卒	今野金平

明治三十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	菊地林造
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	安部惣右衛門
〃	瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊地松之助
〃	旭日章勳八等	歩兵第五十二聯隊	歩兵一等卒	大黒清治
〃	旭日章勳八等	歩兵第五十二聯隊	歩兵一等卒	今野喜惣治
〃	旭日章勳八等	歩兵第五十二聯隊	歩兵一等卒	菊池彦右衛門
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五十二聯隊	歩兵伍長	阿部與惣治
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菅原松太郎
〃	旭日章勳八等	歩兵第五十二聯隊	歩兵一等卒	菊池菊之助
〃	旭日章勳八等	砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	菊池吉之助
〃	旭日章勳八等	砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	菅原熊十郎
〃	旭日章勳八等	砲兵第八聯隊	砲兵二等卒	上野養三郎
〃	瑞寶章勳八等	工兵第十三大隊	工兵一等卒	及川辰治郎
〃	旭日章勳八等	第八師團第四糧食縱列隊	輜重輸卒	阿部榮治
〃	旭　章勳七等	第三軍兵站軍醫部	二等看護長	見野久作
〃	旭日章勳八等	後備歩兵第五十六聯隊	歩兵一等卒	今野吉之助
〃	旭日章勳八等	後備歩兵第五十六聯隊	歩兵一等卒	及川庄治郎
〃	旭日章勳七等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池忠吉
〃	旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	吉光彦右衛門
〃	旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	片寄治三郎
〃	旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	佐藤政治
〃	旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	今野長四郎
〃	旭日章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵伍長	懸田平右衛門
〃	瑞寶章勳八等	後備歩兵第五十七聯隊	歩兵伍長	及川留之助
〃	旭日章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	伊藤東治郎
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	淺沼喜三太
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	後藤長四郎
〃	瑞寶章勳八等	後備歩兵第五十六聯隊	歩兵一等卒	及川熊之助
〃	旭日章勳七等	騎兵第八聯隊	騎兵軍曹	佐藤遠之助
〃	旭日章勳八等	第八師團彈藥縱列	砲兵上等兵	菅原養之助
〃	旭日章勳八等	第八師團彈藥縱列	砲兵上等兵	吉光彦之丞
〃	旭日章勳七等	第八師團彈藥大隊砲兵第一縱列隊	砲兵一等卒	今野金平
〃	旭日章勳八等	第八師團野砲兵器廠	工兵上等兵	但木邦治
〃	旭日章勳八等	後備工兵第一大隊	一等看護長	菊池榮作
〃	旭日章勳七等	第八師團第二野戰病院	歩兵一等卒	中澤多利吉
〃	瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池安右衛門
〃	瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	佐藤榮七
〃	瑞寶章勳八等	後備歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池吉郎右衛門
〃	瑞寶章勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菅原雄之助

瑞寶章勳八等	後備步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊池幸吉
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菅野清潔
旭日章勳八等	後備步兵第五聯隊	步兵一等卒	淺沼庄治
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菅田幸三郎
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵二等卒	平野庄右衛門
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊池榮藏
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	及川清松
瑞寶章勳八等	後備步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊地留松
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊地義平
瑞寶章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	今野健藏
旭日章勳八等	工兵第八大隊	工兵一等卒	菊池雄吾
旭日章勳八等	後備步兵第五聯隊	輜重兵上等兵	金盛理
旭日章勳八等	後備第一師團第三糧食縱列	輜重輸卒	今野梅治
瑞寶章勳八等	遼東兵站監部	輜重輸卒	菊池伊勢吉
旭日章勳八等	第八師團第七補助輸卒隊	輜重輸卒	菊池千右衛門
旭日章勳八等	彈藥大隊砲兵第一縱列	輜重輸卒	佐々木瀧三郎
旭日章勳八等	遼東兵站監部	輜重輸卒	安部瀧三郎
旭日章勳八等	第九補助輸卒隊	輜重輸卒	菊池和吉
旭日章勳八等	第一補助輸卒隊	輜重輸卒	菊池權十郎
瑞寶章勳八等	第一補助輸卒隊	輜重輸卒	今野勇之亟
旭日章勳八等	第五補助輸卒隊	輸重輸卒	今野萬治
旭日章勳八等	第一補助輸卒隊	輸重輸卒	阿部留之助
瑞寶章勳八等	第十五補助輸卒隊	輜重輸卒	菅原平藏
旭日章勳八等	第三補助輸卒隊	輜重輸卒	菊池長作
瑞寶章勳八等	第十三師團兵站部	輜重輸卒	淺沼清治郎
旭日章勳六等	步兵第三十一聯隊	步兵特務曹長	小梁川芳三郎
旭日章勳七等	野砲兵第一聯隊	砲兵曹長	佐々木伊勢
旭日章勳八等	騎兵第八聯隊	騎兵伍長	鈴木德
旭日章勳七等	第八師團第一野戰病院	一等計手	鈴木賢治
旭日章勳八等	後備步兵第五聯隊	步兵上等兵	今野與五郎
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菅原長治
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	吉光今朝右衛門
旭日章勳八等	砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	菊池豐之助
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵上等兵	安部菊吉
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊池六右衛門
旭日章勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊池儀右衛門
旭日章勳八等	後備步兵一七聯隊	步兵一等卒	菊池太八郎
瑞寶章勳八等	第一補助輸卒隊	輸重輸卒	佐々木春吉
旭日章勳七等	軍艦朝日	一等兵曹	菅野慶太郎
旭日章勳八等	軍艦八重山	一等水兵	太田滿治
旭日章勳八等	軍艦平遠	三等水兵	梅津和兵衛
旭日章勳八等	軍艦滿州丸	三等兵曹	菊池豐之助
旭日章勳七等		村長	及川安右衛門
旭日章勳八等		村長	今野長右衛門
瑞寶章勳八等		助役	今野與四郎
旭日章勳八等		助役	伊藤龜之助

大正三年乃至大正九年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
	旭日章勳八等	歩兵第二十八聯隊	歩兵上等兵	菊池孝一
	旭日章勳七等	山砲隊第一大隊	砲兵一等卒	菅原熊十郎
	瑞寶章勳八等	山砲隊第一大隊	砲兵一等卒	阿部久四郎
	瑞寶章勳八等	南洋防備隊	海軍三等兵曹	梅津鐵
	瑞寶章勳七等	軍艦關東	海軍三等兵曹	梅津鐵
	瑞寶章勳八等	軍艦金剛	海軍一等水兵	木村庄之助
	瑞寶章勳八等	歩兵第六十六聯隊	馬丁	伊達常松

福岡村

明治二十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
	旭日章勳八等	憲兵隊	憲兵二等軍曹	佐藤朝治
	瑞寶章勳八等	近衛師團	輜重輸卒	菅野萬兵衛
	旭日章勳七等	第二師團	歩兵上等兵	鈴木駒藏
		近衛師團	歩兵一等卒	鈴木岩吉
		第二師團	歩兵一等卒	及川泰藏
		第二師團	歩兵上等兵	後藤萬藏
		近衛師團	歩兵一等卒	昆野宇吉
		第二師團	歩兵上等兵	昆野善内
		第二師團	歩兵上等兵	昆野直治
		第二師團	歩兵伍長	千葉命助
	瑞寶章勳八等	第二師團	歩兵一等卒	伊東巳之藏
		第二師團	歩兵一等卒	菅野熊太郎
		第二師團	歩兵一等卒	鈴木定右衛門
		第二師團	歩兵伍長	後藤與兵衛
	瑞寶章勳八等	第二師團	砲兵一等卒	菊池武左衛門
		近衛師團	歩兵上等兵	武田文治

明治三十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
		第八師團	歩兵一等卒	伊東巳之藏
功七級	旭日章勳七等	第二師團	歩兵伍長	千葉命助
	瑞寶章勳八等	第八師團	歩兵一等卒	伊藤和喜藏
	瑞寶章勳八等	第八師團	一等計手	照井省藏
	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	千葉留吉
功七級	旭日章勳七等	第八師團	歩兵曹長	佐藤忠治
	瑞寶章勳八等	第八師團	歩兵上等兵	藤澤庄左衛門
	旭日章勳七等	第八師團	一等看護長	笠原周三
功七級	旭日章勳七等	第八師團	一等機關兵曹	上原藤八
	瑞寶章勳七等	横須賀	上等看護兵曹	早坂直人
	旭日章勳六等	第八師團	三等軍樂手	布施正人
	瑞寶章勳七等	第二師團	歩兵少尉	後藤健藏
	瑞寶章勳八等	第八師團	砲兵軍曹	内海又五郎
	旭日章勳八等	第八師團	歩兵上等兵	菅野熊太郎
	瑞寶章勳八等	第八師團	歩兵上等兵	菅野和十郎
	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野和七
功七級	旭日章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野藤五郎
			歩兵上等兵	近藤春治

功七級	旭日章勳八等	第八師團	步兵上等兵	菅野興吉
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	佐藤清助
―	旭日章勳八等	第八師團	步兵一等卒	鈴木定右衛門
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	昆野寅八
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	昆野友八
―	瑞寶章勳八等	第八師團	步兵一等卒	菅野巳之松
―	瑞寶章勳八等	第八師團	步兵一等卒	昆野三五郎
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	昆野德之助
―	瑞寶章勳八等	第八師擊	輜重輸卒	昆野豐松
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野儀右衛門
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野善助
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	阿部源之助
―	瑞寶章勳八等	第八師團	砲兵一等卒	菅野重左衛門
―	瑞寶章勳八等	橫須賀	海軍一等水兵	昆野林治
―	旭日章勳七等	橫須賀	海軍一等筆記	佐藤小平
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	昆野專松
―	瑞寶章勳八等	第八師團	步兵上等兵	昆野三之丞
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	昆野伊勢藏
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野千治郎
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野萬治郎
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野恒三郎
功七級	旭日章勳八等	第二師團	砲兵上等兵	菊池文治
―	瑞寶章勳八等	第八師團	上等看護卒	小野仙陵
―	旭日章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野巳之里

―	旭日章勳八等	第八師團	步兵二等卒	及川貞治
―	―	第八師團	步兵一等卒	伊東萬治
功七級	旭日章勳八等	第八師團	步兵上等兵	菅野源五郎
―	―	第八師團	步兵一等卒	昆野及治
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	昆野長力
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野仁太郎
―	旭日章勳八等	第八師團	步兵伍長	佐藤佐志治
―	旭日章勳八等	第八師團	輜重輸卒	久住乙三
―	旭日章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野幸一
―	瑞寶章勳六等	橫須賀	上等機關兵曹	佐藤庄三郎
功七級	旭日章勳七等	橫須賀	三等軍樂手	鈴木幸八
―	旭日章勳七等	橫須賀	海軍一等兵曹	上原忠吉
―	旭日章勳八等	第八師團	步兵上等兵	昆野六之丞
―	瑞寶章勳八等	第八師團	步兵一等卒	高橋藤助
―	―	第八師團	步兵二等卒	昆野隆治
―	旭日章勳八等	第八師團	砲兵一等卒	後藤周五郎
―	旭日章勳八等	第八師團	步兵一等卒	昆野駒藏
―	旭日章勳八等	第八師團	步兵一等卒	後藤々左衛門
功七級	旭日章勳八等	第八師團	步兵一等卒	伊藤四郎兵衛
―	旭日章勳八等	第八師團	步兵一等卒	後藤吉兵衛
―	瑞寶章勳八等	第八師團	步兵一等卒	後藤良造
―	瑞寶章勳八等	第八師團	步兵上等兵	後藤萬藏
―	瑞寶章勳八等	第八師團	輜重輸卒	菅野萬兵衛
功七級	旭日章勳七等	第八師團	步兵上等兵	鈴木駒藏

一	第八師團	輜重輸卒	鈴木甚助
一	第八師團	步兵上等兵	及川忠之丞
一	第八師團	步兵一等卒	小野寺松右衛門
一	第八師團	步兵上等兵	鈴木善治
一	第八師團	步兵一等卒	佐藤豐吉
一	第八師團	步兵一等卒	佐藤長命
一	第八師團	步兵一等卒	及川泰藏
一	第八師團	輜重輸卒	鈴木岩吉
一	第八師團	步兵上等兵	鈴木金治郎
一	第八師團	憲兵伍長	昆野善內
一	旭日章勳七等	第八師團	佐藤清七

廣瀨村

明治二十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
	勳七等	步兵第五十六聯隊	步兵軍曹	昆野廣治
	勳七等	步兵第五十六聯隊	輜重輸卒	菊池良治
	勳七等	輜重第六大隊	輜重輸卒	千葉清藏
	勳八等	輜重第六大隊	輜重輸卒	千田長力
	勳八等	輜重第六大隊	輜重輸卒	菊池春治
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	佐藤餐右衛門
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊池運治
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊池倉太郎
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	昆野孫右衛門
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	佐藤甚右衛門
	勳八等	步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	菊池卯右衛門
	勳七等	步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	神尾要壽
	勳七等	砲兵第一大隊		千葉慶治

明治三十七、八年戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
功七級	勳八等	步兵第五聯隊	步兵上等兵	千葉榮治
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵補充兵二等卒	千田圓五郎
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵補充兵二等卒	菅野音松
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵補充兵二等卒	菅野庄吉
	勳八等	輜重第八大隊	輜重輜卒	千葉豐治
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菅野豐三郎
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	後藤藤左衛門
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊池辰右衛門
	勳八等	輜重第八大隊	輜重輸卒	遠藤伊勢藏
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵補充兵二等卒	菊池昌吉
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊池萬治
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵上等兵	菅野直之助
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵伍長	菊池甚太郎
	勳八等	輜重第八大隊	輜重輸卒	千葉宇治郎
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	後藤善作
	勳八等	步兵第五十七聯隊	步兵一等卒	江川民右衛門
	勳八等	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菊池重右衛門
				菅野恒三郎

一	勳八等	歩兵第五聯隊	歩兵補充兵二等卒	佐藤伊三治
一	勳八等	歩兵第五聯隊	兵歩補充兵二等卒	菊池孫四郎
一	勳八等	輜重八大隊	輜重輸卒	菊池新作
一	勳八等	野砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	菊池熊治郎

歐州戰役

功級	勳等	所屬部隊	兵科官等級	氏名
一	勳七等	横須賀海軍鎮守府	海軍水兵一等兵曹	關村貞太郎
一	勳八等	横須賀海軍鎮守府	海軍水兵二等兵曹	菊池猛

西南役戰功者

功級	勳等	賜金	所屬部隊	兵科官等級	氏名
一	不詳	不詳		歩兵一等卒	千葉豐三郎
一	不詳	不詳		歩兵一等卒	八重樫勇作
一	不詳	不詳		歩兵一等卒	高橋榮吉

明治二十七、八年戰役

功級	勳等	賜金	所屬部隊	兵科官等級	氏名
一		二五	近衛歩兵第三聯隊	歩兵二等卒	小原幸治
一		二五	後備歩兵第四聯隊	歩兵一等卒	廣野初吉
一	瑞寶章勳八等	三五	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	高橋菊之丞
一		二五	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	千葉久吉
一		二五	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	及川甚左衛門
一		二五	近衛歩兵第三聯隊	歩兵一等卒	高橋龜藏
一			歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	及川清七
一	旭日章勳八等	五〇	歩兵第十七聯隊	歩兵上等兵	小原豐吉
一	瑞寶章勳八等	三五	歩兵第十七聯隊	歩兵上等兵	廣野龜治
一	瑞寶章勳八等	五〇	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	菅野源德
一		二五	近衛歩兵第一聯隊	歩兵一等卒	及川辨治郎
一		二五	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	川口萬三郎
一	瑞寶章勳八等	五〇	砲兵第二聯隊	砲兵一等卒	菊池安右衛門
一		一	歩兵第十七聯隊	歩兵上等兵	千田幸三郎
一		二五	近衛歩兵第一聯隊	歩兵一等卒	高野喜太郎
一		二五	歩兵第十七聯隊	歩兵一等卒	千葉音治
一		二五	後備歩兵第四聯隊	歩兵一等卒	高野榮治
一		二五	後備歩兵第四聯隊	歩兵一等卒	家子丑吉
一	瑞寶章勳八等	五〇	彈藥大隊砲兵第一縱列	砲兵上等兵	竹川幸吉
一	瑞寶章勳八等	三五	大本營	歩兵一等卒	及川幸治郎

明治三十七、八年戰役

功級	勳等	賜金	所屬部隊	兵科官等級	氏名
一	旭日章勳六等	二〇〇	後備歩兵五十六聯隊	歩兵少尉	沼田安治
一	旭日章勳七等	一五〇	歩兵第五聯隊	歩兵軍曹	千田齋喜
功七級	旭日章勳八等	年金、一〇〇	歩兵第五聯隊	歩兵伍長	小山東三郎
一	旭日章勳八等	二〇〇	歩兵第五聯隊	歩兵伍長	高橋喜七
一	瑞寶章勳八等	七〇	歩兵第五聯隊	歩兵伍長	高橋市郎右衛門
一	瑞寶章勳八等	八〇	歩兵第五十九聯隊	歩兵伍長	高橋儀作
一	瑞寶章勳八等	八〇	歩兵第五十二聯隊	歩兵一等卒	伊藤儀三郎

瑞寶章勳八等	—	歩兵第五十二聯隊	歩兵一等卒	新田忠治
旭日章勳八等	二〇〇	歩兵第五十二聯隊	歩兵一等卒	菊池三之助
瑞寶章勳八等	八〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池良吉
瑞寶章勳八等	八〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	高橋清三郎
瑞寶章勳八等	八〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菅原幸吉
旭日章勳八等	一五〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	高橋與治郎
瑞寶章勳八等	八〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	伊藤清吉
旭日章勳八等	二〇〇	近衛歩兵第一聯隊	歩兵一等卒	及川彪質
旭日章勳八等	一五〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	及川三藏
旭日章勳八等	一五〇	歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	千葉喜久右衛門
旭日章勳八等	一〇〇	歩兵等五聯隊	歩兵一等卒	菊地長兵衛
旭日章勳八等	一五〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	高野吉太郎
旭日章勳八等	一〇〇	歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	及川卯之助
瑞寶章勳八等	八〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	八重樫林藏
旭日章勳八等	一〇〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	及川善四郎
旭日章勳八等	二〇〇	歩兵第五聯隊	歩兵上等兵	佐藤留三郎
旭日章勳八等	一五〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	高橋命助
瑞寶章勳八等	八〇	騎兵第八聯隊	騎兵一等卒	家子新吉
功七級 旭日章勳八等	年金一〇〇	騎兵第八聯隊	騎兵上等兵	菊池宗治
—	三五	騎兵第八聯隊	騎兵一等卒	阿部卯左衛門
—	五〇	野砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	菊池忠藏
—	三五	野砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	及川善藏
瑞寶章勳八等	七〇	第四糧食縱列	輜重輪卒	菊池善十郎
旭日章勳八等	八〇	第四糧食縱列	輜重輪卒	八重柏利七

—	五〇	第四糧食縱列	輜重輪卒	小原兵右衛門
—	—	第四糧食縱列	輜重輪卒	及川彌七
旭日章勳八等	八〇	第四糧食縱列	輜重輪卒	青木智隆
旭日章勳八等	一五〇	第四糧食縱列	輜重輪卒	阿部勘太郎
—	—	歩兵第五聯隊	歩兵二等卒	佐藤音吉
瑞寶章勳八等	七〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	及川己代之丞
—	三五	歩兵第五聯隊	歩兵二等卒	新田壽治
瑞寶章勳八等	七〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	高橋良作
—	—	歩兵第五聯隊	歩兵二等卒	安部庄之助
旭日章勳八等	一五〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	廣野長助
旭日章勳八等	一〇〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	高橋昌吉
瑞寶章勳八等	八〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊地五郎右衛門
旭日章勳八等	八〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	高橋久助
旭日章勳八等	一五〇	歩兵第二十五聯隊	歩兵一等卒	菊池龜吉
旭日章勳八等	一〇〇	歩第兵五聯隊	歩兵一等卒	後藤良馨
旭日章勳八等	一〇〇	歩兵第五聯隊	歩兵二等卒	菊池新左衛門
旭日章勳八等	一〇〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	高橋儀三郎
—	—	歩兵第五聯隊	歩兵二等卒	菅原長命
瑞寶章勳八等	七〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	小澤喜太郎
瑞寶章勳八等	七〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	高橋平八郎
瑞寶章勳八等	七〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	及川清一郎
瑞寶章勳八等	七〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	菊池孫助
瑞寶章勳八等	—	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	阿部倉治
瑞寶章勳八等	七〇	歩兵第五聯隊	歩兵一等卒	安部武三郎

」	三五	野砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	高橋三五郎
」	三五	野砲兵第八聯隊	砲兵一等卒	高野新右衛門
」	五〇	第六補助輸卒隊	輜重輸卒	千葉又十郎
」	二〇〇	第四補助輸卒隊	輜重輸卒	安部文之助
」	八〇	第十五補助輸卒隊	輜重輸卒	菊池儀藏
」	五〇	第八旅團彈薬大隊	輜重輸卒	高橋卯之吉
」	一五〇	第三補助輸卒隊	輜重輸卒	菊池榮松
」	八〇	第二十三補助輸卒隊	輜重輸卒	及川千藏
」	七〇	輜重兵第八大隊	輜重輸卒	菅原芳之助
」	一〇〇	第八師團第三補助輸卒隊	輜重輸卒	菊池清治
」	五〇	第八師團第二十五補助輸卒隊	輜重輸卒	及川房松
」	八〇	第八師團第二十五補助輸卒隊	輜重輸卒	鈴木與左衛門
」	三五	第八師團補充馬廠	輜重輸卒	及川清三郎
」	」	第八師團補充馬廠	輜重輸卒	上野喜作
」	七〇	獨立第十三師團兵站部	輜重輸卒	柏亀藏
」	七〇	第二十五補助輸卒隊	輜重輸卒	菅原友治
」	三五	第十九補助輸卒隊	輜重輸卒	及川朝太郎
」	一〇〇	後備混成第八旅團司令部	輜重輸卒	高橋永助
」	五〇	第十九補助輸卒隊	輜重輸卒	千田幸左衛門
」	八〇	輜重兵第八大隊補充大隊	輜重輸卒	後藤伊三郎
」	」	步兵第五聯隊	輜重輸卒	白井憲阿
」	三五	國民步兵第一聯隊	步兵一等卒	及川桂助
」	三五	國民步兵第一聯隊	步兵一等卒	家子丑吉
」	五〇	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	及川幸治郎
」	五〇	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	高橋龜藏
功七級	年金一〇〇	後備步兵第五十六聯隊	步兵上等兵	眞野龜治
」	一〇〇	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	菅野源德
」	八〇	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	及川辯治郎
」	一〇〇	後備步兵第五十六聯隊	步兵一等卒	川口萬三郎
」	二〇〇	野砲兵第八大隊	砲兵一等卒	菊池安右衛門
」	二〇〇	後備步兵第五聯隊	步兵上等兵	千田幸三郎
」	八〇	後備步兵第五聯隊	步兵一等卒	高野喜右衛門
」	八〇	後備步兵第五聯隊	步兵上等兵	千葉音治
」	三〇〇	步兵第五聯隊	步兵軍曹	及川壤之輔
」	八〇	近衛步兵第一聯隊	步兵一等卒	菊池松五郎
」	二〇〇	第十補助輸卒隊	輜重輸卒	遠藤力之助
」	二〇〇	步兵第五聯隊	步兵一等卒	千田武治郎
」	八〇	第一糧食縱列	輜重輸卒	高橋源治郎
」	五〇	第十三師團司令部	輜重輸卒	高橋末治郎
」	二〇〇	步兵第五聯隊	步兵一等卒	熊谷藤吉
」	二〇〇	臺灣守備	步兵伍長	松本康藏
」	」	步兵第五聯隊	步兵一等卒	菅原登利治
」	五〇	第十補助輸卒隊	輜重輸卒	廣野松助
」	一五〇	後備步兵第十七聯隊	步兵一等卒	高橋蓮治
」	一〇〇	步兵第五聯隊	步兵一等卒	及川松右衛門
」	一五〇	後備第八旅團	步兵一等卒	千葉久吉
」	一〇〇	步兵第五聯隊	步兵一等卒	高橋與治右衛門
」	二〇〇	野砲兵第八大隊	砲兵輸卒	菊池良作

第七章　衛生　警察　兵事

〃	瑞寶章勳七等	一〇〇	後備歩兵五十六聯隊	歩兵一等卒	高橋菊之丞
〃	旭日章勳七等	二五〇	淺備歩兵第五聯隊	歩兵軍曹	高橋長九郎
〃	〃	〃	野砲兵第十四大隊	砲兵一等卒	新田惣治
〃	旭日章勳七等	〃	〃	一等兵曹	松本孝良
〃	旭日章勳八等	〃	〃	一等水兵	小原巳之助
〃	旭日章勳八等	〃	〃	一等水兵	熊谷利助
〃	旭日章勳八等	〃	〃	一等水兵	小原善助

日獨戰爭戰功者

功級	勳等	賜金	所屬部隊	兵種等級	氏名
〃	旭日章勳七等	〃	〃	一等兵曹	高橋辰治
〃	旭日章勳七等	〃	〃	一等兵曹	三浦酉之助
〃	旭日章勳七等	〃	〃	一等兵曹	高橋喜三治
〃	旭日章勳八等	〃	〃	一等機關兵曹	八重柏錠二
〃	旭日章勳八等	〃	〃	一等兵曹	菊池與左衛門
〃	旭日章勳八等	〃	〃	三等兵曹	菅野富治
〃	旭日章勳八等	〃	〃	一等水兵	後藤清四郎
〃	旭日章勳八等	〃	〃	一等水兵	高橋正三
〃	旭日章勳八等	〃	〃	二等水兵	菊池信一
〃	旭日章勳八等	〃	〃	一等水兵	及川武雄
〃	旭日章勳八等	〃	〃	一等水兵	廣野正雄
〃	旭日章勳七等	五〇	〃	村長	菊池邦治郎
〃	瑞寶章勳八等	〃	〃	助役	及川良策
〃	瑞寶章勳八等	〃	〃	助役	巡池富三郎

〃　銀盃一個　〃

五、戰死者

岩谷堂町

戰病死年月日及場所	兵科官等	位勳	氏名
黑溝臺會戰ニ參加媽々街ニ於テ明治三十八年一月二十五日戰死	歩兵中尉	從七位旭日勳六等功五級	白土隆吉
黑溝臺會戰ニ參加貢傷明治卅八年一月卅日烟臺兵站病院ニ於テ死亡	歩兵少尉	正五位旭日章勳六等	吞松丈作
黑溝臺會戰ニ參加明治三十八年一月二十七日戰死	歩兵曹長	旭日章勳七等功七級	石田長助
奉天會戰ニ參加魚鱗堡ニ於テ明治三十八年三月五日戰死	歩兵曹長	旭日章勳七等功七級	高橋子三郎
右同　〃　同所ニ於テ同年同月八日戰死	歩兵伍長	旭日章勳八等功七級	菅野竹治郎
黑溝臺會戰ニ參加明治三十八年一月二十六日戰死	歩兵一等卒	旭日章勳八等	菊地卯太郎
旅順攻擊ニ參加明治三十七年十一月三十日戰死	工兵一等卒	旭日章勳八等功七級	菊地喜代治
奉天會戰ニ參加明治三十八年三月三日大視山堡ニ於テ戰死	歩兵上等兵	旭日章勳八等功七級	菅原丑三郎
黑溝臺會戰ニ參加明治三十八年一月廿七日戰死	歩兵上等兵	旭日章勳八等功七級	小松原榮治
同　〃　右明治三十八年一月廿六日戰死	歩兵上等兵	旭日章勳七等功七級	菊地喜代吉
黑溝臺會戰ニ參加明治三十八年一月廿六日津塚夕岡ニ於テ戰死	歩兵上等兵	旭日章勳八等功七級	小澤啓治
奉天會戰ニ參加明治三十八月三月四日大楡樹堡ニ於テ戰死	歩兵上等兵	旭日章勳八等功七級	千葉重右衛門
旅順海戰ニ參加明治三十七年九月十八日戰死	海軍二等木工	旭日章勳八等	木村松治
明治三十七年十二月六日廣島豫備病院ニ於テ病死	工兵一等卒		小松清助

愛宕村

戰病死者年月日及場所	兵科	官等級	氏名
明治三十一年一月十二日大韓國京城ニ於テ戰死	歩兵	一等卒	小澤嘉七
明治三十八年十一月六日清國蓋京倉鐵嶺ニ於テ公病死	輜重兵	輸卒	高橋一二三

明治三十八年一月二十六日黑溝臺會戰ニ參加戰死
奉天會戰ニ參加盛京省揚士屯ニ於テ三十八年三月七日戰死
奉天會戰ニ參加盛京省魚鱗堡ニ於テ三十八年三月八日戰死
明治三十九年一月一日臺灣八共關字八仙渡ニ於テ戰死

羽田村

戰病死者年月日及場所	兵科	官等	氏名
臺灣島基隆港ニテ明治二十八年八月二十二日死亡	歩兵	一等卒	佐藤善右衛門
臺灣臺南宮營病院ニ於テ明治二十八年十一月十九日死亡	輜重兵	輸卒	今野今朝吉
清國奉天省頭臺子ニ於テ明治三十八年三月二日戰死	歩兵	一等卒	小野寺武紀
清國盛京省則家堡第八帥團第一野戰病院ニ於テ明治三十八年三月四日負傷ニ因リ死亡	工兵	二等卒	及川吉右衛門
清國蘇胡堡定立病院ニ於テ明治三十八年三月十六日死亡		上等兵	千葉彌右衛門

黑石村

戰病死者年月日及場所	兵科	官等	氏名
明治二十八年九月二十三日於基隆兵站病院病死	歩兵	一等卒	千葉島藏
明治三十八年一月廿八日清國黑溝臺附近頭泡ニテ敵彈胸部貫通死亡	歩兵	一等卒	及川松之丞
明治二十八年五月廿七日清國柳樹屯兵站病院ニ於テ病死	第二師團砲廠監視隊付	軍夫	吉田龜之進
明治二十八月十月十一日基隆病院ニ於テ病死	臺灣兵站糧縱列付	軍夫	佐藤龜治
明治二十九年二月六日廣島陸軍豫備病院ニ於テ病死	第二師團第二野戰砲廠付	軍夫	伊藤伊七

田原村

戰病死者ノ年月日及場所	兵科	官等級	氏名
黑溝臺ニ於テ明治三十八年一月二十六日戰死	歩兵	伍長	早川新平

揚士屯ニ於テ明治三十八年三月七日戰死
揚士屯ニ於テ明治三十八年三月七日戰死

藤里村

戰病死者年月日及場所	兵科	官等級	氏名
清國盛京省鞍子高戰死明治二十八年七月廿九日	歩兵	一等兵	佐藤花五郎
廣島豫備病院ニ於テ明治二十八年八月二十三日死亡	輜重兵	輸卒	菊池熊治郎
黑溝臺ニ於テ戰死明治三十八年一月二十八日	歩兵	上等兵	佐々木英治
黑溝臺ニ於テ戰死明治三十八年一月廿七日	歩兵	上等兵	及川清治
清國盛京省魚林堡明治十八年三月六日戰死	歩兵	二等卒	矢作與吉
清國清京省遼陽兵站病院明治三十七年十一月八日病死	工兵	一等卒	及川寅之助

伊手村

戰病死者年月日及場所	兵科	官等	氏名
明治二十八年六月十二日臺灣臺北府ニ於テ戰死	歩兵	一等卒	佐藤善太夫
明治二十八年八月二十八月　同　上	歩兵	一等卒	石田彌壽治

米里村

戰病死者年月日及場所	兵科	官等	氏名
明治三十七年五月十五日清國山東角附近ニ於テ戰死	海軍	中機關士	利府齊
明治三十七年一月十三日黑溝臺會戰ニ於テ戰死	歩兵	上等兵	佐藤幸左衛門
明治三十八年三月三日盛京省新立屯病院ニ於テ死亡	歩兵	上等兵	佐藤庄治郎
明治三十八年一月二十一日黑溝臺ニテ戰死	歩兵	上等兵	後藤儀八郎
明治十年九月二十四日鹿兒島縣城山ニ於テ戰死	歩兵	一等卒	佐藤榮助

明治三十七年十月十五日奉天府李大人屯ニテ戰死
明治三十七年十月三十日清國沙滸兵站病院ニテ死亡
明治三十八年八月二十八日盛京省井家荒地病院ニテ死亡

玉里村

戰病死者年月日及場所

明治二十八年九月十三日基隆兵站病院ニテ死ス
明治三十四年一月九日臺灣礁溪ニテ死亡
明治三十八年三月奉天會戰參加戰死
明治三十八年一月二十七日黑溝臺大戰ニ參加津塚岡ニ於テ戰死
明治三十八年十月三日廣島病院ニテ死亡
明治三十五年一月十五日雪中行軍ニ參加青森縣八甲田山ニ於テ死亡
大正元年八月八日横須賀海兵團ニ於テ死亡

梁川村

戰死者ノ年月日及場所

明治三十八年十一月二十五日清役臺灣ニ於テ戰死
明治三十八年一月二十七日清國黑溝臺ニ於テ戰死
同　上
明治三十八年三月六日奉天會議ノ際寧官屯ニ於テ戰死
明治三十八年三月七日奉天會戰ノ際揚士屯ニ於テ戰死
明治三十七年九月十八日清國鳩灣ニ於テ軍艦平遠擊沈ノ際戰死

福岡村

兵科	官等	氏名
歩兵	一等卒	千葉善之助
歩兵	一等卒	小原源三郎
輜重兵	輸卒	佐藤卯藏

兵科	官等級	氏名
歩兵	一等卒	菊池忠右衛門
歩兵	一等卒	佐藤伊勢松
歩兵	特務曹長	菊池懋
歩兵	一等卒	高橋喜左衛門
歩兵	一等卒	後藤孫右衛門
歩兵	上等兵	安部長壽郎
海軍	一等兵曹	高橋庄右衛門

兵科	官等	氏名
歩兵	一等軍曹	菊池喜代治
歩兵	一等卒	菊池六左衛門
歩兵	一等卒	菊池太八郎
歩兵	上等兵	安部菊吉
歩兵	一等卒	菊池儀左衛門
海軍	三等水兵	梅津和兵衛

戰病死者年月日及場所

明治三十八年三月七日　清國小貴興堡
明治三十八年　十二月四日　旅順口港外
明治三十八年三月五日　盛京省寧官屯
明治三十五年一月二十六日　八甲田山麓

兵科	官等	氏名
歩兵	伍長	千葉命助
海軍	等機關兵曹	上原藤八
歩兵	上等兵	菅野和十郎
歩兵	一等卒	菅野源藏
海軍	輜重輪卒	菅野鶴治
砲兵	二等水兵	昆野林治
歩兵	一等卒	菊池武左衛門
海軍	伍長	昆野三喜之助
歩兵	三等軍樂手	鈴木幸八
歩兵	二等卒	昆野隆司
歩兵	一等卒	昆野宇吉
歩兵	上等兵	伊藤四郎兵衛
歩兵	上等兵	菅野與吉
歩兵	一等卒	伊東萬治
歩兵	一等卒	佐藤豐吉
歩兵	上等兵	菅野源五郎
海軍	一等兵曹	菅野仁右衛門

明治三十八年三月七日　清國小貴興堡
明治三十八年　十二月四日　旅順口港外
明治三十八年三月五日　盛京省寧官屯
明治三十五年一月二十六日　八甲田山麓
明治三十八年十月三日　韓國輪城兵站病院
明治三十八年十月二十八日　佐世保病院
明治二十八年十月十六日　臺灣澎湖島
明治三十五年一月二十六日　八甲田山麓
明治三十八年九月十一日　佐世保軍港三笠艦爆沈
明治三十八年三月一日　清國前年魚泡
明治二十八年八月九日　廣島豫備病院
明治三十八年一月二十七日　盛京省黑溝臺
明治三十八年三月七日　盛京省揚士屯
明治三十八年三月六日　清國魚鱗堡
明治三十八年三月五日　清國漢城堡
明治三十八年三月五日　清國魚鱗堡
大正七年七月十二日　德山灣河内艦爆沈

廣瀨村

戰病死者年月日及場所

臺灣宛里兵站病院ニ於テ明治二十八年九月二日病死
臺南舍營病院ニ於テ明治二十八年十一月四日病死
臺灣基隆兵站病院ニ於テ明治二十八年七月廿四日病死

兵科	官等級	氏名
憲兵	上等兵	菅野清左衛門
	輜重輪卒	阿部惣三郎
	輜重輪卒	後藤繁治郎

清國盛京省黑溝臺ニ於テ三十八年一月二十六日戰死　歩兵　伍長　千葉喜内
清國盛京省橋頭定立病院ニ於テ三十七年八月廿七日病死　歩兵　伍長　關村佐一
清國盛京省寧官屯ニ於テ三十八年三月七日戰死　歩兵　上等兵　菊池爲次
黑溝臺ニ於テ三十八年一月二十七日戰死　歩兵　上等兵　伊藤東之助
黑溝臺ニ於テ三十八年一月二十六日戰死　歩兵　上等兵　後藤茂治郎
盛京省遼陽ニ於テ三十八年十月四月戰死　歩兵　輜重輸卒　菅野喜藏

稲瀬村

戰病者年月日及場所	官等	氏名
明治三十八年一月二十八日黑溝臺ニ於テ戰死	歩兵上等兵	高橋玉治郎
明治三十八年一月二十七日　同　上	歩兵伍長	松本政五郎
明治三十八年一月二十七日　同　上	歩兵軍曹	千葉惣吉
明治三十八年三月十日奉天ニ於テ戰死	歩兵上等兵	阿部卯左衛門
明治三十八年三月七日揚子屯ニ於テ戰死	歩兵上等兵	千葉東左衛門
同　上	歩兵上等兵	菊池房治
明治三十八年五月二十日臺北衛戍病院宜蘭分院ニ於テペストニテ病死	歩兵上等兵	廣野初吉
明治三十八年九月二十八日大連兵站病院ニ於テ病死	輜重輸卒	阿部茂太郎
明治三十八年十月三十日鐵嶺兵站病院ニ於テ病死	歩兵一等卒	高橋暲一
明治三十八年三月七日揚子屯ニ於テ戰死	歩兵一等卒	高橋豐吉
明治二十八年十月二十三日布袋嘴患者集合所ニ於テ病死	歩兵二等卒	高橋伊勢松
明治三十年八月十四日臺中衛戍病院苗栗分院ニ於テ病死	憲兵上等兵	阿部龜治
明治二十八年八月三十日臺北兵站病院ニ於テ病死	歩兵二等卒	及川幸松
明治二十八年五月十八日清國盛京省甜子窩舍營病院ニテ病死	歩兵一等卒	高橋佐代治
明治二十八年十九日基隆兵站病院ニ於テ病死	歩兵一等卒	菊池養三郎
大正三年乃至九年ノ役ニ從軍中傳染病ニ罹リ大正六年一月四日死亡ス	歩兵海軍中軍醫	千葉富治郎

第八章　宗教

一　神道

郡内神社數五十二其由緒の考ふべきもの少なし。內郷社一社村社十五社、無格社三十六社にして一町平均四社なり。縣平均も亦四社にして、最高は和賀郡の九社、最低は氣仙二戸の二社なり。之を戸口神職にあつれば、郡内一社につき約百三十四戸一千〇三十一にして、之に奉仕する神職は一人につき凡そ二社を兼ぬべき割合なり。縣内平均は一社につき約百三十戸九百二十七人、神職一人に對して四社平均なり。然れども以上の統計に載せられざる明細帳以外の神社は、各町村の小部落毎に必ず一社ありて、例祭は勿論、又其營繕等をも懈らざるを見れば、實際に於て神社と認むべきもの、其數甚だ多かるべし。元來崇敬信仰は、理論にあらず人心に基くものなり。維新の際神佛分離するに當り、之が實施は、施行者によりては極端に陷りしものありしにより、當時の大勢と共に、衆人をして神社に對する崇敬信仰の念を失はしめたり。郡内にありても不幸にして之に遭ひし神社は、俄かに神威を蔽ひ、參拜者を減じ、修補營繕にも力を盡さざるものあるに至れり。近來幣帛供進社も指定せられ、崇敬の方法等も至れりと雖も未だ昔日の純なる精神にかへること能はざるは甚だ遺憾なりといふべし。今左に神社一覽表を掲く。

神社一覽

（神社明細帳所載）

鎮座地	社格	神社名	幣帛供進社指定年月日	創立年代
岩谷堂町字餅田	村社	鎮國神社	明治四十年四月十二日	不詳　式内社

同	字一日町	無格社	秋葉神社		不詳
同	字向山	同	五十瀬神社		不詳
同	字館下	同	愛宕神社		元和八年
同	字柳澤	同	八雲神社		不詳
同	字增澤	同	新山神社		不詳
愛宕村	字川島	村社	川島神社	大正五年九月二十二日	不詳
同	字田舍	無格社	皇大神宮		不詳
同	字西下河原	同	愛宕神社		不詳
同	字田舍	同	谷清水神社		不詳
羽田村	字羽黒堂	鄕社	出羽神社	明治四十年四月十二日	延暦年間
羽田村	字田茂山	無格社	五十瀬神社		不詳
同	字鷲澤	同	八幡神社		不詳
同	字黒田助	同	宇迦神社		不詳
黒石村	字大明神	村社	石手堰神社	明治四十年四月十二日	景行帝入朝式內社
田原村	字土谷	同	石十瀬神社		
同	字大田代	同	五十瀬神詳	明治四十年四月十二日	不詳
同	字小田代	無格社	五十瀬神社		不詳

同	字原躰	同	大山祇神社		不詳
同	字石山	同	皇大神社		不詳
藤里村	字智福	村社	愛宕神社	明治四十年四月十二日	不詳
同	字石名田	無格社	愛宕神社		延暦中
伊手村	字小中田	村社	戸隱神社	明治四十年四月十二日	延暦中
同	字荒谷	無格社	秋葉神社		
同	字八幡	同	八幡藥師相殿神社		康平中
同	字隅川	同	五十瀬神社		明治十九年相殿
米里村	字本小路	村社	麓山神社		延暦中
同	字中澤	無格社	麓山神社		元祿十五年
玉里村	字玉崎	村社	駒形神社	大正元年十月二十五日	延暦中
同	字白山通	同	皇大神宮	大正七年五月八日	延暦中
梁川村	字藤渡戸	同	松尾神社		不詳
同	字大尻	無格社	月山神社		延暦中
同	字館下	同	五十瀬神社		不詳
同	字市道	同	白山神社		延暦中
同	字館下	同	氷上神社		元和三年

福岡村	字古川口	村社	麓山神社	大同二年
福岡村	字國ケ森	無格社	國ケ森神社	大正五年十月十三日
同	字長根	同	古館神社	不詳
同	字岩井	同	新山神社	不詳
同	字久田	同	菅原神社	不詳
同	字飛	同	淺間神社	正保二年
廣瀬村	字貝竹	村社	御嶽神社	不詳
同	字谷地田	無格社	新山神社	不詳
同	字平	同	音石神社	不詳
同	字宮内	同	熊野神社	不詳
同	字堂ノ下	同	白山神社	不詳
稻瀬村	字袖野	村社	熊野神社	不詳
同	字瀬谷子	同	五十瀬神社	文治五年
同	字門岡	無格社	國見山神社	大正七年七月
同	字岩脇	同	愛宕神社	不詳
同	字熊澤	同	鞍掛神社	不詳
同	字廣岡	同	新山神社	不詳

境内社一覽

鎮座地	神社名	鎮座地	神社名
藤里村字知境内	事毘羅神社	同	津島神社
愛宕字石名田	八坂神社	麓山村字中澤境内	八幡神社
同宕神社境内	稻荷三社合殿	同	熊野神社
伊手村字隅川五十瀬神社境内		玉里村字玉崎境内	嚴島神社
同	藤原神社	駒形神社	白山神社
同	菅原神社	同皇太神宮	
米里村字中澤麓山神社境内	五十瀬神社	白山通字境内	

二　佛　教

本郡内に於ける宗教は殆んど佛教にして寺院の數四十七、其他の佛堂。亦少なからず。之を宗派により て分てば曹洞三十一寺、眞言六寺、天台五寺、淨土二寺、眞宗一寺、日蓮一寺、黃蘗一等なり。天台寺院の古きは黑石寺にして、行基の開創と傳ふ。現今の國見山極樂寺は、慈覺の草創にして天台に屬し、偵岳寺と稱し、堂宇四十七、僧坊七百の大山なりき。其他般藏寺、重染寺、多聞寺、圓通院等見るべきもの少なからざりしも、中途にして退轉し他宗に再興せられしもの多し。曹洞宗は貞和四年無底良韶正法寺を開きてより、俄かに勃興し、其後三百年間は、郡内各所に同宗寺の建立を見るに至れり。即ち紀元二千二十年代には萬藏寺同五十年代には正重寺寶全寺寶城寺興國寺光明寺、同八十年代には西念寺瑞德

寺圓通寺、二千百十年代には藤春院吉祥寺、同七八十年代には西泉寺石洞寺明藏寺守林寺宗賢寺、二千二百三十年代に西光寺、同五十年代に的叟寺正源寺廣德寺の創立あり。降りて二千三百六七十年前後には、正光寺萬松寺寶積寺等を見、二千四百三十年代に大德寺創設せられたり。眞言宗は主に伊達氏時代に於て、天臺廢寺を再興したるものにして、古く名僧等の創建したるものなし。淨土宗も古くより傳はりしものゝ如く、松岩寺は二千二百二十年代の創建と傳へらる。新しきは日蓮寺にして、明治初年の開創なり。今左に現在寺院の一覽を掲げん。

寺院一覽（寺院明細帳所載）

所在地	宗派	寺院名	開山年代	開山
岩谷堂町字向山	曹洞宗	大藏山光明寺	應永年間	月泉良印
同　字川原町	淨土宗名越派	瑠璃山松岩寺	永錄十一年	良誓和尙
同　字館下	眞言宗智山派	愛宕山興性寺	元和八年	興性和尙
同　字增澤	曹洞宗	宗保山萬松寺	享保二年	良棟和尙
同　字根岸	同	片岡山正重寺	元中七年	徹叟弘邇
同　字向山	日蓮宗	經王山蓮久寺	明治十一年	立花日讓
同　字根岸	天台宗	年子山寶性寺	不詳	不詳
同　字向山	眞言宗新義派	岩屋戶多聞寺	天和二年	中興開基弘祐
愛宕村字田舍	曹洞宗	傳知山西念寺	應永三十三年	宗詮和尙
同　字高寺	黃蘗宗	圓通院	天和二年	中興開基鳳山
羽田村字黑田助	天台宗	黑田山千養寺	嘉祥三年	慈覺大師
羽田村字田茂山	曹洞宗	福珠山寶全寺	應永二年	田叟英梅
同　字鶯澤	同	鶯澤山花林院	元和三年	成岩良圓
黑石村字正法寺	同	大梅拈華山圓通正法寺	貞和四年	無底良韶
同　字鶴城	同	龍門山藤春院	寶德二年	在山融松
同　字山內	天台宗	妙見山黑石寺	天平元年	行基上人
田原村字原躰	曹洞宗	玉峯山寶城寺	應永三年	月峯良燈
同　字澤田	天台宗	澤田山東漸寺	天安元年	慈覺大師
同　字宮地	曹洞宗	田代山興國院	應永二年	田叟英梅
同　字大田代	同	龍澤山耕田寺	天文十一年	虛窓良巴
藤里村字淸水柳	天台宗	愛宕山勝軍寺	延曆年間	賢澄阿闍梨
同　字橫瀨	曹洞宗	普老山圓通寺	正長元年	月堂良澄
同　字淺井	同	慈眼山西泉寺	永正八年	然室在默
伊手村字町裏	眞言宗新義派	如意山眞行寺	不詳	不詳
同　字荒谷	曹洞宗	太白山高林寺	不詳	西南春齋
同　字大中田	同	報思山明藏寺	大永二年	盤室盛林

同	字深持	同	心相山	的叟寺	慶長年間
米里村	字荒田表	同	龍首山	自德寺	慶長十一年
玉里村	字次丸	同	懸山	正光寺	寶永三年
同	字角掛	同	懸角山	瑞德寺	應永三十年
同	字角掛	同	青篠山	守林寺	大永二年
同	宇下上野	眞宗本願寺派	山	信行寺	不詳
梁川村	字菅生	曹洞宗	松華山	菅生院	不詳
同	字日神	同	萬年山	金性寺	不詳
福岡村	字金峯山	同	金峯山	萬藏寺	康安元年
同	字館	同	洞龍山	寶積寺	正德二年
同	字久田	曹洞宗	德林山	宗賢寺	應仁二年
同	字中野	淨土宗名越派	千壽山	正行寺	寛文八年
廣瀨村	字館	曹洞宗	鴨澤山	大德寺	明和七年
同	字四釜田	同	福壽山	吉祥寺	寶德三年
同	字輕石	同	音石山	西光寺	元龜二年
稻瀨村	字下門岡	眞言宗智山派	上臺山	安樂寺	嘉祥三年
同	字內門岡	眞言宗新義派	國見山	極樂寺	同上
同	字田中	曹洞宗	石列山	石洞寺	永正二年
同	字臺	同	照峯山	正源寺	慶長の頃
同	字廣岡	同	倉澤山	廣德寺	文祿二年
同		眞言宗	岩谷山	如意輪寺	同上
同		曹洞宗	石列山	石洞寺	永正二年
同		同	照峯山	正源寺	慶長の頃
同		同	倉澤山	廣德寺	文祿二年

佛宇一覽（明細帳所載）

所在地	佛宇名	所在地	佛宇名
岩谷堂町字川原町 松岩寺境田	觀音堂	田原村字澤田 東漸寺境內	荒神堂
岩谷堂町字根岸 寶性寺境內	太子堂	田原村字大田代 耕曰寺境內	觀音堂
黑石村字山內 黑石寺境內	妙音堂	米里村字荒田表 自德寺境內	阿彌陀堂
同	千手觀音堂	稻瀨村字下門岡 安樂寺境內	靈牌堂
同	釋迦堂	玉里村字角掛	觀音堂

附記

かくし念佛

淨土眞宗の一派にして郡內各處に行はる。加藤咄堂氏の日本風土誌に其詳細を悉したれば左に抄錄せん。

秘事念佛

此地方の習俗中に一異彩あるは、秘事念佛の流行である。これは淨土眞宗の一派で、本願寺等の認め

て異端となす所のものである。此派の主張によれば、眞宗の念佛には內法と表法との二つあつて、表法は本願寺末山僧徒の弘むる皮相の法門で內心他力廻向の信心なきものなるが、內法は京都柳馬場鍵屋某に附屬したまふ眞實の法義で、これは鍵屋某が山科に於て、眞宗中興の蓮如上人より相傳し來たものとし秘密を旨とし居るので、其初めは寶曆の頃、水澤町の五郎八と、同町附近なる澁谷地の勘兵衛との二人が、氣仙沼に赴きて、江戸の商人墨屋仁兵衛より傳法したるに初り、伊達主水の家中小性組山崎杢左衛門も亦之れに入門し、京都に上りて鍵屋宇兵衛の法を受け、密かに此地方に傳導したること發覺して、終に磔刑に處せられたので、其申渡書の中には、

上畧其方事俗の身として、佛間を作り文章を語り聞かせ、第一在々所々かけ行き、一念歸信心決定の法に事寄せ、諸人を勸め他の疑を避くべきため、眞宗の出家に歸依せしめ、一應の同行といひ、追て其身に歸依することに及び、同行と稱し脇へ洩れ聞え候を恐れ、其法蓮如上人より初めて俗に傳はり候條、同流の出家へも聞かせ問數由、約束せしめ歸依するものを山中に引入れ、或は土藏に會し如來の繪像を前に置き、蠟燭を立て息を歸へさし助け給へ唱へ候と敎へ、其精神をつからし、終に無症になり候節、蠟燭を取り口中を見、成佛疑なき由稱し、大に人の信を起し、邪法を以て數郡の百姓大勢を誑ひ惑はし、御政事を害し、非道の重科に仍つて、其處に於て磔に行はれ候事。

とこれにて秘事念佛の如何なるものかが想像することが出來る（布敎會一ノ十二）。此杢左衛門が磔刑に處せられた時、彼れの內佛の本尊に血を濺かれた、傳へて御身代りの本尊として同宗徒に尊重せられてる。此時澁谷地の勘兵衛は、難を南部領に避けて和賀郡岩崎村に隱れて、秘かに傳導を企で、それが此地方に蔓延し別に京都の鍵屋より直傳し來れる木村良安によりて、紫波郡地方に擴められ、紫波派といふものもあつて、今尙盛に行はれて居る。彼等は男女四五歳に至れば、おもとづけ、又はとりあげと名付けて、其派の智識と稱せらるゝ人より、一念歸命の信心の種を渡して貰ふ。其儀式は或は密室に於て助け給へ助け給へと數十遍も連唱せしめ、蠟燭に點火し鼻口の所に立てゝ、氣息を計り息のある限り、腹力のつゞく限り、グーと出息せしめ、其盡んとする一刹那に其智識なるものがタスケと喝破して、一種特別なる精神感動を受けしめ、之を往生日と記念せしむるのであるといふ。邪法として禁じられた時代にさへ行はれたのであるから、今日自由の世となつては異常の勢力を以て居るのである。

三　修驗道

本郡內にある修驗は、一二を除く外、皆羽黑派に屬せり、羽黑派の修驗は、其修行を入峯といひ、羽州羽黑山に籠り、連日連夜の苦行をなせり。從つて法位の授與各種の免許は、皆羽黑山に於てせるも、宗務に關するものは仙臺良覺院に於て取扱ひたり。物の怪生靈死靈方位吉凶等の事に恐怖せし時代に於て、護摩を焚き咒文を唱へ、禍を攘ひ疾病を治する等の加持祈禱を行ふ修驗者は、殊の外世の優遇を受け、また意外の勢力ありしが如し。其郡內に於ける創始は明かならざるも、要するに羽黑山修驗道の波及と稱するを得べし。而して維新の頃には此等の寺院三十七箇院あり。明治三年神祇事務局より「今後諸國大小神社に於て、神佛混淆之儀御廢止に相成候につき、別當社僧の輩は、還俗の上神主社人等の稱號に相

傳へ、神道を以て勸仕可致候、若又無據差支有之、且は佛敎信仰に而還俗之儀、不得止之輩は、神勤相止立退可申候事」。との布告發せられしにより、佛道を以て神に仕へしもの、就中修驗は復飾せざれば其社を立退かざるを以て、郡内修驗者の多數は、一樣に「乍恐奉願上候御事、　私儀何々派修驗にて江刺郡何村何々神社に神勤罷在候處今般御祭改に付、神佛混淆御廢止之趣被仰出候に付、此度復飾仕り何々と名改仕、神祇道を以て神勤仕り度候間、何卒御仁恤を以て、願之通り御許容被成下度奉願候以上」。と江刺縣に願出で、其八月許可となり、夫々神社に神道を以て奉仕せり。尚此時に於て復飾をなさざるものは、東漸院將軍寺（今の天台宗澤田山東漸寺同愛宕山將軍寺）の二ヶ院のみ、明治五年太政官布告「修驗宗の儀、自今廢止本山當山羽黑派共、從來の本寺所轄之儘天台眞言の兩本宗へ歸入被仰付候條、各地方官に於て此旨相心得、管内寺院へ可相達候事。」により二院も亦修驗宗を廢し、本宗なる天台に歸入せり。而して復飾せる神職は、間もなく敎部省の達に基き、登米縣にある中敎院より、敎導職を任せられ、各宗寺院の僧侶と共に、岩谷堂光明寺内に合議所を設け、神佛一致して敎化の任に當らんとせしも、幾何ならずして止みたり。其後神職に關する法令發布せられ、幾多の遷變を經て今日に至れり。

維新前後に於ける修驗寺院一覽

村名	流派	院名	開基年代
片岡村	羽黑派	龍寶院	天正十三年眞慶
同	大峰派	秋葉院	天正五年眞清
同	羽黑派	寶生院	元和四年梁山
田倉村	同	清水寺	
高寺村	同	不動院	
同	同	覺法院	
同	同	普明院	
倉澤村	同	大聖院	
增澤村	大峰派	和光院	万治三年忠丁
次丸村	羽黑派	玉泉院	
原體村	同	常學院	文和二年道達
大田代村	同	寶珠院	享保の頃慶傳
同	同	光明院	
黑石村	同	威覺院	
同	大峰派	智恩院	
下門岡村	羽黑派	大法院	
上門岡村	同	寶敎院	
伊手村	同	福泉院	
同	同	明泉院	
同	同	自性院	

横瀬村	同	將軍寺	
淺井村	同	智福院	
田茂山村	同	教光院	觀應年中泰正
同	同	覺善院	寶永五年覺善
羽黑堂村	同	滿性院	元龜三年廣開
石關村	同	法道院	
一關村	同	清覺院	
小田代村	同	慈眼坊	不詳
同	同	東漸寺	寛文八年慶眞
輕石村	同	大仙院	
人首村	同	了泉院	
口内村	同	藥王院	
野手崎村	同	多寶院	寛永三年照慶
同	同	淨法院	寛永二年竜乘
水押村	同	寶壽院	
角掛村	同	光善院	
土谷村	大峯派	常壽院	

延享三年二月調郡内羽黑派修驗氏名

羽黑派頭中頭

岩谷堂	龍寶院	岩谷堂明院	岩谷堂正樂院
同	教樂院	同覺明院	同普賢坊
田舍村	一明院	高寺村喜寶院	高寺村普明院
高寺村	覺法院	倉澤村大聖院	倉澤村泰壽院
二子町村	淨樂院	二子町村龍光院	二子町村護法院
同	教善坊	同慶長坊	同覺坊
增澤村	龍傳坊	增澤村龍泉坊	次丸村玉泉院
次丸村	善行院	原躰村常學院	横瀬村妙法院
横瀬村	長壽坊	淺井村大信坊	淺井村淨泉院
淺井村	善性坊	同寶性坊	同皆之坊
田茂山村	明學坊	田茂山村學善坊	羽黑堂村万性院
石關村	智觀坊	三關村善性坊	一關村光學坊
一關村	明覺院	一關村南泉坊	小田代村東漸院
小田代村	威德院	輕石村仙岳院	輕石村大寶院
輕石村	文珠院	同正善坊	鴨澤村俊翁坊
菅生村	喜見院	歌書村南泉坊	大田代村觀行院

大田代村　寶珠院　黑石村　威覺院　下門岡村　大法院
上門岡村　寶敎院　伊手村　自性院　伊手村　正善院
伊手村　明覺院　同　高覺院　同　三條院
同　善敎坊　同　修善坊　同　圓力坊
人首村　般若坊　人首村　千手院　人首村　圓滿院
同　福照院　同　正學院　同　寶性坊
同　大學坊　同　清學坊　同　長圓坊
口内村　藥王院　口内村　光學坊　野手崎村　淨法院
野手崎村　大乘院　野手崎村　多寶院　同　松本坊
同　藏本坊　同　禮泉坊　水押村　目學坊
水押村　藤本坊

修行山伏

倉澤村　光學坊　增澤村　大學坊　伊手村　定善坊
伊手村　淨覺坊　伊手村　圓覺坊　同　正學坊
黑石村　正善坊　人首村　寶千坊　大田代村　龍本坊
大田代村　龍覺坊　田茂山村　來源坊　岩谷堂　春力坊

四　耶蘇教

一切支丹宗

邪敎として國禁たりし切支丹宗の信者は、本郡内舊黑田助村に見えたり。同村舊肝煎家に保存せる書上書類の一節に、

一　助　惣

此者江刺郡黑田助村百姓に御座候處、承應三午年切支丹宗門之由、於仙臺訴人有之而、被遊御詮議候處、寛永十六卯年邪宗門轉右黑田助村、禪宗長松庵檀那に罷成、證據申上候に付、御敎免被成下由、延寶六午年正月十六日七十歳に而病死仕候。檀那寺右村長松庵に土葬致置申候。

おもふに本郡羽田村地方に切支丹の入りしは、其系統を膽澤郡より受けたるべし。膽澤郡には福原に、後藤壽庵といへる熱心なる信者ありて、此地方の布敎の中心をなせり。壽庵は葛西の遺臣にして、慶長中伊達政宗に仕へ、上膽澤十七ヶ村を領したり、時に元和二年葡萄牙の宣敎師ティゴカルバリヨ、奥州に來りて各地に布敎し、津輕に赴きては、此地に流謫されし、京阪地方の信者を訪ひて、其信念を固め秋田に赴きては奥向に近づき、秋田公の側室を信者にするに至りしも、遂に露はれて此地を逐はれ、步內(院內ならんか)に至りて鑛夫の間に布敎し、轉じて仙臺領に入れり。壽安之を福原の邸に迎へ、百方之を扶助し、ミワケ（見分なるべし）に於て降誕祭を行ひて、多くの信徒に洗禮を與へ、又十字架を樹てゝ之を禮拜する等、盛んに布敎に努めたり。初め政宗壽安の信者たるを知ると雖も、其名族にして勳多きを思ひ、敢て迫害を加へず。汝獨り之を信ぜよ他人に及ぼす勿れと、寛大の處置をとりてありしが

德川氏の禁令愈嚴なるに及び、政宗も亦領内信徒の掃蕩に努めざるべからざるに至れり、よりて壽安には其臣石母田大膳を遣はし改宗を勸めしむ。壽安きかず。政宗茂庭周防をして兵を率ゐて其邸を圍ましむ。壽安逃れて行く處を知らず。カルバリヨは先に他にありしも捕へられ、仙臺に於て慘刑に處せらる。其徒の共に刑せらるゝもの頗る多し。時に寛永元年なり。

此地方に於ける禁教は、かく嚴にして遂に其中心を失ひしも、尚竊かに之を奉ずるもの少からざりしが如く、元祿六年切支丹類族存命之改書、膽澤郡の分斷簡に見ゆるもの五ヶ村に亘り、本人として七人を書上げられたり。内六人は寛永四年乃至十六年（内元和九年のものあり）に、改宗の證據認められ、赦免されしも、一人は紛れなき切支丹信者として釣殺の刑に處せられたり。之を以て見るも、本郡舊黑田助村信者の如きも全く之と同一系統なる疑なかるべし。

此助惣の子孫一族は、切支丹類族として、古切支丹類族二季一季牒にあげられ、毎年六月十一月二季に切支丹役人の檢閲を受け、死亡出生緣組等一々其都度記して洩すことなく、類族狀況詳細に調査せられたり。此牒今に存せり。

此類族改めは、貞享四年切支丹改令によれるものなるべく、此令によれば其一節中に、

一　最前切支丹にて轉び申さゞる以前の子は、男女共本人同然の儀に候云々、一　前々切支丹宗門の者果候はゞ、死骸は盡詰に致し置き、切支丹奉行の差圖次第に仕るべく候事。

等の事あり。然るに此助惣の長男に長次郎といへるものあり、不轉以前の子なるを以て、本人同然に取扱はれ、死亡のときは盡詰にせられる等、一に其令の如くせられたり。其記錄を示せば

江刺郡黑田助百姓

轉切支丹
一　助　惣
右助惣嫡子
一　長　次　郎　不轉以前の子本人同然

此長次郎儀江刺郡黑田助村百姓に御座候

右長次郎儀、元祿四年正月二十一日五十四才にて病死仕候に付、拙者共御引添死骸御見屆被成候處、病死に無疑候に付、死骸盡詰に仕御印符を以被相渡候、慥に受取檀那寺江刺郡黑田助村曹洞宗長松庵墓所へ、御印符の儘埋置申候追而被仰付候節、右檀那寺を以、葬の作法相調證文寺證文無滯急度指上可申由、相心得奉存候　以上

江刺郡黑田助村百姓右長次郎婿　長　作
同　村百姓文藏名子右長次郎弟　助　作
同　村百姓長次郎親類　文　藏
五人組　次右衛門
同　喜左衛門
同　與兵衛

元祿四年二月九日

練生川戸右衛門殿　　組頭　五左衛門

肝煎　喜兵衛

江刺郡大肝煎　小松原三郎兵衛

同　菊池又右工門

尙此長次郎は、其筋の差圖にて滯りなく土葬となし、寺證文を添へて差出したる書類等も現に存せり。而して此二季一季牒は、安永六年迄檢閲せられ、其後は肝煎引渡となりたるもの丶如し。

二　基　督　教

郡内を通じ基督信者甚だ少し。今米里村二教會あり、岩谷堂に一教會あり、稍活動せり、今其大要を記せん

天主公教會

明治十年水澤の人菊地某佛國宣教師　アレキンドル●ベリオス　の洗禮を受け、信者となりしが、養子として人首に來る。其縁によりベ氏信者訪問として來り、布教せるとき數名洗禮を受けたり。其後漸次信者の數を增し、現在は男女四十余名に至れり。

ハリストス正教會

米里村の人菊池某、東磐井大原に到れるとき、其地の人佐伯ペートルに、正教の大意を聞きて、求道の心を起し、佐伯氏に乞ふに人首に布教せんとことを以てす。佐伯氏岩谷堂在住副傳教師山内ヤコウに、人首布教の事を奬む。同町佐藤タニコンも亦大に奬む、是により明治十二年十月山内氏人首に來り、一週日の間布教に勗む。本部よりは一關影田氏出張して之を援助す。其結果翌年四月數名洗禮を受けて入教す。其後漸次信者を增加し、二十三年には壯大なる教會堂を造營し、二十六年にはニコライ僧正東北巡回の途、此地に來る。三十四年頃に至り、益盛に演說會、婦人會、日曜學校、討論會等により、正教の道を明かにし、信仰心を培養する等、專ら傳道布教に勗めたり。現在信者百二十余名あり。

一、岩谷堂正教會　大正十二年一月創立　信徒百五十七名　管理者　小原善次郎

岩谷堂基督(ハリストス)正教會　和賀郡田瀨村の豪農菅谷政藏なる者あり嘗て上閉伊郡土澤に於て一日基督教の講演を聞き大に感ずる所ありしが明治十一年岩谷堂町に於て陶商を營む有志に勸誘して基督教の研究を勸む當時未だ切支丹の邪宗門として人々の忌む所なりしが決然として布教師を派遣せんことを東京ニコライ派に求む依りて同年傳導師藤岡保羅なる人來りて布教を試むること數月續て一ノ關の人水山高志なる者更はり派遣せられて大に布教を勉む聽者益々多く信仰を告白する者數人ありしが越へて十二年春朽木ペートルなる人來りて之れを助く同氏は談論風發熱烈の人なりしが同氏によりて大に發展する所あり間もなく東磐井大原の人山内長藏なる人來りて此れに更はる玆に於て先に信仰を告白せし數人と又新に信仰を告白する者等來り會し監督司祭影田氏を乞ふて入教の禮を行ふ時に同年十二月十七日なりき當時入教せし者に醫師佐藤養三菅谷後ちの縣會議員柏木久藏小原菅原等の數名なりしが越へて十三年四月新に十五名の入教者あり爾來幾多の傳導師を經て今日に至れり山内氏は又人首開教の祖となれり而して當時

尤も之に反對せしは寺院にして嘗て松原面なる傳導師は光明寺に於て吉岡某なる僧侶と公會討論會を開きたることありと云ふ

現今は當町達摩小路に會堂を有し百五十余名の信徒を有し小原善次郎なる人管理者として別に傳導師星山なる人ありて布教せれつゝあり

第九章　風俗習慣

一　民　情

住民は概して率直質素、古來敦朴の氣象を保有し、和衷協同隣保相扶の念篤くよく家業を勵み、勤勞の美風に富めり。別けて敬神信佛の念厚く、よく老を尊び長を敬し吉凶禍福には、互に眞情を吐露して喜愁を共にし、輕佻浮薄なる風なし。然れども一面の缺點としては進取の氣象に乏しく、舊慣を墨守して遷らざるの風あり。例せば時間の觀念に無頓着にして、今尚陰暦を使用するもの多きが如し。

近時物質的文明の思想と共に、一般に生活の向上を來し、青年の中には勞働を忌避し時好に奔り、古來の美風漸く薄らぎ行くの嫌なきにあらざるも文化の進歩と生活の壓迫とはよく郡民多數の思想を刺戟して益々其の勞働に勤勉なる、古來の美風を維持發達せしむ。朝飯前の仕事は、一日の仕事の三分の一に價するとなし、勞働に從事するものは未明より起きて業務に、就くが如きは其の一例なり。尚地方一般の慣習としては春の彼岸の中日より、秋の彼岸の中日まで毎日晝食後一時間の午睡をなし、又煙草時（又小晝時とも稱す）と稱して午前十時頃及午後四時頃に業務を休み、小食をなすを常とす。されど勞働せざる時は此の小食を缺く。

二　衣　食　住

衣服は一般地方と異る所なく、極めて質素なり。往時士分は、絹布を着用することを得たりしが、他の階級にありてはこれを許されざりしかば、冠婚葬祭の如き大禮に於ては、紬織（木綿縦に絹横）カピタン（絹縦に木綿横）等

を上衣とせり。禮服としては、士分の麻に、庶民は羽織袴を用ひ、手織の麻布を以て常服とせり。現今は概ね平服に綿服を用ひ、稀に絹布を用ふ。麻布は僅に夏期耕耘に從事する場合、股引、雪袴、もつぺ、肌着、冬季の上張服に用ひ農業に從事するものは男女ムジリ筒袖の半胴服を着、男は股引、女は雪袴、もつぺを着用す。冬は綿を入れたる法被の如きものを着、半胴服の綿入を着く。されば其の活動頗る便宜なり。

頭には農業者は手拭タオル等一般に用ひるも山間地方の女農耕者は風呂敷（二尺四方位のものを中より隅遠に折りて）樣の物を被る處あり。夏は日除けとして菅笠、編笠、麥稈帽子などを用ふ。雨具としては、往時簑用ひられしが、現今にては其の影を沒し、野良に通ふ場合は一般にケラを用ふるも外出の場合は傘を用ふ。

食物は其の生活狀態によりて異れども、多くは三穀（米麥粟）を混じて常食となす。維新前までは之に大根、菜葉、粟、稗等を混し山間地方にて粟のみを用ひたりしが現今にては殆んど絶え、米食者の數漸次增加し行くの傾向あり。

家屋の構造は、農家に於ては多く茅葺平屋造とし、堅牢を主とし、防塞消暑に適すべく造られたり。建築に單複あれども概して大きく、間口十間なるもの珍らしからず。尙別に厩、厠、納屋等を有し、又土藏其の他の建物を設く。本家には入口に內庭と稱する土間を有し、內庭の奥は臺所と云ふ。其の他中間、おかみ、納戸、おほで、こで等あり。臺所には四角形の爐ありて薪を焚く。その上の方は橫座にて主人の座とし、下の方は木尻と云ひて、奴婢の座とす。南の方は客の座にあて、北の方は婦妻の居る處となす。厩は多く家の側面、厠は厩の側面にあるを普通とす。屋根には破風棟、箱棟、屏合仕荷鞍を上げ、又芝生を載するものあり。商家は大概柾葺二階建にして、間取も亦農家と其の趣を異にし、漸次不燃性の物質を用ひて屋根を葺くに至れり。

燈火には昔はマツカとて樹脂多き松を細斷したるものを用ひ、菜種油を用ひたる行燈、デツチ等亦廣く用ひられたりしが、明治初年に至り石油輸入せられてよりカンテラ及ランプを使用し、近時に至りては殆んど電氣燈に變りつゝあり。また發火用として燧打石火打金を用ひたりしが、明治初年マツチ輸入せらるゝに及びそれを使用するに至りぬ。

三　祝祭

婚姻。　人生の大禮として盛大に行はる。媒酌人の斡旋によりて緣談成立すれば吉日を選びて手打酒を嫁の家に贈り、尙結納の印として祝儀の進物を贈る。愈々當日になれば、媒酌人・婿・兩親及び叔父・叔母若くは兄・姉・婿添・荷背負・長持擔等嫁の家に至り歡待を受け、見參の式を終へて歸れば、嫁の家よりも同樣の行列賑々しく乘込む。この時嫁は勝手口より直ちに納戸に入るの風あり。それより三々九度の取替し、饗宴了りて後座直りを行ふ、翌日里歸りするを普通とす。

葬式。　人死すれば寢床を換へて北枕となし、手を胸に組合せ、膝を屈し、六曲屏風を倒立し香を焚く。近親に通報するを知らせと云ひ、入棺に從事するを手附人と云ひて、一週間その家に起居するものとす。葬式は神式、佛式の二種普通午後三時頃にて、死者の卑族は佛式なれば額紙をつけ草鞋を穿き、婦人は白き被衣を被り緣の綱に連らなる。法要は普通五日目に行はれ、會葬者に馳走をなす。當夜講中集り神

式にては奏樂、佛式にては念佛をなし、又坐女を頼みて口寄せを聞くの風尚行はる。
神式にては精進といふことなけれども佛式にては精進明一週間目にして行はる。墓參は神式五日祭●十日祭●二十日祭●三十日祭●四十日祭●五十日祭●百日祭。佛式一七日●二七日●三七日●五七日●四十九日●百ケ日等なり。

祭日。　秋の候に多し。何れも身分相應の料理を調へ、親戚知己を招ぎて饗應をなすの習慣あり。互に相往來して交情を温め、餅或は赤飯等を贈るを例とす。

宮參。　近傍の神社の祭典當日及び正月元日には業を休みて參詣するは勿論遠方の神社にも參詣するは昔も今も異ることなし。伊勢參宮●最上參り●金華山參り●古峯ヶ原講●山神講●青麻講●岩手山參り早池峯參り等の類多く、或は同行を廣く部落全體に募りて行ふあり、或は講を設けて抽籤によりて順次に參拜するあり、何れも歸村後は順番に集會を催して旅行談に花を咲かせ一同愉快に飲食を共にするの例なり。

觀音參。　江刺三十三所札所巡拜は、老爺老媼の間に行はる。菅の小笠を被り手甲脚袢足袋をつけて札所に至れば聲高らかに節面白く詠歌を唱ふ。佛敎の崇拜と災厄の祈禱とに基く信仰より出でたるなるべし。

明治五年太陰暦を廢し太陽暦を用ふべきこと達せられ、同四十三年暦よりは陰暦記載を廢止せられしが、因襲の久しき一朝にして舊慣を改むること能はず、農家の多くは依然として陰暦を用ひ來れり。從つて本行事の如きも陰暦に據りて記載するの便に從へり。尚行事中には昔ながらのもの多けれども或は廢れたるものあり、各地行ふ所も繁簡同じからざれば、一般的のものを記することゝせり。

四　年中行事

正月　お正月は一にお手かけ二に銚子三に喜昆布はさまれて

元日　門の左右に門松を立て、黎明より起き出で若水を迎ふ。元朝參りとて鎭守をはじめ附近の神社に參詣す。此の朝鏡餅を歳神に供へ、年中の祝福を祈り、家内打ち揃ひ雜煮を食す。

二日　餅まはし　鏡餅を四角に切り、親類や知己の出入の家に持ち行き年始の禮をなす。朝トロロ汁を食し書初め、細工初めをなす、商家は店を開きて初賣をなし、諸人は初買をなす。この品の多少にかゝはらず御祝儀あり。夜初夢を見れば年中幸福なりと云ひ枕の下に富士●鷹●茄子等を描ける紙を敷きて眠る風ありしが今は廢れたり。

七日　七草　此の日未明に起き七草を打つ。「七草敲く七草敲く唐土の鶏と田舍の鶏と渡らぬ先に七草敲く七草敲く」と歌ひながら打つ。此の七草を粥に入れたる七草粥を食すれば若返ると云ふ。

十一日　農はだて　朝早く起き身を淨めながら迎ひと稱して餅を山神に供ふ。藁を以て厩肥に擬し、近傍の田に運びて豊年を祈り、以て農事着手の式となす。作男は主家に入り左縄を綯ひおくを例とす。福取餅を食す。

十五日　望　早朝年縄をひき餅を搗く。物眞似のことあり、即ち田には藁、粟、稈等を挿して田植とな

し、畑には栗楢等の木に尺餘の若木を吊して栗の實りたる形となす。屋内には瑞木に團子をつけたる繭子團子及び米餅粟餅を粟の木に月の數丈けつけたる稲穂粟穂を飾る。年縄の如き尻久米縄に細かく餅をつけたる稲架及び瑞木に餅を挿したる餅花を飾るものあり。楊柳若くは接骨木及笹にて屋根を葺き、豆稈に田作餅片をはさみて建物に供養をなす。**夕方**「あらくろすり」と稱する大豆の皮又は蕎稈を家の周圍にふりつゝ「あら來る飛んで來る錢も金も飛んで來る。馬子餅のとのかな、牛子餅のとのかな泉は湧くやら古酒の香がする」と節面白く歌ふ行事をなすことあり。此の夜は望の月見にて、終夜若き男女遊び廻る。昔は望切とて結實せざる果樹の下に二人行き、一人は斧を振り上げて「なるかならぬかならぬと切るぞ」と云へば、一人は「なりますなります」と云ひて飯糊をかくることあり。又子の無き人は、小豆粥を煮て草木の枝にて掻き廻し、嫁に向ひて「産すか産さぬか産さざら打つぞ」と臀部を叩けば嫁は、「産します産します」と云ふことをなしたり。然るに今は此の事全く廢れたり。此の夜カセドリとて門に立ちて餅を貰ふを戯とするの風ありしが今は之れも年々廢れつゝあり。

又深更、注連縄の紙を長き竹竿の先に結びつけ「陽方よ中のよい時は鳥もないぢや。ほういはい意地の惡い鳥をば、頭割つて鹽して、江の島に追つてやれ。江の島に席なけりや、遠島へ追ひやれ追ひやれ」と田畑の上を振り歩く之を鳥追ひと稱す。

十六日　地獄の釜の蓋も開くと云ふ。諸所の寺院に參詣するもの多し。雇人は籔入にて休む。各家にては秘藏の珍寶を開帳して酒饌を供へて禮拜す。

十八日　**お十八夜**　餅を月にあげて禮す。神々にさざげし餅はおろして家内揃うて食す。昔は男子の食する餅と女子の食する餅とを別ち、焼き場所鍋等に至るまで異にしたるも、近年は唯他家の者には神にさざげし餅を食せしめぬだけになれり。

二十日　**粟こなし**　望に飾りし繭玉粟穂をおろして食す。

二　月　**二月は天に天旗空見るときは、春の景色で面白や**

一　日　**歳首**　此の日より三日までは、二月の正月とて休業し、一月元日と略々同樣のことをなす。男は四十二、六十二、八十八、女は三十三、六十二に當る家にては厄年祝ひをなす。

八　日　團子を拵へ、桃の枝に挿して門口に立つ。尚杉葉、節をかけて惡病豫防とす。

十五日　釋迦涅槃の日にて寺參りをなす。

三　月　**三月はお雛飾りの供へもの、餅や白酒梅の花**

三　日　お雛樣を飾り蓬餅を供へ、桃の花を活け、白酒を供へて祝ふ。女子の祝日にて、婿嫁などは實家に餅廻しに行く。

女子のマリつき歌に曰く「三月はお雛飾りでアサヅキ生酢、お内裏樣に桃の酒」

四　月　**四月は四月八日はお釋迦の誕生お釋迦まゐりに孫つれて**

八　日　釋迦の誕生日にて佛參をなす。

八十八夜　立春の日より八十八夜目の日にて、草餅を搗きて神に供へ中風の病を拂ふと云ふ。

蠶の掃立　八十八夜より二週間目頃蠶の掃立をなす。掃立團子とて團子を作り蠶神に供ふ。これより舟起（四齡迄）筵起（五齡迄）等にも夫々團子を作りて蠶神に供へ、豐作を祈る。養蠶終れば棚卸しと云

ひて、手傳を受けたる人々を招ぎて祝ひをなす。

五　月　五月は菖蒲さし上げ軒端の下で、子供よりより花戰

五　日　端午の節句にして、鯉幟をたて粽を食す。菖蒲及蓬を、軒端に挿し、以て惡氣を拂ふとなす。菖蒲湯を立て、菖蒲にて皿結びを拵へて鉢卷をなす。

田　植　此の月は田植にて、農家繁忙の時季なり。田植には汚れを忌み、身と心を清めて田の神を祭る赤飯白飯を炊き、握飯として朴の葉に載せ、田の神に供へ、又早乙女(田植する人)達に食はしむ。又近所に赤飯を配るなど中々賑かなり。

早苗振り(サナブリ)　田植後適當の日に休業し、近隣者相寄りて祝事をなす。昔は此の日に伯樂を賴み馬の足に針を打ちて、惡血取をなしたるも、今は大抵廢れたり。

六　月　六月は女唯子奈良晒、清水參りに着せ初め

一　日　むけの朔日と稱し、桑樹の下に行くを忌む。齒固めの干餅を食し、これを鬼の首破しといふ。又のみの船(草大黄の實)を蒔きて、蚤を乘せて流すといふ。

九　日　蟲祭り　田植後一番除草後虫祭又は虫追と稱して、太鼓を打ちて虫送りをなしたりしが、近年廢れたり。されど供物は今尙なす處あり。

十五日　お天皇樣參りと稱し、十四日夜より所々の八阪神社に參詣するもの多し。休業するを例とす。又藁にて馬を作りシドキを負はしめ桃の枝にて弓矢を作りて神に供ふ。葛の葉にて包める燒餅をつくる。

末　日　神送り　疫病の神を送ると云ひて男女に象りたる藁人形を作り前の虫送りの如きことをなせしも今は廢れたり。

七　月　七月は七夜盆棚お前の線香、切籠提灯かけ行燈

七　日　七夕　前夜より青竹に和歌など書きたる五色紙を結び、軒毎に立てゝ祝ひ、七日朝未明川に流す。現今は七夕を立つる家少くなれり。此の日は七回食をなし、七回水泳をなすとのことあり。朝硯を洗ひ墓掃除をなし、井戸浚、燈籠柱を立つ。

十三日　盆　午後盆棚を作り、眞菰を以て編みたる菰を敷きて、祖先以來の位牌を移し、兩桂間は桔梗女郎花●昆布或は果物●菓子等を以て飾り膳を供へ、香を燒き、夜は燈を點ず。墓參は一定せざれども概ね此の日に行はれ家内揃ふて墓所に至り、簀の上に蓮の葉を敷き、赤飯、寒天、大豆もやし、米、茄子等の煮付を供へ、茶花等を捧げて拜す。盆は十六日迄にて業を休みて靈を祭り、墓前及び門口に迎火を焚く。親戚は互に往來して佛參をなし、初盆の家には數あかしとて數多の燈籠を立つることあり。

二十日　二十盆　業を休みて墓參をなし墓火を焚く。

末　日　送り盆　盆の終りにて休業。此の日までは高燈籠を點ずる處あり。

二百十日　暴風雨襲來の虞ある日なれば餅を搗きて風の神に供へ平穩無事ならんことを祈る。

八　月　八月は芋や豆やのお明月樣へ、小袖かしませうか色小袖

一　日　八朔　八月朔日の稱にして農家にては餅を搗きて作神に供へ休業す。

十五日　お明月　枝豆●初栗●芋●餅又は團子を作りて供へ、名月を拜す。八幡宮の祭日なれば諸所の八幡神社賑ふ。

九　月　**九月は稲を刈り初め刈り納め、によに積んだる面白や**

九　日　**重陽の節句**　栗飯を炊ぎ菊酒を祝ふ。此の日を初九日とも云ひ、十九日を中九日、二十日を後九日とも云ひて共に稲荷神社に詣ずる向あり。

三十日　**お刈上げ**　稲一把を臼の上に乘せ餅を添へて田の神に供ふ。

十　月　**十月は神も佛も一夜でござる、あとの留守居は福の神**

一　日　**荷縄はづしの朔日**　鏡餅を神前に供ふ。

十　日　**大根の歳取**　大根を抜きとることを禁ずる家あり。

二十日　**惠比須講**　餅を搗き生きたる鮒と共に、惠比壽樣に供ふ。

十一月　**十一月は小雪サラ〳〵降る時は、猫の足痕小落雁**

お七夜　淨土眞宗の信仰者は二十二日より二十八日までお七夜と稱して佛參をなす。

二十四日　**お太師樣**　小豆團子をあげてお太師樣(聖德太子なりといふ)を拜す。この團子の中に福を入れて、食ひ當てたるものに果報授かると云ひ、今に行ふ家多し。

十二月　**十二月はお帳お札を皆消して、又今度貸しやしやれ、お正月は、送り正月年重ね、重ね重ねの五本松、あれに廻したこれに廻した、五本松はあるものか、江戸々々江戸の人、唐の人、年始のお禮に銚子持つて來い、一や二三や四五つや六七八九十とせ十輪棒、花咲き花折りまつえもたかもりすけさんからとうさいな、おさんさぶろく、丁度お前さ一丁貸した、ろしろのさん、お侍**

衆が、お籠でお急ぎ、外樣どん、あひづがどん、しなつかどん、どんどせどんどとせい。

一　日　**水こぼしの朔日**

五　日　**馬の年越。**

八　日　**團子。**

十　日　**大黑樣の嫁取。**(編)**年の數だけ大豆をつかむ。**

十二日　**山神樣の年越。**

十三日　**お節春。**

十四日　**八阪樣の年越。**

十五日　**惠比壽樣、天照皇太神樣、八幡樣の年越。**

十七日　**觀音樣の年越。**

十九日　**三峰樣、蒼前樣、白山樣の年越。**

二十日　**お田神年越。**

二十五日　**天神樣、文珠樣の年越。**

二十七日　**清水樣の年越、煤拂。**

二十八日　**荒神樣の年越、餅搗き。**

末　日　**年越、門松を立て注連縄を張る。**三献肴を供へて祝福す。内には歳神の棚を飾り膳部を供へて一年中のお禮參りをなす。

五　歌　舞

神　樂

神樂は、雅樂の一種にして、神祇を祭る歌舞なり。俗にオカグラと云ひて昔より一般に尊重せらる。神樂を奏するには庭上に舞臺を設け、三面に幕をめぐらし、庭燈を焚き、黄昏に至りて始むるを例とす。其の舞の數十二あり。一、庭靜舞●二、翁舞●三、三番叟●四、龍田姫●五、山神舞●六、岩屋戸開●七、五穀の舞●八、大蛇退治●九、宇那加氣理●十、惡神退治●十一、尊揃●十二、天降舞以上の外狂言として巨旦退治●松迎舞●鹽汲●蕨折●小野篁●曾我●鞍馬天狗●八島●木曾●橋引●笹別●不將●龍宮渡●小子々●獅子舞等之なり。

獅　子　踊

獅子踊は、祭事若くは盂蘭盆等祖先の供養を意味して行はれ、盆踊中の主なるものなり。頭に二本の鹿角を振り立てたる獅子面に采(ザエ)をつけて被り、背には五穀豐饒の文字を染め抜き、兩側には、丈にも餘る破竹に紙片を付したるものを背ひ、太鼓を帶び、一組十人、大獅子、小獅子圓陣をつくりて舞ふ頗る勇壯なるものなり、踊は殆んど跳躍よりなり、壯重なる歌と、大きく響く太鼓の音と共に、實に勇大なる氣分を起さしむるものなり。

劍　舞

獅子踊と同樣盂蘭盆に行はる。大同三年羽黑入山中の權大僧都法印忠度、一千日の行中不思議なる老僧より得たるものなりと傳ふ。頭には長き羽毛を以て飾りたる冠物を戴き猛き形相を具へたる黑塗の鬼面を被り、腰には笹龍膽の大紋を染め抜きたる袴をつけ、太刀をはき扇を持ちて踊る。笛太鼓の拍子につれて、右往左往に飛躍する樣實に勇壯なり。

田　植　踊

農家正月の娯樂として行はる。美しき模樣の衣服を裝ひたる早乙女と、鉢卷姿の彌十郎と加はりて、錢太鼓扇等を持ち、笛、太鼓、三味線の拍子に合せて踊る優美なるものなり。その口上の一節に曰く、

「一もひろき、二も最負、三で盃戴いて、四つ世の中よいやうに、五つ泉の湧く樣に、六つ向ふの兩側も、七つ何事ない樣に、八つ彌十郎も早乙女も、九つ此處での御田植、十でとつくり見申せば、上々の上の字組と御最負あつての御評判、これ賴みあげます音頭達よい〳〵」。

大　神　樂

一種の獅子舞にして、獅子面を被りたるもの笛、太鼓、三味線に合して舞踊をなし、才藏その後に從ひて滑稽を交ふるものなり。

その歌に曰く、　松の舞

「是れのお庭先の松の木を見てやれば、大松小松千本小松の其の中に・小金の松は一本だ、松の舞かなはやしたり。一つの枝もしほらしや、二の枝もしほらしや、三の枝の枝中に小金はざつくとなつたりな、松の舞ともはやしたり」。

六歌謠

飴賣歌

飴箱を荷ひ打鉦をたゝきて調子を合せながら歌ふ行商人の歌なり
明治十七年頃にて跡を絶ちしもの、如し

とのさん土産に晒三尺貰ろた、何に染めよと染師に聞けば、一に橘二に燕子花、三に下り藤四に獅子牡丹、五つい山の千本櫻六つ紫七つ南天八つ山吹よ、九つ紅梅ちらしに染めて十でとのさん好きな樣に望みなさへヤンレイ。

伊勢に七度熊野に三たび、出羽の三山にヤンレイただ一度、ヤレヤレヤートコセイヨンヨナアリヤコレワイ、サートコナンデモエー、柳もワッチのノッペラボンのスッペラボンの坊主になつたいわれ因緣聞いてくんねエ、而も十四の其の春始め、一軒隣の其の又隣、裏の神さん向ふのおばさん、推茸さんに香茸さんに、干瓢さんに、觸り次第に枕でヤレ〳〵、畜生めそふだにやらかせ、やつた揚句にヤ女郎と出掛け、船ぢや危ないお駕籠で來なさい、減多に出まかせ口まかせ源八おしうの雲暗、勇みに勇んで走り行く。

大黑舞

大黑面を被り扇を以て舞ふ祝ひの舞なり今正月に此舞を舞ふて物を貰ひ歩くものあり
酒席の餘興に見ることあり

トザイ東西扇の要と申すは御藏のすみにはさも似たり開く樣こそあッたりな、開いて見れば上の地紙の目出度さは、天笠十二帝を表すなり、中の格子の目出度さは、唐七帝を表すなり、下の要の目出度さは寄せてせめたる日本國、なに舞も、蚊に舞も、追取まいてとりまいて此處で一覺えた大黑舞を舞ふッてやろ、大黑〳〵〳〵よ、おん大黑といふ人は此國の人でもない、唐大唐の人でもない、天笠の天笠の、摩迦多國の傍の、須彌山の人なれば、人間を助けるとて、天根川根につき給ふ、天根川根にしけば、おりや、のぼりや、折吹く風に、召したる笠をばバットとられ、それでお色が眞黑だ、大黑〳〵〳〵よ、一に大黑、二にほうでん、三にきんめい、四つで世の中によい樣に、五つで出雲のわが惠比壽、六つでむどちな福錄壽、七つでなにかに聞く人は、八つで屋敷は毘沙門天、毘沙門天といふ神は武神にましませば、惡魔を拂ふ玉劍、福を招くは五珠の玉、九つ此方の御祝に、何がさへ蚊にがさへ、代々處の小田原に、かやに勝栗かつご、奥の深山のゆづり葉を七五三とかざりて祝ふた、大黑舞と囃さうな、大黑〳〵〳〵よ、おん大黑の持つ物、延命小袋に打出の小槌、宵の槌も千貫よ、夜中の槌も千貫よ、三千貫の寶を誰樣に讓るべ、先づ見はへて、見付た見付た、此方の旦那樣に、まんまと讓つた、大黑舞と囃さうな、大黑〳〵〳〵よ、大黑舞と申するは、長々舞のことなれば、此處はしやんと切り處、千秋萬歲千秋萬歲扇の如くに末廣く、柳の如くにごよ長く、團扇の如くにまん丸に、御代は日出度、なんと方方囃されても大黑舞はこればかり。

田植歌

一本植ゑれば千本になる、秋はよびまし田の神に。
一本植ゑれば千本になる、街道の側の田で五升。
仙臺の宮城野原の萩の花、咲き揃ひ錦にまさる萩の花。
辛抱たがため親へのつとめ、末に我が身の爲となる。

かはい相だよ何時來て見ても、襷なげ置く暇もない。
歌を歌はばきり〳〵しやんと、此所は場所だよ人の切り。

田草取歌

待てよ焦れて飛立つ螢、胸を燃やして戀の暗。
水掛論でもしなけりや胸に、燃ゆる思ひがけしかぬる。
田舍野郎だと言はないでくれろ、場所の花だて二度咲かぬ。
雨の降る夜に娘をもてば、風の吹くよな聟がくる。
人は涼しい夕川岸に、なぜか螢は身をこがす。

餅搗歌

戀しくば尋ねてござれ山の目さ、山の目のヤーヨーイ、蘭梅の杉を見あてによー、二本は杉ヤーヨーイ三本櫻、四本柳、五本目のヤーヨー、鎌倉蝦と下り藤。
氣仙坂七坂、八坂、九坂、十坂目にヤーヨー鉋をかけて平らめた、それは嘘、御普請かけて平ひらめた。それも嘘ヤーヨー今尙坂は坂である。
山の目の彌吉がおかたこなべやき、粟に米小豆を入れて七小鍋。

麥搗歌

十七は今朝立ち船に手をかけて、船はやるや船頭はやらぬ止めて呉れ。
南部樣弓矢に負けて牛に乘る、牛も牛鼻缺牛にお乘りやる。
松島の瑞岩寺の寺もない、前は海後は茂つた小松山。
松の葉が色こそ變る落葉こそ、落ちたとて御前の世話になりやせまい。

木挽歌

大工樣より木挽樣、惡い心のある木を引き放す。
相模よこ山照手の姫よ、夫がためとて車引。
鼠と木挽は引かねばならぬ、ひいて積るは引屑ばかり。

地固の歌

こゝは大事の角柱、ミツチと賴むぞ皆樣よ。
われとお前はいろはにほへと、今にちりぬるお別れだ。
やまけふこえてけふくるからにや、あさき心で居るものか。

長持舁歌

蝶よ花よと育てた娘、あすは他人の手に渡す。
一人娘をくれるぞ聟よ、打つなたゝくな抱いて寢ろ。
目出た目出たの若樣よ、枝も榮ゆる葉も繁る。

甚句節

甚句おどらばしなよくおどれ、しながよければ嫁にとる。
おどりや出て來る座敷がせまい、せまい座敷もアリヤ廣くなる。

おどりおどる奴馬鹿な奴踊る、疊きらしの裾きらし。

相撲甚句

揃た揃たよ皆様揃た、秋の出穂より皆よく揃た。
場所だ場所だよ山内場所だ、上は妙見下藥師。
ほれたほの字はどう書きあしやんす、まよたまの字に扁がない。

都々逸

上を望めば限りはあらぬ、下を見てさく百合の花。
歌は聲より文句が大事、人は見目より心ばへ。
梅と櫻を兩手に持てば、どれが梅やら櫻やら。

さんさ時雨

さんさ時雨が萱野の雨か、音もせで來て濡かゝる。
雉子のめんどり小松の蔭で、妻を喚ぶ聲千代ちよと。
これの座敷は目出度い座敷、中に鶴龜舞ひ遊ぶ。
お前百までわし九十九まで、共に白髪の生えるまで。

子守歌

一、ネンネコネンコネンネコヤネンネがお母さん何處に行つた、あの山越へて里へ行つた、里のおみやに何貰ろた、ビービーカラカラ風車、デンデン太鼓に笛つづみ、東錦繪京のお雛。

一、坊やはネンネココンボコねつて起きたら乳三盃、乳三盃で足れざらば芋だり豆だりもつてきやう煮るとも燒くともしてかせべ。

一、向ひの山で萱刈るは、新五郎どんか五郎どんか、一時ござつてお茶あがれ、お茶のこには何々、天下一の小箱、中あけて見たれば、赤い鳥十二、白い鳥も十二、十二の中に葦毛馬つこ一匹、あつちやむいてもちよつちよこちよ、こつちやむいてもちよつちよこちよ、ちよつちよこ鳥に囃されて、たいこたいこめんだいこ、百に米一石、十文酒十提子十ひさげ。

一、おらあたりのづさの木さ、美し鳥がとまつた、なにして首たこまがつた、腹こへつてまがつた、腹こへつたら下さおりてものこけいや、足こべつべくなつからやんた、足こべつべくなつたら川さ行つてかき洗へ、ひびこきれるからやんた、ひびこきれたら藕(モツナ)かんでくつつくれや、蠅こたかるからやんだ、蠅こたかつたら團扇もつてあふげや、寒いからやんだ、寒いこつたら酒屋の炬燵につゝぱいれつゝぱいれ。

一、花折りさあいぼされや、何花折りさ、櫻花折りさ、一枝折つてぶつかつぎ、二枝折つてぶつかつぎ三枝目に日暮れて、そばの家さ寄つたれば、臼のやうな盃で、杵のやうな女郎出、一盃あがれや竹の子、二盃あがれや墓きの子、三盃めに魚なくてまいらんか、おらあたりの魚は、高い山の竹の子低い山の墓きの子、ひつこまいつこはまぐりまいつこ庭のおんどり小雀、

手鞠歌

れんげちよ〳〵、　衣裳きるれんげちよ、

れんげちよ〳〵、　前合せ　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　帶する　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　前掛け　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　顏洗ふ　れんけちよ、
れんげちよ〳〵、　化粧する　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　桃色　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　紅さし　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　髮かき　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　兩差　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　おすはり　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　お禮する　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　唯今　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　歸るの　れんげちよ、
れんげちよ〳〵、　お早く　れんげちよ、

丁度お前に一丁貸した。
受取つた受取つた、〇誰方（ドナタ）樣から受取つた、アレ〳〵向ふ白壁竹の林の格子造りの誰さんから受取つた、シツカリお渡し申すぞ。

七　俚諺

俗間に傳はる禁厭的事柄、嫌忌的事柄、豫言めく事柄は、今日に至りては其の大部分迷信として顧みられず。僅かに老婆小兒の間に多少の不安を懷かしむる種となるに過ぎざるも、多くは經驗より歸納したる結論の如きもの、或は隱喩中に敎訓を含めるもの、或は佛說骨相等の所說を巧に具體化したるものにして中には日本上古の色彩を其の儘に窺はしむるが如き感を懷かしむるものもあり。因て其の據る所を尋ね求むる處を翫味するときは、興味の津々たるもの少からず、今左に其の一般的のものを記せん

鶏が高處に上り長鳴すれば、好天氣となる。
小鳥が噪しければ荒となる。
地震の前に雉子が鳴く。
朝荒は晴れる前兆。
寒九の雨は豐年の兆。
竹に花咲けば凶年となる。
雷鳴の時裸になると臍をとられる。
人を吹くな吹き負けた方は死ぬ。
足袋を履いたまゝ寢るな親の死目に遇はぬ。
日暮に髮を梳くな親に別れる。
子供の着物は夜外に置くな置くと夜泣する。
貴きものを踏むな足が曲る。
北枕するな。
口ある道具を北向にするな。

鳥が水浴すれば雨が降る。
蔦が高く舞へば風が吹く。
朝虹がすると時雨がくる。
大雪は豐年の兆。
硯を洗へば雨が降る。
雨降花をとれば雨が降る。
雨蛙を殺せば雨が降る。
人を吹くと死んだとき風が吹く。
口笛を吹くな貧乏になる。
夜爪をきるな夜詰することがある。
葬式の時は倒れぬ樣にせよ、倒れると三年經たぬ中に自分も死ぬ
書いたもので尻を拭くな尻が曲る。
北向に衣服をかけるな。
卵殼を跨ぐな消渴を病む。

食後直ちに寢るな牛になる。
南蠻を食へば頭が禿げる。
口のついたもので物を食ふな。
禮がけで食事するな忙しき家に嫁に行く。
焦飯を食ふと聾になる時犬に吠へられる。
茶碗の湯をかき廻して呑むな船で怪我する。
火をおこすに二人で吹くな、若し吹くときは臼杵と云つて吹け。
箸と箸ではさみ合ふな。
飲みさしの酒を呑むな喧嘩する。
餅をきる時は搗き手は先づ切そめたせよ。
佛に酒をあげるな狂人が出る。
庚申の夜孕んだ子は盜人になる。
双子を育てれば双子を生む。
井戸に行つた者を呼ぶな。
臍垢をとるな腹が痛む。
三切一切の香の物をつけるな。
生栗一つに屁八十。
炙子についたものを食へば耻をかく。
繩を焚くな焚くときはほゞして藁にして焚け。
柿の種を割るなお姫樣の手がある。
足の下をくすぐるな癇癪になる。
葱を燒くな。
佛の日に洗濯すると死亂がたかる。
甘いものを一人で食へば角が生える。
お茶を飲めば色黑くなる。
禮がけで厠に入るな忙しき家に嫁に行く。
小豆飯に汁をかけて食ふな嫁入の時雨降る。
朝に飯に汁をかけて食ふな船から落ちる。
女は砥石を跨ぐな砥石が割れる。
箸の不揃なのを持つな跛の妻を持つ。
燈をつけ合ふな。
餅を二人で切るな。（搗きたての餅を手にて切る時なり）
爪を火に入れるな狂人が出る。
厠に唾するな日熱を病む。
茶袋で鼻をかむな鼻茸がでる。
寢言に應答するな。
帶を枕にするな長き夢を見る。
耳垢は唾して棄てよ蟻に食はれると聾になる。
二子栗を一人で食へば二子を産む。
七夕に雨降れば栗に蟲がつく。
五月蚊帳を釣るな雁の聲を聞くと惡い。
筆の軸を切るな天神樣の指を切るに同じ。
柿の種を燒くなはれられると癇病になる。
死人の側に猫をやるなお化が出る。
二日糊はつかふものでない。
未婚の人には惠比須大黑に　供へしものを食はするな、緣が遠くなる。

嫁三人持てば家の灰もなくなる。
人が出るとすぐ箒をとるな。
人に手振水を掛ければ早く死ぬ。
川に小便をすれば蛇にかまれる。
鳥の羽や卵殼を火にくべると罰當る。
火を弄ぶな寢小便する。
笊をかぶるな小さくなる。
夜は鍵に物をかけて置くな。
梁の下に主人の座を設くるな。
裸で厠に行くと坊主に遇ふ。
女に負けるな負けると亂がたかる。
書昔話をすれば鼠が笑ふ。
臭れたものを取返せば生爪が拔ける。
蛇に指さしすれば指が腐れる。
便所に唾すれば虫齒になる。
烏がカコローと啼けば來客がある。
夜烏が鳴くと變事がある。
小鳥の影がさせば客來る。
焚火が吹くと（人間が吹く意にあらず）金錢來る
線香が途中で消えると變り事が起る。
耳朶があつい時は惡む人がある。
禍ある時は味噌が變る。
猫が顏を洗へば客來る。
一へら千兩二へら二千兩。
人を暮にて打てば狼に食はれる。
書き物を踏めば字を覺えられぬ。
鳥の啼眞似をすれば目邊に瘡が出る。
塗物に顏を寫すな顏にかすばげが出る。
湖滓を食ふな耻をかく。
小供を洗ひし水は日の當らぬ處に棄てよ。
流行病のあるときははやり餅を搗け、搗かぬと病氣がはいる。
うつ木にて人を打てば死ぬ、杵にてまれば生さる。
木割臺に腰を掛けるな耻の屁をひる。
草靴の毛燒をすれば燒鳥を持つ。
ものさしで丈を測れば脊が伸びない。
冢の中で笠をかぶれば叔父が貧乏になる。
蛇を殺して止めを刺さゝなければ祟がある。
接木をするに木を違へれば狂人が出る。
烏が騷々しく啼けば凶事がある。
鳥鳴き惡いと人が死ぬ。
朝女が來れば來客が多い。
雷のなる時ころべば起きられない。
耳の中が痒いと年寄る。
味噌が酸くなれば身代が上る。
釜鳴すれば變事が起る。
慧星が出れば戰がある。

初午の早き年は火事多し。
葬禮に遇へば儲かる。
夜蜘蛛入り來るのは盜賊にはいふるゝ前兆。
蜘蛛天井より下るは來客の兆。
鼠の急に居なくなるのは火事の兆。
うどんげの花が咲けば吉事あり。
供物をお使が受けざれば禍がある。
初物を食へば七十五日生きのびる。
雷鳴の時桑を吊せば落雷せぬ。
焚火のピンとなりし時は何なりとたきたせ。
墓に供へしものを食へば中風にかゝらぬ。
厠に行きし時倒れしならば戻つて復行け。
死人の齒は棺に入れよ。
蒜を携ふれば痢が傳染せぬ。
卷目の二つあるものは意地强し。
一年に二度出棺したら槌棒をなげろ。
湯釜を煮たゝして火をたけば隣が福しくなる。
同年の友が死んだら千餅で耳を塞げ。
叔父かぶと藤株とはねぢれる程よい。
ない子に泣かないが有る子になく。
頭の大なるものは智慧がある。
耳の大なるは福あり。
目尻の上りし人は心猛し。
酉の年は火事多し。
みか月の直立するときは米價が上る。
朝の蜘蛛は御馳走になる兆。
鶏宵鳴きすれば其の家に災あり。
雌鶏の時を作るは禍の兆。
犬が遠吠すれば人が死ぬ。
內雀がは入るのは吉事あり。
家を出る時茶を飲めば災難にかゝらぬ。
乳を河に荒くなげすてれば乳が止る。
地震の時は萬歲樂ととなへよ。
新下駄を厠に履初めすれば齒が缺けぬ。
齒の缺けし時は上の齒なれば床下に、下の齒なれば屋根の上に棄てよ。
頭の卷目が歪んだものは心も歪んでゐる。
眼の上の黑子は出世の相。
寢る時は鍵を休めろ。
尻の長い客には簪を倒に立てろ。
伯父と明神樣とは粗末にならぬ。
餅なますと叔母樣は後まで殘る。
眼の下の黑子は不幸の相。
出額の人は福あり。
色白は七難かくす。
前齒に隙があれば早く親に別れる。
足の中指の長きは出世する。
若白髮の人は出世する。
反齒は餅を好く。
縮毛の人は心が猛しい。
足の大きいのは盜賊の相。
夢は逆を見る。
遠くの親類より近くの他人。
龜の甲より年の功。
夏の餅は犬も食はぬ。
嘘も方便。
出物腫物ところ嫌はず。
老人に惡口すると猿になる。
から臼搗くと馬が怪我する。
舅姑の門と麥畑は踏む程よい。
親の敎訓と冷酒は後にきく。
手紋の卷きし人は器用なり。
乳兒の股のくびり目が二つあれば次の子は女。一つあれば男の子なり。
眼尻の下つた人は多淫だ。
よき夢を見しときは三日三曉人に言ふな。
白痴につける藥なし。
地震雷火事親父。
つんぼの早耳。
習ふより馴れろ。
なまけものゝ節句働き。
やろと鋏は使ひやうできれる。
うそを云ふと地獄で舌をぬかれる。
虱と借金かくせばふえる。
醫者と南瓜は古い程よい。

八　方言訛語

□イ　之　部

いぢくる（弄ぶ）
いぢる（虐待する）
いびる（虐待する）
いつぱい（二合五勺）
いけどしやう（年に似合はぬふるまひ）
いんにや（否）
いけすかない（厭らしい）
いぢくされ（意地の惡いこと）

□ロ　之　部

ろぐでなし（いたづら者）
ろぐなこと（よいこと）
ろばた（爐の邊）

□ハ　之　部

はどす（外すの訛）

はなえる(始む)
はづまない(不自由しない)
はづな(手綱)
ばつち(末子)
はつたぎ(いなご)
はかだち(仕事に着手すること)
はたる(催促する)
はだける(開く)
はだこ(肌着)
はしり(流し場)
はしやく(乾く)
はせご(桜子)
はき(箒)
ばち(蜂)
はど(鳩)
はつと(引麥)
はつかけ(歯鉄)
はつけ(冷たい)
はつちやげる(押上る)
はぐらく(獣脂)
はらびり(下痢)
はんけあい(二合五勺の半分)

□ニ　之　部

にし(圭)
にげ(憎い)
にぎりこ(握飯)
にげあ(二階)
にんめあ(二枚)

□ホ　之　部

ぼつこす(うちこはす)
ぼんだす(追出す)
ほうだいなし(無分別)
ほろく(捨ること)
ぼげあ(まるめろ)
ぼんが(爲)
ぼつと(突然)
ぼんこ(蓑)
ぼうぎり(棒)
ぼれた(もうろくする)
ぼんなぐる(追拂ふ)
ぼたもち、おはぎ餅)
ほいと(乞食)
ほゝたぶ(頬)
ほら(嘘)
ほどる(暖になる)
ほきる(生へる)
ほうたろ(盤)
ほそつけい(細い)
ほどあく(赤熱しつゝある灰)
ぼう(腦窒扶斯)
ぼうず(女の兒)

□ヘ　之　部

へらざく(饒舌)
へがす(剝ぐ)
へす(入るゝ)
へと(吐瀉)
へあかき(灰ならし)
べろ(舌)
べこ(牛)
べつちよ(泣かんとするときの顔)
べろり(全部)
べつくすむ(怒れる顔)
べつたり(一面)

□ト　之　部

とろつべつ(何時もく)
とんな(不思議な)
とゞろなえ(亂雜)
とと(父)
とと(蠶)
とばけ(ぼんやり)
とねこ(當年の馬)
とせ(通して下さい)
とんちな(不思議な)
どうてん(仰天)
どさくさ(混雜)
どうす(癩病)
どいつ(誰、何)
どんべ(愚者)
どつさり(澤山)
どきまき(周章狼狽)
どつちやにも(何れにしても)
どうれで(道理で)
どのろ(休む)

□チ　之　部

ちやつけ(小さい)
ちやつぶ(帽子)
ちやらつとすると(ともすると)
ちやらちやら(早く)
ちよす(弄ぶ)
ちよどしてろ(靜かにしなさい)
ちよづばつ(手洗ひ鉢)
ちようま(蝶々)
ぢようやき(恐らくは)
ちくと(僅少)
ちきり(秤)

□リ　之　部

りづか(いやまし)
りきむ(威張)
りきとした(丈夫な)

□ル　之　部

るせ(留守居)

□ワ　之　部

わらし(小兒)
わり(わるい)
わだり(綿入)
わつさあ(わるさの訛)
わつぼろ(上衣)
わつばか(割當の仕事)

□カ　之　部

かつこ(あやめ)
がつこ(學校)
からこ(人形)
かすくされ(おしやれ)
かんじよ(便所)
かぶれ(皺)
からこび(拳骨)
からけばち(擂鉢)
からがく(纏ふ)
がんちやう(老馬)
かたこび(端の方)
かてあびた(一方)
がんた(頭首)
がをる(弱る)
かたこと(顛る)
かまこ(饑瓶)
かなへび(さかげ)
がす(ございます)
がき(小兒)
がか(自分の妻)
がせん(ありません)

□ヨ　之　部

よつびて(終夜)
よつたくれ(醉拂ひ)
よめご(嫁)

□タ之部

たまげる(驚く)
たいほう(虚言)
たんと(澤山)
だんま(牝馬)
たんべ(唾)
たんぼさり(田甫)
だぶ(鮪の埣引)
たがく(さげること)
たごつく(つかむ)
たわえなし(きまりなきもの)
だつて(きたない)
たら(俵)
だら(糞汁)

□ソ之部

そんたなもの(そんなもの)
そんま(早速)
そんざえ(粗末)
そべえる(甘へる)
そつちやえげ(そつちにいらつしやい)
そなんだから(さうであるものだから)
そでがせん(さうでありません)
そそくそ(さゝやく)
そぞむ(涼む)

□ツ之部

つぶ(田螺)
つつぼう(藥打つ槌)
つつこまる(かゞむ)
つあつあ(父上)
つら(顔)
づはう(嘘言)
づぼら(怠惰)

□ネ之部

ねそべる(蹉跌する)
ねんじん(人參)
ねぶたい(ねむい)
ねまる(座る)
ねぎすり(泣き虫)
ねつから(至つて)
ねぶと(腫物)
ねつくつ(にえきらない)
ねぶかき(居睡)
ねえあでは(ありません)
ねぶか(懇)

□ナ之部

なんぼも(いくらも)
ながべれ(長い)
なめくづら(殼無かたつむり)
なづき(頭)
なじよだべ(どうでせう)

□ラ之部

らちもなえ(意外のこと)
らちがあかぬ(捗取りがたい)

□ム之部

むつける(偏屈になる)
むすける(生れる)
むくれる(そり反る)
むくたれ(暴語)
むぐす(もらす)
むしる(撮きさる)
むしける(孵化する)
むさい(へりがたい)
むよか(六日)
むる(漏る)

□ウ之部

うざれはく(難儀する)
うら(大便所)
うふるまえ(振舞)
うんと(澤山)
うんにや(いゝえ)
うんねあ(はい然り)
うんま(おいしい菓子)

□ノ之部

のたばる(臥す)
のさばる(我を張る)
のらいぬ(主なき犬)
のへつ(きりなし)
のんべい(亂酒)
のめる(前に倒れる)
のろい(遲い)
のつそり(澤山)
のじ(虹)
のる(ぬる)
のさる(乘ること)
のれ(ぬるい)
のつべり(全部)
おがる(成長する)
おたち(飲食物を強ふる)
おつかない(恐ろしい)
おやかた(兄)
おかた(妻)
おつち(啞)
おぼこ(子供)
おだてる(煽動する)
おだつ(いゝ氣になる)
おつけ(汁)
おこる(怒る)
おぼであ(重い)
おじよせる(寄せる)
おどてな(一昨日)
おら(自分)
おらとこ(自家)
おしよし(恥しい)
おしよる(折る)
おき(炭火)
おごさま(蟲)
おめなしく(太贅に)
おまぶり(守札)
おかわ(便器)

□ク之部

くたばる(死ぬ)
くびた(頸)
くろこぶし(くるふし)
くれ(土塊)
くさもち(女郎)
くちはび(まむし)
くべる(燒く)
くど(竈)
くなんえ(下さい)
くられる(叱られる)
くぞ(葛)
くたぶれる(疲勞する)
くだまく(支離滅裂なことを云ふ)
ぐいら(突然)

□ヤ之部

やつける(いぢめる)
やりきり(頻に)
やつさら(度々)
やきもち(嫉妬)
やくと(殊更に)

やくさら（故意に）
やくたいなし（無益）
やんた（いやである）
やばちい（濕氣にさはりて云ふ或はきたなく感ずる）
やんたじえあ（いやですもの）
やめでい（やめなさい）
やろ（男の兒）

□マ　之　部

まつこ（馬）
まつと（もつと）
まんつあ（まあ）
まつちや（町に）
まんま（飯）
まて（丁寧）
まける（容器より内容物を他に移す）
まける（賣價を減ず）
まやう（辨償する）
まくめ（渦卷）
まぐれ（僥倖）
まんさく（福壽草）
まがる（傾く）
まこえ（豚肥）

けろ（下さい）
けつと（毛布）
けあた（膏いた）
けあし（蕨）
げえなえ（いけない）
けなり（羨ましい）
げそり（何氣なき風）
ける（呉れる）
けつ（尻）
けぶこ（細毛）
けら（蓑の類）
げあらこ（蛙の子）
げつな（宜敷ない）
げつとり（鳥の闘ふこと）
げあだが（毛虫）
けじや（たべなさい）
けえうど（街道）
けつけなげ（片足跳躍）
けらえれん（下さいな）

□フ　之　部

ふざます（愚く云ふ）
ふるだ（墓）
ふるで（古木綿）
ふるしき（風呂敷）
ふくべ（瓢箪）
ふんぐり（睾丸）
ふんづくる（駄々をこねる）
ふかし（赤飯）
ふつとも（降るとも）
ぶつこす（打ちこはす）
ぶんこ（煙草入）

□コ　之　部

このけ（眉）
こつおもたい（くすぐつたい）
こはい（草臥）
こけし（木人形）
こなさせ（産婆）
こぼけなし（愚）
こつちやら（殊更）
こげら（鱗）
こなえだ（此の間）
こじえた（失敗）
こばもの（小間物）
こせんこ（鳳仙花）

ごんぼう（牛蒡）
ごんぼほり（執拗者）
ごんど（塵）
ごせやく（腹たつ）
ごんけ（自慢）
ごたいぶし（足）
ごて（夫）
ござんえ（お出で）
ごんぼ（短し）
ごけ（後室、未亡人）
ごくと（早く）
ごたいぶし（ざまわるいこと）
ござんなし（おいでなさい）

□エ　之　部

えぐ（行）
えど（井）
えけすかない（嫌ふこと）
えどこ（從兄弟）
えた（板）
えけ（池）
えごく（動く）
えげじや（行きなさい）
えつつも（始終）
えが（宜しいか）
えせはる（痩我慢）
えのこ（犬）
えそろ（寄食者）

□テ　之　部

てのげ（手拭）
てつぽこ（下着）
てぼくされ（仕事の下手なこと）
でろ（泥）
ててつぽゝ（たんぽゝ）
てつかり（斜視眼）
てんじゆく（空）
てんべ（頂）
てつべち（頂）
てびらこ（蝶々）
てんぽ（片腕）
てつかい（片腕）
てあほう（鴛）
てんぱう（鴛）
てつぽ（鐵砲）
てがゝ（光る意）
でゝる（出る）
でゝはうだい（澤山）
でゝはうだい（鴛）
でつすり（澤山）
であせん（出來ません）

□ア　之　部

あさばら（朝早やく）
あんだ（あなた）
あばれ（亂暴）
あさべなし（短慮）
あくと（蹠）
あけづ（蜻蛉）
あんちや（兄樣）
あく（灰）
あつぽ（馬）
あべ（歩め）
あづこ（杏）
あじこと（心配事）
あんまり（あまり）
あつたかい（あたゝかい）
あじやら（乱暴）
あぐ（歩幅）
あを（木槌の大なるもの）
あぐたい（悪口）
あつちや（あちら）

あいづら(二人以上に用ふ)
あいつ(あの人)
あなえろ(あの奴)
あぶく(泡)
あんやえ(さようなら)
あんこ(青年)
あわいに(たまに)
あがす(あかり)
あすぶ(遊ぶ)

□サ之部

さ(へ……何處へ)
さなぶり(早苗振)
ざつこ(雜魚)
ざま(狀態)
さゝくれ(滑かならざる板面)
さくづ(小糠)
さつと(僅か)
さつぱり(少しも)
さつぱさ(綺麗に)
さつくり(堅苦しくない)
さね(種子)
さめ(寒い)
さえ〳〵(度々)
さきた(さきがた)
さいばん(俎)
ささう(盲人)
ざつく(淡白)
ざつと(疎略)

□キ之部

きかす(聾)
きのな(昨日)
きめる(終る)
きしやまる(終る)
きぎ(杵)
きつち(米びち)
きすねびち(米櫃)
きんによな(昨日)
きさま(君)
きだこ(豆の粉)
きかんこ(いたづら者)
きびちよ(急須)
ぎつすり(澤山)

□ユ之部

ゆがた(單衣)
ゆんべな(夕)
ゆめし(夕飯)
ゆづけ(雪靴)
ゆんづけ(湯をかけた飯)
ゆくない(善くない)

□メ之部

めつこ(片目)
めど(小孔)
めゝず(蚯蚓)
めごい(可愛らしい)
めつたに(稀に)
める(見える)
めつちや(目の惡しき者)
めんこ(愛らしい)

□ミ之部

みつちと(一生懸命)
みたくない(見にくい)
みづ(道)
みし(飯)
みぐさい(見苦しい)
みえたくり(自慢)

□シ之部

しばれる(寒さがきびしい)
しばて(酒の肴)
しんしよ(身代)
しんと(神職)
しわい(吝嗇)
じようり(草履)
じよつぱり(强情者)
しこたま(夥多)
しりぼ(尻尾)
しやりむり(無理〳〵)
しやなし(無暗)
しみる(凍る)
しやからなし(無鐵砲)
しぶさい(惡くおちつく)
しやじ(匙)
じえれ(錢)
したてば(しました)
しやる(去る)
しやくがれ(尺度)

□ヒ之部

ひづる(戯れ弄ぶ)
びつこ(ちんば)
びつしり(何時も)
ひくる(閉る)
びたい(女を呼び惡口)
びつき(蛙)
ひたいこび(額)
びつたちげ(平たい)
ひよつこ(雛)
ひかき(十能)
ひぼ(紐)
ひたつ(二つ)
ひたこ(蓋)
ひつたくる(剝ぐ)
ひさぐ(柄杓)
ひで(ひどい)

□モ之部

もだ(荊)
もよう(經過する)
もだら(糸などのもつれたこと)
もぢやぼなし(物を粗末にすること)
もちやくる(揉める)
もつべ(褌のせまき袴)
もぐ(もぎさること)
もしろ(蓆)
もづえ(不憫なこと)
もつこ(化物)
もさばいゝ(割合によし)
もつきり(酒一杯)
もろ(むろ)
もこさ(むかう)
もぞ(寢言)
もどち(太紐)
もつけだ(申譯なし)

□セ之部

せんたく(裁縫)
せつない(五月蠅)
せつく(催促する)
せびる(强請)
せろ(入れる)
せきこ(小川)
せふろば(風呂場)

□ス之部

すがり(蜂)
すうつと(早く)
すした(しました)
すくだまる(ちぢまる)
すが(氷)
すけべ(色好み)

すない（よく出かした）
するす（擂臼）

第十章　社寺名蹟

岩谷堂町

封内風土記、寶暦書上安永書上等に據れば、當時現町内社寺の主なるものは、神社に白山權現社、神明宮、八幡宮、愛宕神社、秋葉權現、稲荷社、八龍權現、太子堂、達摩室、三十三觀音堂、毘沙門堂、藥師堂（以上舊片岡村）、鎮岡神社、八幡宮、諏訪大明神、神明宮、藍婆權現、熊野神社、春日神社、山神社、觀音堂、不動堂、道祖神、（以上舊餅田村）、山王權現社、新山權現、雲南權現、日月社、八王子社、疱瘡神、毘沙門堂（以上舊增澤村）等にして、寺院に光明寺、正重寺、重染寺、常光院、多聞寺、興性寺、松岩寺、寶性寺、萬松寺なり。而して現在明細帳所載のものは、鎮岡神社、秋葉神社、五十瀨神社、愛宕神社、八雲神社、新山神社、光明寺、松岩寺、興性寺、萬松寺　正重寺、蓮久寺、寶性寺、多聞寺、の六社八寺と、松岩寺境内觀音堂、寶性寺境内　子堂となり、また史蹟としては有名なる豐田城柄杓城ある、今左に此等社寺の主なるもの、及び史蹟につき其大要を記せん。

神　社

○村　社　鎮　岡　神　社　祭神　大巳貴命　字　餅　田　鎮　座

本社は延喜式内江刺郡一座鎮岡神社（鎮岡に作りに擬せらる。封内風土記に、『鎮岡神社名跡志云、阡以以加と訓するあり）神名帳所載其地不詳、但餅田邑中有稱神岡地。蓋所謂鎮岡而、鄕里以其訓音之近而、誤其文字者可知。此處古昔之鎮岡也。今土人置不動像可惡、希文按是乃延喜式神名牒、所謂鎮岡神社也。』と地名辭書にい

ふ、『今餅田に本社の古址を說けども、杜撰なり。而も他に明徵を得ざれば、假に此所に置く云々（鎭岡神社の條）また云神祇志料には、餅田八幡宮を以て本祠に擬し、「宮東五町五位林の岡に清水湧出す。蓋し鎭岡は清水岡の轉訛なり」と如何にや』と。本社はまた陣岡と稱するより、附近に高水寺址等を附會し、聞老誌と共に賴朝の奥州征伐を說くものあるも、今之を採らず。境内反別五百十九坪、社殿其他の設備共に備はる。明治六年五月、村社に列せられ、同四十年四月神饌幣帛料供進社に指定せらる。氏子九十八戸を有す。

○無格社　秋葉神社　祭神　軻過突智命　字一日市町鎭座

以前は秋葉山大權現と稱し、別當は法龍山秋葉院火防消除の祈願所たり。陰曆正月二十四日神輿町内を渡御するを古例とす、現在境内百五坪にして、社殿は明治四十二年の增築にかかるものなり。

○無格社　五十瀨神社　祭神　天照大神　字向山鎭座

由緒明かならざるも、境内風光に富むを以て名あり。境内四百坪。本殿は明治二十六年二月燒失、今拜殿のみ存す。氏子八百三十戸あり。

○無格社　愛宕神社　祭神　軻過突智命　字館下鎭座

元和八年多門院興性といへるもの、舊栗原郡大島村より來り、興性寺を開きし時、同地より遷座せるものなりといふ。境内百七十二坪、氏子百十九戸を有す。

○無格社　八雲神社　祭神　素盞雄命　字柳澤鎭座

由緒不詳、境内百三十六坪。

○無格社　新山神社　祭神　瀨織津姫命　字增澤雲南田鎭座

由緒詳ならず。境内百四十坪。氏子百二十二戸。

寺院

○曹洞宗　大藏山　光明寺　字向山

本尊は地藏菩薩、應永年中本郡黑石村正法寺第二世月泉和尙法子微波弘通の開きし處なりといふ。其後久しく廢絕せしを、文安年中（或云天正中と）宮城縣仙臺市松音寺三世、皇山和尙開基となりて再興せり。境内千二百六十坪、境外所有地耕地七段一畝十三歩、宅地七段六畝二十五歩、檀家五百五十七戸、本堂庫裡衆寮山門鐘樓等、亦見るべく、實に郡内屈指の寺院たり。現今松音寺末に屬す。

按ずるに當寺草創の大旦那は、片岡氏にして其廢絕は江刺氏沒落の時なるべし。而して岩城氏は其菩提寺にあてんが爲、領を此地に享けしとき松音寺を請ひて再興せしにあらざるか。

○淨土宗　名越派　璃瑠山　松岩寺　字川原町

本山は仙臺市寺小路成覺寺、本尊は阿彌陀如來、永錄十一年良誓和尙の開基なり。境内は四百二十三坪檀家三百戸。安政六年四月六日火災に罹りしが、明治三十八年四月十八日、また類燒に遇ひ、一山悉く烏有に歸す。現今の堂舍は其後の建築に成る。境内に觀音堂あり。本尊は西國三十三所觀世音、明和三年當寺十三代良哲和尙之建立にして、江刺三十三所觀音三十一番札所たり。

○眞言宗　智山派　愛宕山興性寺　字館下

元和八年陸前國栗原郡大島村より多門院興性といへるもの、藤田但馬家中寺眞行寺の寺跡に來り、興性寺と改めしに起れるものなり。本尊は大日如來、本山は仙臺龍寶寺にして新義派なりしが、明治四十二

年四月八日、宗派轉換の旨聞屆けられ、京都府智積院末に屬す。現堂舍は享和火災後再建せしものなり檀家百戸。

○曹洞宗　宗保山　萬松寺　字　增　澤

正法寺末、本尊は釋迦如來、享和二年正法寺三世之法孫良棟和尚の開基なり。境内三百六十坪、境内所有地耕地一町一反一畝二十四歩を有す。

○曹洞宗　片岡山　正重寺　字　根　岸

黑石村正法寺末、本尊は如意輪觀世音菩薩、元中七年月泉良印の法子、正法寺第二十世徹叟弘通の開基なり。境内一千百五坪、境外所有耕地六反四畝二十六歩、檀家百二十五戸を有す。

○日蓮宗　經王山　蓮久寺　字　向　山

明治十一年片岡村（現今岩谷堂町）菊池吉右工門起願にて、仙臺孝勝寺立花日讓師を開基として、相模國足柄郡萩窪村より引移し、新築せしものなり。本尊は釋迦如來。本山は孝勝寺、境内反別三百四十五坪、境外所有耕地四段五畝二十五歩、檀家四十戸を有す。

○天台宗　年子山　寶性寺　字　根　岸

本尊は正觀世音菩薩。由緒明かならず。境内太子堂あり。本尊は聖德太子雲慶の作と傳ふ。古記によれば「嘉慶元年八月十七日、施主片岡殿北方、永正八年二月吉日、片岡平重朝と記せる古棟札寫二通あり按ずるに嘉慶元年の創建にして、永正八年の再建にあらざるかと。」或は然らんか。西磐井中尊寺末に屬す。

○眞言宗　新義派　岩屋戸山　多聞寺　字　向　山

當山は慈覺大師の開基にして天台宗なりしも、中古退轉したるを以て天和二年弘祐法印中興開山となり眞言に改宗せり。境内千八十七坪、毘沙門堂、金比羅堂、天神宮、繪馬堂等ありしも、明治五年十一月二十三日類燒に遇ひ、遂に再建に至らず。遺址に舊郡立病院公會堂建設せらる。本尊は金剛大日如來。檀家僅かに九戸。

明細帳以外の主なる神社佛閣。

○稻　荷　社

舊館本丸東北の下稻荷坂といふにあり。由緒詳ならざるも、岩城氏所領以前よりの舊社にして舊時は山伏寶性院別當たり。花柳界よりの信仰厚し。

○八　龍　權　現　社

片地家小路裏にあり。例祭日には遠近參拜多し。

○白　山　權　現　社

字宮元にあり、古くは江刺郡の總鎮守なりと傳ふるも明ならず。

史蹟名勝

○岩　谷　堂　館　址

一名柄杓城といふ。其はじめ明かならざるも、永正の頃葛西重親の子重任此處に住し、始めて江刺氏を稱せり。重任の子重胤重胤の子輝重、輝重の子重恒等其後を享けしが、天正十八年宗家葛西晴信、小田

原陣不參の罪により、領地沒收せらるゝに當り、重恒も亦此城を棄てゝ南部領に去りしに、重恒の重臣高屋左近、嫡男左衛四郎等こゝに籠城し、蒲生氏の軍と戰ひしが、衆寡敵せず遂に創を蒙りて逃れ去れり。同年八月木村氏葛西の故領を享け、成合兵左衛門（或云清口外記佐瀬伯耆粟野九左衛門）を岩谷堂城代官となす。幾もなく葛西大崎の殘黨一時に蜂起して、各城を陷る。十月三日本城も亦水澤城と共に拔かる。同十九年伊達政宗、木村氏の故地を領するに及び、大谷吉隆政宗のために此地を修む。同年十二月政宗其臣桑折政長に此城を賜ふ。其後の沿革明ならざるも、古内伊豆、增田將監、藤田但馬、古内伊賀等相享けしものゝ如し。萬治二年八月岩城佐兵衛宗規、岩谷堂要害所拜領仰付られ、寛文七年此所に移り住せしより、歷代相繼ぎて住し、以て明治維新に至る。

右本丸址銀杏樹の傍に、延慶四年六月十五日建立の供養碑あり。

文曰

〆　右志者爲女方父母
右志者爲父母聖靈
〆　延慶二年六月十五日
佛又法界衆生故也
父母
〆　右志者　四郎三郎

一豐田城址

字餅田小學校の裏手にあり。傳云阿部頼時の女婿藤原經清の築く所なりと。經清前九年役のはじめ、舅頼時に背き頼義に屬せしも、自ら安んずる能はず、再び頼時に歸し、厨川に戰死せり。經清の子清衡、母に從ひ清原氏に養はれしが、後三年役の功により六郡に封ぜられ此地に館し、中平泉に移れり。

後三年役中にして清原眞衡出羽の途上に死し、清衡家衡等また異心なきを陳せしかば、義家六郡を以て清衡家衡二人を封せり、然るに家衡清衡を憑み、清衡の館に於て之を害せんとせしも果さず、却つて其妻子を殺し居館を燒きしことあり、案ずるに當時も清衡の居館は此豐田にして、燒亡の厄に遭ひしにあらざるか。

址畔に一碑あり。文曰。

此地や東西五十七歩、南北三十九歩、在昔、亘理權太夫經清所城也。經清戰死平泉役、以其子權太郎清衡有勤王之勳、乃封奥之六郡、復居之、當時北上川在城之邊、浮梁之稱今存、東北有高水寺址、東南有鎭岡祠白旗池、俱事詳封内風土記。多歷年所人不知之、立碑以傳焉。

安永三年四月十五日

藩儒　田邊希元　撰
江戸　三井親和　書
江刺郡　餅田邑人　建之

一高館

字餅田にあり、安永年間餅田風土記に曰く、「八幡太郎義家の居城と申傳へ候」と、

一古館

字餅田にあり、同風土記に曰く、「但し城主相知不申候」と、

一十王山常光院址

遺址南新町にあり、眞言宗岩屋戸山多聞寺末寺なり。古昔は天臺宗なりしも、天和年中改宗して眞言宗

となれり、天明年間燒失して廢寺となり本寺に合す。

一　醫王山重染寺址

多聞寺後北向山續きに遺址を存す。現今其附近を重染寺といふ。傳云慈覺大師の開基にして、往古には十八坊を有し、境内には社殿堂社數多並び頗る壯觀なりしが、中古兵燹に罹り一山悉く燒失したりしを、正治の頃鈴木三郎重家の子小太郎重染、亡君亡父の爲め其寺址に一寺を建立し、醫王山重染寺と稱したりしと。後多聞寺末となり、慶安の頃多聞寺住僧隆算、此所に隱居したるを始とし、代々の隱居所となりしが、後無住となり、遂に火災に罹りて亡滅するに至れり。今遺址に藥師の小宇を建つ。また同寺には秘佛として太黑惠比須各一體寶物として、鈴木重染の笈一荷を藏せりといふ。近傍にまた重家の墓と傳ふるものあり。一百蓮寺址　字百蓮寺にあり。昔此寺に九つの鐘ありしが、中一つは中尊寺に讓りたりといふ。境内に清泉あり、落ちたる針をも數へ得たりしといふ。

一　高水寺址

觀蹟聞老志曰、「在豐田館卯寅、今廢、東史曰、賴朝卿猶逗留蜂社、其邊有寺曰、高水寺云々」のことあるも、今之を採らず。

按ずるに紫波郡にある頼朝奥州征伐の史蹟と、當舊餅田村陣岡附近の地名とは類似のもの多く、また源家に關係せるものを傳へ、彼此混同して唱へらるゝものあり。高水寺地の如きも然り、如何なる故にや後考を待つ。

一　白旗の池

前石山にあり。聞老志曰、「賴義立白旗、飲馬干池畔、後人爲地名」

一　丹後塚

傳云天正中紀伊國日高郡小松原城湯河庄司春長此地方に來り、丹後と改名して岩谷堂に居住す。卒後長根坂の丘上に葬る、丹後塚は即ち是なり。

一　遠野陣場

天正年中江刺氏と遠野孫三郎と干戈を交へし時、遠野軍こゝに陣を張れりといふ。

愛宕村

安永二年風土記に記載せられたる本村内の神社は、舊高寺村に於ては、舊村の鎮守として下河原にある愛宕神社、同處なる春日大明神、樋渡にある伊勢堂神社、三日町の伊勢堂、小谷の伊勢堂、馬場先の稻荷大明神、御駒社、林の天神社、臺の熊野堂にして、舊二子町に於ては、谷田の伊勢堂、番匠の熊野權現、荒谷の八幡社、これ舊村の鎮守なり、其他鴻の巢に寶量權現、上荒屋敷に稻荷社、杉屋敷に熊野社中關御簾尾にまた同神社あり、又田谷村に於ては、八幡宮、熊野權現、稻荷大明神、伊勢大神宮二社を擧ぐ。而して現在明細帳所載のものは、字川島の川島神社、下河原の愛宕神社、田谷の谷清水神社、のみにして、佛宇は字田舍の西念寺と高寺の圓通院との二ヶ寺のみ。而してまた史蹟名勝として記すべきも少なし、今重なるものにつき其大要を記せん。

一　神社

○村社　川島神社　祭神　稻倉魂命　字川島鎮座

由緒明ならず、傳云洪水の際鬼柳邊より流れ來り、今の地に漂着したるを、土人社を設けて崇敬奉祀し

たりと、明治六年村社に列し、大正五年九月二十二日神饌幣帛供進社に指定せらる。境内千五百四十八坪、杉の本立は畫尙暗く、參拜者をして知らず襟を正さしむ。氏子百七十四戸。按ずるに安永の書上には同社なし、流れ來りしといふは其後なるべし。

○無格社　皇大神宮　祭神　天照大神　字田谷鎭座

由緒明ならず舊田谷村の鎭守なり。境内百六十五坪。

○無格社　愛宕神社　祭神　軻遇突智命　字西下河原鎭座

由緒詳ならず。日高寺村の鎭守なり。氏子三百五十五戸

○無格社　谷清水神社　祭神　少名彦名命　字田谷鎭座

境内二百〇九坪、由緒詳ならず。

明細帳以外の重なる神社佛閣

○八幡宮

字大畑にあり。祭神譽田別命、桓武の朝坂上田村麿の創立なりといふ。慶長年中洪水に遇ひ舊記等を失へり。神祇伯雅壽王染筆の立額及副翰を傳ふ。

一　寺　院

○曹洞宗　傳智山　西念寺　字田谷

本尊は釋迦如來、應永三十二年二月十八日、宗詮和尙の開基（或云天正中皇山宗詮和尙開基）にかゝり、宮城縣宮城郡逢坊正音寺末に屬す、境内三百六十坪、境外所有耕地一町三反餘を有す。

○黃檗宗　圓通院　字高寺

本尊は千手觀世音なるを以て通稱觀音堂といふ。同院鐘銘によれば、本院は往昔放光大悲山高寺と稱し慈覺大師の開基なりしも、其後大に荒廢し、只大礎の間に小院を存するのみなりしが、天和二年鳳山和尙來化し、圓通院と改稱して黃檗宗に改め、再開基となる。二代似敬和尙、大に殿堂を營み（大旦那阿部小平治重經といい）ふ、三代秀峰衍英に至りて大に備れるものゝ如し。文化三年風土記曰、「先年より正月、三月、五月、九月、年四度宛祭禮有之、三月十七日には從御公儀、御足輕二人宛每年警固被仰付被下置候、先年秀山代大年寺殿肯山樣、御遠逝の節も御傳馬二疋御判紙被下置候、其上於大年寺獻香燈、等迄被仰付候云々」と、境内は三百九十八坪、境外所有耕地八反七畝十二歩、本堂は明治十二年六月廿三日燒失して未だ再建に至らず。享保六年より山城國宇治郡黃檗山萬福寺直末となる。本院は尙末庵として威德院、朝日庵、神宮庵等を管す。

威德院は寶永三年天神社を黃檗宗等に改め、天滿山と號し、似敬和尙の開基せるものなり、朝日庵も亦同和尙の開基にして、寶永四年地藏堂を改め稱せしものなり。神宮庵は正德元年新山權現を改めしものにて、圓通院三代秀峰和尙の開基たり。

史　蹟　名　勝

一　田谷城址

字田谷池向にあり。高臺地なり。四圍の池の跡今田となる。東隣に光明寺屋敷と稱するあり。口碑に江刺舍人の館址なりと傳ふ。近年古碑五輪の斷片を發見す。

一　天馬氏の館址

字天間にあり。高臺をなす。下川原氏の家臣天馬氏の居りし所と今は畑となる。阿彌堂あり、當時同氏の崇敬せしものか。

一　鈴木重家の墓

字高寺別當にあり。二碑約三十間を隔てゝ立てり。一は雨露に曝され文字堙滅して弁すること能はず。碑に曰く、

願以此功德普及於一切我等衆生
皆共成佛道
嘉曆元年七月中旬相當二十五

右爲妙法禪尼須證井法阿
禪同成佛得道乃至法界平
等利益

按ずるに岩谷堂重染寺山に鈴木重家の墓あり。向山に光明寺あり。岩谷堂城に江刺氏居館せり。今また此所に光明寺屋敷、江刺舍人の館址鈴木重家の墓を傳ふ。二所必ず關係ある所なるべし記して後考を待つ。

一　劍が淵

田谷にあり。碑ありて其由來を述ぶ曰く、「古昔此地陷爲深淵焉、寛仁己未巳秋七月、院主秀蜂峰離於淵岸、覩一荷葉載雙劍而浮焉。此二物輕重懸絶而受以相任焉、其爲靈也、可知也。則就而操二、一乃沈而不可覓焉、凡靈必雌雄今失其一、至時或合焉、劍長一尺三寸四分、有款識一字可劣讀以下堙滅不可辨也。乃奉道場、以寶祀焉。爾來多經年所、床民崇信不懈、袪祲驅沴祈禳心應焉、院主且友造徹記其所由仍記授焉、天保九年戊戌、有賜紫南、古梁八十三歳誌。

閒老志曰、往昔得雄劍于潭底長一尺許、今藏役徒家、今也水涸潭流絶亦亡。

一　姥　櫻

字田谷海老島菊池五三郎氏宅前にあり。種蒔櫻にして周圍二十四尺、之にまとへる藤の太さまた二尺に餘れり。傳云、藤原氏の盛時北上川沿岸に植えたる一株なりと。地名に櫻木あり藤原氏の櫻を植えしによりて生せし櫻木の名によりて命名せられしと、

羽田村

舊村古風土記、封内風土記に載せられたる本村神社は、舊羽黑堂村に於ては、羽黑權現社、大黑社、金神社、熊野權現社、神明宮、赤沼明神、田茂山村には、神明宮、八幡宮、宇南權現社、愛宕神社、寶領權現、牛頭天王社等、鶯澤村には、神明宮、山神社、月山權現、八幡宮、白山權現社、天神宮、愛宕神社、黑田助村には、愛宕神社、神明宮、熊野神社、宇南權現、山神社なるも、現在神社明細帳に擧げらるゝものは、字羽黑堂なる出羽神社、田茂山なる五十瀬神社、鶯澤なる八幡神社、黑田助なる宇迦神社のみ。また寺院としては、千手院、寶全寺、花林院、長松院、千養寺の五ヶ寺、古記に見ゆるも、千手院長松院は今廢寺となり、他の三ヶ寺を存するのみ。佛宇としては羽黑堂、田茂山黑田助に觀音堂、鶯澤に不動堂あり、共に現存す。又史蹟名勝として擧ぐべきもの甚だ少く、僅かに葛西時代の館址三四を數ふるのみ。今以上につき主なるものゝ大要を記せん。

一　神　社

○郷社　出羽神社　祭神　稲倉魂命　字羽黒堂御山鎮座

傳云、延暦年中坂上田村麿蝦夷征伐の時、羽州羽黒山伊氏波神に立願し、征討の功を奏せしにより膽澤城を置きし時、同城の鎮護として歴代征討軍の苦戰たる此地方を選び、特に同神社を勸請せりといふ。其後詳ならざるも、前九年の役の頃、源義家の奉幣ありしこと古記に存せり。藤原清衡深く之を尊信し自ら羽州羽黒山に至り、同社の分靈をなし、現今の地域に社殿を建立し、僧坊を附し、館下豐田より參道を通せり。今に其古道を存す。清衡基衡等も亦父祖の志を繼ぎ、社領を附し、大に境内を經營せしより、當時に於ては山頂より山麓に至る迄、堂社僧坊相連り、殆んど百を以て算するに至りしといふ。文治後藤原氏亡びし後は、俄かに社領を失ひ、社塔の破損も修築に道なく、神主社僧は據る邊を失ひて四散し、丹梁碧柱徒に荊蕀の中に倒れ、社址堂跡徒らに狐狸の跳梁するに至りしも、大勢は如何ともすること能はざりき。斯くあること幾年、茲に葛西氏の臣千葉某といへるもの、采邑を此地に食むに及び、深く之を嘆き（或云江刺氏と）社堂を修理し、諸典を復興し、漸く盛時を追懷せしめしが、建武二年野火のため一山の堂舍悉く燒失し一も殘る所なかりき。其後歴代の邑主之を崇敬し、郷民の信仰厚かりしにより常に維持の道を講ぜられしも、寛永七年二月また炎上し、神寶什器殆んど免る能はず。僅かに神體を負擔奉遷せるのみ。此時に至り當時に至る迄、僅かに退轉を免れし當山別當眞言宗千手院、修驗滿性院、末社大黒堂別當常樂院等相計り、一時假宮を營みて奉仕し、更に藩に請ひ資を四方に募り、大に殿堂を經營せんとし、近くは江刺膽澤、遠くは氣仙本吉牡鹿の諸郡に至る迄、淨財の喜捨を授け、數年を經て漸く竣功せり。茲に至り本社の面目大に革まり、四圍の經營また見るべきもの多かりしも、享和二年の野火にてまた烏有に歸するに至れり。現今の社殿は文化二年の建築になり、其規摸盛時に比すれば殆んど假宮に過ぎざるなり。斯く天災連りに至りしも、神威の發揚する處四方の崇敬益厚く、遠近の參拜日に多く例祭の如きは二夜三日一山人を以て埋まり、賽米の如きは數頭の馬に駄載して下山せしといふ。維新後出羽神社に復舊し、郷社に列せられしも、境内は上地となり、別當は復飾し、參拜者は頓に減じ一時は殆んど維持すること能はざるに至りき。古來の氏子有志等深く之を憂ひ、一方献膳の資を募りて永遠祭典費の支途を作り、一方境内編入を出願し遂に其目的を達し、漸く維持の緒開け、以て今日に至れり。境内反別九千二百十一坪、古松老杉欝蒼として轉神威の森嚴を感ぜしむ。眺望の佳なるまた近郷稀に見る所あり。明治四十年四月供進郷社に指定せらる。現在存する境内末社琴平神社、愛宕神社、大黒社、熊野神社、春日神社、伊勢宮、八幡宮、山神社、田神社あり。膽澤郡舊四牛村渡船場附近にある一小社は、休みの權現とて、羽州羽黒山より當社分靈の際一時休憩せし所、田原村石山なる荷渡し權現は、同時に於ける荷物受授の古址を祭れる所なりと。田植式と稱する有名の古祭式を傳ふ。

○無格社　五十瀨神社　祭神　天照大神　字田茂山鎮座

由緒明ならず。以前は字田茂山の内伊勢堂にありしが、近時字麥屋金屋神社に相殿す。氏子二百余戸。

○無格社　八幡神社　祭神　譽田別命　字鶯澤鎮座

由緒明ならず。境内百七十六坪。氏子七十一戸。

○無格社　宇迦神社　祭神　別雷神　字黒田助鎮座

由緒不詳。境内十五坪。氏子三十五戸。

一寺院

○曹洞宗　福珠山　寶全寺　字田茂山

應永二年黑石村正法寺第二世月泉良印の法子田叟英梅の開きし所なり。該寺はさきに室の木といへるにありしを、三世素懌のとき現地に移し、文化十三年更に正法寺第三十九世俊巖雅堂の再建せるものなりといふ。本尊は釋迦如來。境内三百〇一坪。正法寺末山なり。

○曹洞宗　鶯澤山　花林院　字鶯澤

黑石止法寺末なり。元和三年正法寺第十四世成巖良圓の開基にして、本尊は釋迦如來境内反別百七十二坪を有す。

○天台宗　黑田山　千養寺　字黑田助

嘉祥三年慈覺大師當國遊化の時、此地を過ぎ神示を得、手から丈七尺餘の千手觀音の立像を刻み、同年六月十五日當山に安置し、一庵を建立して澍淵山千養寺と號せり。天仁元年藤原清衡九尺四面の本堂を再建せるより、代々の國主祈願所たりしも、慶長七年住僧寂後久しく無住となりしを以て、觀音堂は俗別當輪番に勤めしも、頽廢日に加はり、該寺は僅かに寺堂のみを存する無本寺となるに至れり。延寶五年五月羽州羽黑山正穩院覺翁源正來住し、當山を再興して仙臺仙岳院末に屬せり。之を中興第一世と稱す。同七年伊達綱村公祈願のため、三間四面の本堂を建立す。同時に客殿庫裡鐘樓等の修繕成れり。寶永五年五月十九日より綱村公の命により、綱宗公御祈願の爲め、當山に於て普門品三十三萬卷を讀誦し、綱宗公薨去の後は菩提の爲めに、更に三十三萬卷を讀誦し、伊達一家のためには一百座の護摩修行を行へり。其後再び無住となり、遂に退轉して現在に於ては觀音堂と庫裡を存するのみ。奥州第十九番江刺第六番の札所なり。境内六百十四坪西磐井中尊寺末に屬す。

明細帳以外の主なる神社佛宇

○八雲神社　祭神　素盞嗚尊

字田茂山粟瀨にあり。傳云粟瀨小林氏の祖先小林某、天正十三年正月美濃大垣より退去の際、其氏神を供奉勸請せるものにして、現に大垣には同社の宗社八雲神社存せりと。尚小林家には先祖の遺物として秘藏する家次の大刀あり、また秀吉公の朱印狀ありしといふも今傳はらず。

○金屋神三寶荒神藥師如來相殿社

字羽黑堂岩脇にあり。同處千葉氏の氏神なり。同氏系圖長門胤長の條に、「文治合戰軍功伊澤郡百岡居城、建長三年伊刺郡羽黑堂鄕山脇居住、中略、三寶荒神並藥師如來是、又坂上田村將軍之建立也。義家公貞任退治之節、兵火に付燒失故、御仮屋四尺四面也、依而尊體も無之、京都より守本尊之爲守護之三寶荒神父より讓受、二間四方之御堂建立是々。安置尊體は弘法大師御作也下略」、今正德三年寛延元年の棟札ありて、裏面に「古來之宮者源義家建立ト申傳也」との記載あり。

○板橋觀音堂

字羽黑堂板橋にあり。本尊は馬頭觀世音春日の作と傳ふ今なし。享保十三年四月の棟札あり。江刺三十三觀世音十二番の札所なり。

○中袋觀音堂

宇田茂山中袋。本尊馬頭觀音、江刺三十三番九番の札所なり。

○中清水根觀音堂

宇羽黒堂中清水根。本尊は如意輪觀世音、江刺三十三番十番の札所なり

○烏神社

羽黒堂にあり。大政の頃大原より遷座せしものなり、私祭の神祠なるも、婦人の信仰者多きを以て名あり。

史蹟名勝

○羽黒堂館址

羽黒堂にあり。封内風土記曰、東西二十三間、南北三十間、館主を羽黒堂對馬と、傳云、羽黒堂代、本姓は千葉葛西の家臣なりしが、天正十九年葛西沒落の時、此の所を退去せりといふ。或云此地に隱れ、土着せりと。

○鶯澤館址

宇鶯澤にあり。館主を鶯澤四郎兵衛といふ、鶯澤氏本姓は菊池氏、大田代氏、鴨澤氏とは兄弟たり。共に葛西の家臣にして江刺氏の附人たりしが、長兄菊池某事によりて江刺氏の怒に觸れ南部に退きしも、鶯澤氏等は此地に住して猶江刺氏に仕へしが、葛西沒落の時緣を求めて竊かに南部に入り、其家臣となれりと。

○黒田助館址

館主菊池内膳は九州菊池氏の後裔なり。父宗岩伯父宗重兄弟事により奥州に下り角懸に閑居せしを、江刺氏召出して家臣とし、宗重を角懸金田に、宗岩を黒田助に居らしめたり。宗岩は下館に居りしが、内膳は上館に移り館せり。天正十九年江刺氏南部に退くや、内膳また丹瀬に逃れしといふ。内膳弟十郎右衛門舊田谷村に隱れしが、後此地に歸り肝入を勤む。子孫今に連綿たり。

○羽黒山千手院址

遺址羽黒堂にあり。仙臺龍寶寺末山にして眞言宗に屬す。弘仁二年弘智といへるものゝ開基と傳ふ。世々羽黒山權現（現今出羽神社）の別當たり。正德年中火災に罹り古記を失ふ。明治維新神佛分離の際廢寺となし、住僧は還俗せり。本尊は觀音にして、江刺十一番札所なりしも、廢寺の後他に移し現今は鶯澤花林院内にあり。

○通岩山長照庵址（先には長松庵といふ）

遺址字黒田助にあり。黒石正法寺末山にして、明寶以菊和尚の開基なり。廢寺年代詳ならず。

○佐々木塚

字羽黒堂鹿野にあり。由緣ある武人の塚と傳ふるも明ならず。

○慶海塚

奥陽里人談に貞海塚とある此塚なるが如し。寛永の頃行人慶海といへるものあり。或は此人の塚ならんか。字羽黒堂にあり。

○經塚

字羽黒堂火石森にあり。徑三間計の圓塚にして、同森の頂上にあり。先年一部崩壞して約二尺立方の石廓現はれ、其中より一箇の瓶を出せり。土砂樹根と共に瓶内に入り、何等認むべきものなきも、一般の狀況よりして經塚と斷定せり。

○羽黒山内の埋藏物

出羽神社千内末社愛宕神社は、山内の西端に突出せる高地にありて、眺望頗る絶佳なり。明治初年の頃同社修繕の際敷地内より古刀の折損せしもの及び不明の鐵器の破片發掘せられ、尙埋藏しあるものゝ如ければ、其儘にして土工を中止したり、古來羽黒山内には、石櫃埋まり之を發掘せば血を雨らすと言ひ傳ふ。此所古塚にして傳說は之を傳へしにあらざるか。

○羽黒山の姥杉

目通り二丈五尺の老樹なり、舊來傳說の傳ふるものなし。

黒石村

本村内神社にして封内風土記に見ゆるものは、二宮大明神一社のみ。佛宇には藥師堂觀音堂。寺院に藤春院黒石寺正法寺あり。現在明細帳所載のものは、石手堰神社、正法寺、藤春院、黒石寺及同時境内なる妙音堂、千手觀音堂、釋迦堂なり、また村内史蹟名勝として擧ぐべきものは、鶴城館址、龍門瀧、網代瀧、袈沙掛櫻高清水等なり。今其大要を記せん。

神社

○村社　石手堰神社　祭神　天忍穗耳尊　字小島鎭座

傳云、日本武尊東夷征伐の時の草創にして、二の宮と定められしにより、爾來二ノ宮大明神と稱せしといふ。式社にして膽澤郡七座の一なり。觀應元年正法寺に賜はりし綸旨に、膽澤郡黒石大梅枯華山圓通正法禪寺とあるを見れば、黒石村は比較的後世迄膽澤郡なりしが、三代實錄曰「貞觀四年六月壬子陸奥國鎭守府正六位上石手堰神預官社、」神祇志云、膽澤郡石手堰神社在鎭守府、今江刺郡黒石村、曰黒石明神、又二宮明神、貞觀四年以正六位上預官社、」維新前は舊仙臺公より例祭日には警固二人を下し賜ひ殊に御用船九十五艘並舊南部公御用船八十艘に、水上無難の板札百七十五枚を兩家へ献納するを式例とせり。社地附近は北上舊河道にして、大明神沼と稱する深淵をなせり。河中雄石島雌石島と稱する大石あり。石上素盞嗚尊を祭りて本社の攝社とす。明治四十年四月供進村社に指定せらる。

寺院

○曹洞宗　大梅拈華山　圓通正法寺　字正法寺

本尊は如意輪觀音佛工春日の作と傳ふ。貞和四年四月五日、總持二祖峨山禪師二十五哲の上首良韶禪師この山に入られ、同八月二十六日開堂演法の儀を行はる。大檀那は長部清長黒石正端なり。觀應元年五月六日崇光帝より綸旨を賜はる。

勅　奥州膽澤郡黒石大梅枯華山圓通正法禪寺者、爲奥羽二州僧錄扶桑曹洞第三之本寺也。住持位到迄末代着紫衣紅服、專祈寶祚延長宣奉報　國恩、殊更可爲兩國寺院出世道場者、依　天氣執達如件。

觀應元甲寅五月六日　　權右中辨　經直

嘉吉元年後花園天皇も亦綸旨を賜はる。

勅　大梅枯華山圓通正法寺者、日本曹洞第三之本寺也、故出羽陸奥之諸末寺被定出世之道場、訖宜奉祈　寶祚綿延擧揚禪道者、依天氣執達如件。

嘉吉元辛酉五月七日　　左少辨　淳光

是に依て當山は奥羽兩國曹洞の本寺、紫衣出世の道場たる格式を具へたり。然るに元和元年德川家康宗門法度を定むるに及び、曹洞宗は永平總持の兩本山に限り、分屬するに至りしかば、當山は獨立本山の格式を失ひ、總持寺末に歸するに至れり。其盛時に於ては境内東西五十町、南北二十五町、周圍五里と稱し、北は裏首山の峯續き迄、東及び南は大鉢山の南腹より、北上山脈によつて東磐井との郡界を劃し寺峠を經て半藏島山の北腹に至る、西は裏首山の西端より白石澤を限り、西南は寺峠の西畔より母體の山野と接す。以て其廣袤の概を見るべし。寺領は黑石長部兩家の寄附をはじめとし、葛西清泰、伊澤清貞、菊池太膳大夫、金田美作、薄衣正阿彌、丹後守清家等の諸豪の歸依により、江刺膽澤東磐井等の諸郡に跨り、田畑二萬五千苅と算せり。殿堂も亦之に從ひて宏壯に七堂伽藍兼ね備はり、衆僧三百法、燈の影鮮かなりしも、天正年間に至り、葛西氏の滅亡と共に、近郷の諸豪族皆亡びしかば、當山の寺領も安堵するに遑なく、一山境地の外悉く之を失ふに至れり。伊達政宗當國を領するに當りて大に歸依し、元和二年寺領若干を寄附し、漸次增加して七十五石とし、以て明治に至りしも、維新の改革は全く之をも失はしめ、古來の大境内の大部は上地官林となり、維持に資なく、經營に途なく、佛殿僧堂衆寮等すら遂に維持すること能はず、今や礎石を青苔荒草の間に存するものあるに至れり。現在殿堂は本堂開祖堂をはじめとして、十有餘棟を存す。或は昔日の偉觀なからんも、規模の雄大また驚くべし。昔時は山内に續燈庵、聖壽庵、月江庵、白鳥庵、長命庵、德昌庵、福壽庵、貞光庵、聖諦庵等存立せしといふも今や遺址の訪ぬべきものたゞ聖諦庵あるのみ。

○曹洞宗　龍門山　藤春院　　字鶴城

黑石越後正端の次子藤春の歸依により、寶德二年正法寺錄住、第二代在山融崧の開きし所なり。文化中堂宇全燒し、代嶺南僧再建して今に及ぶ、什寶殘る所なし。境内反別千二百五十四坪、境外所有地耕地六反五畝二十一歩、本尊に釋迦牟尼佛を安置す。

○天台宗　砂見山　黑石寺　　字山内

天平元年行基此地に來り、手づから藥師の尊像を作り、一寺を創立して東光山藥師寺といふ。これ本寺の起源なり。延曆の頃殿堂兵火に罹り、殘る所ただ本堂のみ。其後無住となりて遂に退轉す。大同二年鎮守將軍巡按此に至り、靈刹の頽敗を歎き工人を飛彈に徵し、七間四面の本堂を新造し、一夜にして成らんとせしも、堂内東北隅の床板一枚未だ敷終らざるに鷄鳴を聞きしを以て、其儘止みしといふ、よりて一山内今に至るまで雞を養はずといふ。嘉祥三年慈覺大師東北に曳錫するや、此地を過ぎて神示を得、手づから十二神將四天王の像を刻し、また數十の佛宇四十八の僧房を營み、稱して妙見山黑石寺といふ。藤原秀衡、葛西清重等大に歸依して、薪菜供饌の山林田圃を寄附す、然るに元龜天正の頃屢々兵火に罹り、僅かに本寺のみを殘したるを伊達政宗之を修造せんとせしも遂に果さず、唯葛西氏の寄附せる寺領によりて僅かに其形迹を存するを得たり。元錄十二年幕命により、東獻山の末直となる。此寺には年々

陰暦正月七日の夜、種々の祭事行はる。之を總稱して蘇民祭といふ、祭事に關する記事妙見山風土記に見ゆ　曰。

年々正月七日夜妙見宮の神事、往古は右妙見山に於て有之、右儀式に相用候鬼面十二有之、相用申候處高岩に飛行き甚だ恐敷儀多有之候に付、其後藥師堂に於て祭禮の儀式仕來候、何時より藥師へ相移申候哉、往古の儀にて相知不申候　右鬼面本式に相宛候得ば、何國ともなく飛行候由にて、何時相失候哉、當時は二つ相殘居今に至るまで七日晩、子供の頭へ爲冠、附人相附よし、たいまつ爲持參詣群集の中を相廻り、儀式相勤め申候、右子供鬼子と申唱來候。

年々正月七日夜儀式に相用ひ候薪は、同六日爲伐生割木を藥師堂の土間へ三ヶ所に焚き初め、釜燃立候時參詣の諸人東西より投合ひ、或は火を以て打合申候、是往古より祭禮の儀式に御座候。右燒木を祭燈木と申唱候。

年々正月七日夜祭燈木の儀式、相終りて祭木を入れたる袋を、群集民爭ふて其袋より祭木を取り去り、後東西と相分れ互に萬力を以雜生雜生の聲を張り上げ引合ひ申候、一切の祭物は家内安全の御神符と致し云々　下略。

境内反別二千九百五十八坪、境内佛堂三宇妙音堂千手觀音堂釋迦堂これなり。

史蹟名勝

○鶴城址

字鶴城にあり。黑石驛の背後にある一臺地にして、黑石越後正端入道の舘址なりと傳ふ。二の丸本丸の跡明かなり。數年前迄は古井所々にありしも、今は埋めらる。舘上忠魂碑のある處、眺望最も佳にして北上川脚下を流れ、膽澤の平野雙眸に入る。

○龍門瀧

字鶴城藤春院丸内にあり。高約一丈五尺、舟瀧釜瀧升瀧の三層となりて落下す。盛夏に入れば涸水することあるも、水勢概ね衰へず。源を大鉢森山に發し、水清明にして稍見るに足る。近時發電所を設く。

○網代瀧

字小黑石にあり。直下懸帛の觀なきも激流奔馬の如く、岩石を嚙む狀稍偉觀とす。

○正法寺の櫛

正法寺本堂の前庭にあり。二幹に分れし老樹なり、由來傳說なし。

○正法寺姥杉

廻り三丈無底禪師の手植と傳ふ。

田原村

本村内明細帳所載の神社は、字土谷にある五十瀨神社、同大田代にある同神社、同小田代にある同神社字原體にある大山祇神社、同石山にある皇大神社にして、寺院は寶城寺、東漸寺、興國寺、耕田寺なるも、風土記に見ゆるものは、舊原躰村には天神宮、神明宮、熊野神社、新山權現社、白山權現社、月山權現社、八山權現社、虛空藏堂、馬頭觀音堂、寶城寺、舊土谷村には神明宮、愛宕神社、岩藏神社觀音堂、要春院、舊石山村には、神明宮、熊野神社、新山權現、白山權現、大日堂、藥師堂、觀音堂、不動堂、洞泉寺、舊小田代村には神明宮、白山權現、雷神社、愛宕神社、午頭天王社、熊野神社、宇南權現社、藍婆權現社、八幡宮、荒神社、山神社、大明神社、觀音堂、興國寺、舊大田代村には高根權現社、白山權現社、保呂波權現社、二嘉那井神社、山神社、愛宕神社、十二藍婆神社。耕田寺等あり。今其主なるものにつき左に其大要を記せん。

神社

○村社　五十瀬神社　祭神　天照大神　字土谷鎮座

天和三年九月伊達綱村、領内巡驗として東磐井猿澤より岩谷堂に至る途次、東街道は源義經衣川館より夷地に下りし古道なりしを聞召し、之を通過せられし時、西南舊土谷村内の一小峰を認められ、少時休憩して其風光を賞し、荒巻村伊勢山に類したりとて、此地を伊勢山と唱へ、神明社を奉祀すべき旨命ありしを以て、當時の村肝煎小松大學等村民と相計り、社殿を造營し、伊勢神宮を奉安したりしに、綱村よりは一反歩の社地を寄進せられたり、よりて社地附近の地字を御免と呼ぶと、明治六年五月村社に列せらる、境内八十坪。氏子五十九戸。

○村社・五十瀬神社　祭神　天照大神　字大田代鎮座

由緒詳ならず、明治六年五月村社に列せられ同四十年四月十二日神饌幣帛料供進村社に指定せらる、境内二百二十五坪氏子二百五十九戸、大田代家系譜を按ずるに同社は高根權現社舊名と共に同氏の氏神なるが如し。

○無格社　五十瀬神社　祭神　天照大神　字小田代　座

由緒詳ならず、境内三百六十六坪、氏子二百五十九戸。

○無格社　大山祇神社　祭神　大山祇神　字原躰鎮座

以前虚空堂と稱せり、正中二年三月當時原躰の領主及川清勝其守本尊を奉安せるものなりといふ、應永二十一年燒失同二十三年再建す、此時江刺家より柱十二本寄附ありたり。永享十年大原飛彈守武蓮長久祈願として太刀の奉納あり、文明二年江刺氏より幕の奉納あり、明治三年大山祇神社と稱す、境内百九十四坪、氏子百戸。

○無格社　皇大神社　字石山鎮座

由緒不詳。境内百四十坪、氏子五十三戸。

寺院

○曹洞宗　玉峯山　寶城寺　存原躰

本尊は阿彌陀如來、應永三年二月二十一日正法寺第二祖月泉良印の法子月峯良燈の開きし所なり。境内五百十六坪、境外所有地三反八畝二十歩、擅徒五百十二人、正法寺末に屬す。

○天台宗　澤田山　東漸寺　字小田代

維新前は羽黒派の修驗寺なりしが、明治五年九月太政官布告により、修驗宗廢止せられ、從來の本寺所轄のまゝ天台眞言兩本宗に歸入すべき旨、達せられしにより、當寺は天台に歸入し、從來の本寺羽州羽黒山寂光寺末に屬し、天台寺院となりしなり、本尊は十一面觀音、由緒に曰く、本寺は天安元年慈覺大師の草創にして、初め東漸院と稱し、天台宗の寺院なりしが、寛文八年八月源清はじめて修驗寺となす天保頃住職學慶堂舍を再建す。慶應二年始めて澤田山蓮華王院東漸寺と稱して、維新に至りしなり。明治四十一年十一月本堂燒失す。境内百六十九坪、荒神堂ありまた慈覺大師の草創なりといふ。

○曹洞宗　田代山　興國寺　字小田代

本尊は釋迦如來、應永二年正月二十八日、田叟英梅の開きし所なり、正法寺客末と稱す。慶應二年正月

二十一日火災に罹り、古記錄を失ふ。境内五百九十二坪、境外所有耕地八段二畝六歩、擅徒百九十一人を有す、江刺十四番の觀世音を安置す。

○曹洞宗　龍澤山　耕田寺　字大田代

本尊は如意輪觀音、天文十一年二月二十四日、黑石正法寺九世虛窓良巴の開きし所なり。寛政八年三月二十四日、十六代祖道の時火災に罹りて、古記什寶を失ふ、境内二百十九坪、子安觀音堂あり、境外所有耕地五段一歩、擅徒百二十人を有す。

明細帳以外の主なる神社佛宇

○稻荷大明神

原躰字藏内にあり。正德六年四月及川五郎兵衛稻荷の神託により祭れるものなり、享保二年の由緒書あり、社主及川氏之を藏す私祭の神祠なり。

○馬頭觀世音

字原躰倉内にあり。傳曰元和の頃及川長門と稱するものあり、伊達政宗の命を受け私財を以て二子町の中五十貫を開墾す、其子藤左衛門信敏、良馬を有し、之を伊達忠宗に献ず、忠宗之を賞し、正保元年七月三國一と稱する駿馬に轡置鞍を副へて賜り、種馬とすべき命あり。信敏其仔を得上覽に供してまた朱塗の鐙を賜はる、慶安四年八月三國一の名馬殞る、臺命により遺屍を此地に葬り、碑を立て馬頭觀世音を勸請して之を祭る、江刺十五番藏内觀音と稱するこれなり。社殿に木像の神馬と觀音像を安置す。

○大佛觀音

石山にあり、江刺三十三觀音十三番の札所なり。

○荒神社

太田代にあり、遠近參詣者多き郡中稀に見る所なり。

史蹟名勝

○清水館址

字小田代にあり。小澤肥前（江刺氏の家臣なるへし）の館址なりと傳へらる。其他小田代には總善館、鳶館、獨活館、館森等あるも、遺址を存するのみにて館主等明かならず。

○太田代館址

字太田代にあり、江刺氏の家臣太田代伊豫の居館なり。天正中江刺氏の沒落の時伊豫の子東膳江刺兵庫重恒に從ひ、南部氏に仕ふ、子孫今に連綿たり。

○大谷山要春院址

字土谷にあり、黑石正法寺末山なり。大永二年五月怡峯素快の開きし所なり。

○金峯山洞泉寺址

字石山にあり、黑石正法寺末山なり、田叟英梅の開基なりといふも明かならず。

○五位塚

餅田より原躰に通ずる坂途の南側にあり。數個の小塚相並べり。由緒詳ならず、今回岩手縣史跡調査委員之を調査し古墳と決定せりと。

○田代塚杉

字太田代根子町にあり。先年伐採せらる。

藤里村

封内風土記に見ゆる本村内神社は、舊横瀬村に於て愛宕神社、神明宮、八幡宮、同淺井村に於て、愛宕神社、佛宇として刀八毘沙門堂、養明大師あり。寺院には普光山圓通寺、慈眼山西泉寺を擧ぐ。今明細帳の所載は、智福の愛宕神社、石名田の同神社、清水柳の勝軍寺、横瀬の圓通寺、淺井の西泉寺なり。又史跡名勝の擧ぐべきものは、岩清水館、妻之神館、毘沙門館、倉迫城、雁前館、掛の上館、沼尻城、大手城、長信田城等の諸址、用明寺址、三居寺址、智福寺址、淺井戸二色櫻、桐生櫻、花見石、夏虫山等なり。其他數多の古塚あり。今左に其重なるものにつき其大要を記せん。

神社

○村社　愛宕神社　祭神　軻過突智神　字智福鎮座

由緒詳ならざるも、本郡の古跡神殿と言ひ傳ふ。正德五年十一月二十四日、再建の棟札あり。明治八年五月村社に列せられ、同四十年四月十二日、供造村社に指定せらる。境内反別四百二十五坪、琴平神社あり、氏子百六十五戸。

○無格社　愛宕神社　祭神　軻過突智神　字石名田鎮座

傳曰、延暦中田村麻呂等討夷の勅を奉して、奥州に入り達谷に惡路王赤頭等を誅するや、其子人首丸逃れて此所に據る、田村麻呂等追ひ來りて此山の東麓に陣し、夷敵降服の祈願をなし、神托を蒙りて之を誅戮することを得たり。よりて此山上に愛宕神社を創祀し、治國鎮護の神とす。其後明ならざるも、江刺氏の歸依深く、頽廢の堂社を再興せりといふ。其奥院と稱する所は、斷崖數十丈なる絶壁の上にありて古は本尊なる勝軍地藏、並軻過突智神の尊像を安置せしが、明暦元年地藏尊を勝軍寺に遷せり。寶暦中奥院また失火ありて、軻過突智の像も亦烏有に歸せり。境内に八坂神社あり。氏子二百〇一戸を有す。

寺院

○曹洞宗　普光山圓通寺　字清水柳

黒石正法寺末山なり。正長元年三月、黒石藤春入道の孫、月堂良澄横漱寺の澤に一庵を建立して教化を布く、これ本寺の起源なり。八世離山に至り、現今の地に移して堂舍を建立せり。十二世月潭の時火災に罹り、十八世入宗の時亦一山烏有に歸す。現在の建物は嘉永二年の造營なり、境内七百九十坪、檀徒千二百三十人、本尊は正觀音にして江刺十六番札所たり。

○曹洞宗　慈眼山西泉寺　字寺澤

永正八年十一月然室在默巡錫して此地に來り、淺井上寺に草庵を結びて居住す、これ本寺の創始なり。其後膽澤永德寺八世直心玄模此所に隱居して中興の祖となる。八世巨山の時野火のため燒失し現地に移轉せり。現堂舍は明治四十四年並に四十五年の再建になれり。境内六百八十二坪、檀徒八百九十一人。本尊に釋迦如來を安置す。膽澤永德寺末山なり。

○天台宗　愛宕山勝軍寺　字清水柳

維新前は修驗寺なりしが、明治五年太政官布告により、本宗に歸せるものなり。本尊は勝軍地藏、比戸山延暦寺末なり。傳曰、坂上田村麻呂の本願により、賢澄阿闍梨の創立なりと、其地石名田愛宕山内なりしを以て、冬期は滿山雪に埋れ、一滴の閼伽をも供する能はざるにより、明暦元年時の住僧泰圓之を私邸内に移し、妙法院勝軍寺と稱せり。明治四十三年再び現地に移れり、境内反別六百九十六坪を有す。

明細帳以外の主なる神社佛宇

字　智　福

○毘　沙　門　堂

本尊毘沙門天丈七尺三寸、慈覺大師の作、江刺三毘沙門の一と傳ふ。永祿十年智福住大眞坊願主となり堂舍を再建す、寛文十一年また再建す。延寶の初め野火のため燒失し、殆んど再建すること能はざりしを富豪及川重定といへるもの、許多の費を投じて造營し、元祿五年三月に至りて成る。現存せる毘沙門堂（村社愛宕神社）拜殿は卽ち之なり。

史　蹟　名　勝

○岩清水館址

字前村にあり。東西凡三十八間、南北三十間四圍に幅一間半乃至八間の空渠を存す。由緒明ならず。或云中田出雲の居館なりと、附近に天滿宮ありて館主の氏神なりしと傳へらる、館内清泉あり、水量豐富清冽比なし。

○妻之神館址

字本杵にあり、豪族高橋國春の居館なりと傳ふ。封内記云「淺井邑幸神館古昔江刺三郎守居之」

○毘沙門館址　智福館

字智福毘沙門堂後方の高地にあり。四圍に幅三間許の空渠の跡を存す。傳云妻之神館高橋國春此地を相して築き、工成り將に移轉せんとせしとき、敵の襲擊に遇ひて亡びしと、後裔今に至りて高橋氏を稱す。

○倉迫城址　三河館熊野館

字寺澤にあり。江刺氏の一族江刺三河の居館なりと。館址金明清水と稱する清水あり、伊達正統世次考に天文五年植宗文書中なる江刺左衛門に註して、「諱不知江刺郡淺井村倉迫城」

○雁前館址

館跡凡二反歩許。上外澤にあり、葛西の臣及川梯之助江刺奉行として館せる處なりといふ。及川氏は氣仙遲澤より轉じたるものにして、其後裔及川某其遺寶を傳へたりしが、天保七年岩城家に献せりと館内十井戸と稱するあり。當時使用の井戸なるべし

○掛上館址

字澤田にあり。館跡五反歩許空堀礎石を存す。及川某の居館なりといふも詳ならず、當時の下町家中屋敷と傳ふる所上小屋及び寺田下にあり。

○沼尻城址

石名田愛宕山附近にあり。東西四十五間、南北二十間、東は飛彈の崖と稱する絶壁にして、昔時は其下に沼を湛へたりといふ。貞享書上に城主及川彌兵衛とあるも、古老の傳ふる所は江刺三河倉迫城に入りしとき、其一族江刺喜兵衛を玆に置きし所なりと、明ならず。又云及川氏は此館に於て、小田代肥前の

ために亡され、其墓地は二本杉にありと。

○大　手　城　址

字前田にあり、自然の丘陵に築きたるものゝ如し、其麓に屋敷平と稱し、侍町下町のありしと傳へらるゝ處あり、井戸馬洗淵馬場の跡を存す、城主傳はらず。

○長　信　田　城　址

字芦の口にあり。丘山にあり、三面皆崖にして北の一方のみ山に續けり。長信田飛彈守の居址と傳ふも年代明ならず、今尚古井を存す。

○高尾山用明寺址

天台宗なり、本尊は聖德太子開創由緒等明ならず。本尊は緣起書と共に同寺と關係ある阿部家に安置せらる。左に其緣起を

奥州江刺郡淺井茸有寺、山號高尾寺、曰用明、俗曰用明屋敷、今僅存一草堂、壹奉上宮太子肖像、立身三尺五寸、世是云鏡影、蓋太子自照鏡手雕故也、相傳中古有俗名平左衛門、即稱此寺別當、干時郡守有故手殺別當、其弟萬九郎、窃拔彼聖像首、持而不知何去、後傳曰入水而死、至、今只在遺体之墳塋而已。蓋自別當、至第四代、歲月計、及今歲享保丙午一百二十有八年也、今尚守護草堂焉茲仙臺城南小泉莊、古城蹟看守松田氏廣林善士、嘗聞彼村民來說聖像之由來、不堪感慨、請來而欲修補也。先是、名取郡落合寺、有一小僕、告寺主大善坊云、我父往年入名取川上、取埋木次、不覺足踏一物、塲見則一面面也。將謂尋常木偶也、持反任小兒戲弄、從是家業日衰以致不祥、或目是太子尊顏也、父知此崇、包裹藏于屋頭今尚存焉、寺主感激懇求欲奉寺、僕返家取來、寺主喜迎、托于前住大年鳳山端兄和尚、命于京都佛工新造聖身、以櫛其頭申供養矣。廣林聞訝意去落合凝其頭面則合于所得舊體寸無違焉、因爲希有之想、竟新造尊顏櫛舊体安飾以安全奉焉、實是　体分身以利有緣者也。向所謂或示成壞之相、或成示成壞之時無非適而啓廸衆生不　、客歲癸巳仲夏昨請山僧開眼供養焉。而告彼村民云、吾今聖像莊嚴了、若能修葺草堂而以欲安奉吾依舊送回、否則於名取郡闢建一堂永奉香華之供矣、別當既且村民喜迎而回、今茲季夏日廣林來說其由需全記、余不得辭筆之。

享保十一年歲旅丙午季夏吉旦

奥之仙臺兩足山大年禪寺嗣祖沙門覺天明

敬記于所居方丈

鎮守府將軍從四位下武藏守藤原秀郷

十六代松田備前守藤原淨顯六代嫡流

施　主　松田孫九郎藤原廣林

佛　子　仙臺北目町　中村丹解

○三　居　寺　址

字月照田にあり。由緒歷代廢寺の事に至る迄全く不明なり、古老相傳へて昔時善美を盡せる宏大なる寺院のありし跡といふのみ、井戸墓地の跡あり、墓石の文字讀むこと能はず。

○吉祥山　智福寺址

字智福にあり、天台宗にして本尊は不動明王、寛永の頃本眞坊躰芳の開きし所なり。明治の初年退轉し今は僅かに其址を存するのみ。

○二　色　櫻

雁前館十井戸の側にあり。彼岸櫻に似たる古木にして、紅白二種の花開花の時を異にして開く、附近の人紅花の滿開に、種籾を浸し、白花の開く頃苗代に播種す、若し誤つて之を傷けんか、忽ち血液樣の汁液を出す、よりて相戒めて損傷せずと。

○桐　生　櫻

字上長澤勝軍寺墓地にあり。柳の大木中心となり、其周圍を山櫻の幹を以て圍みたるものなり、周圍凡一丈許ありしが中心の柳は二十年前遂に枯死せり。

○夏　虫　山　字外の澤畑地の中央にある、約一反歩許の饅頭形の小丘なり。頂上一本の杉あり、昔より多くの鳴虫を産すと。

○愛　宕　山　隈川の右岸に屹立せる勝地にして、頂上に愛宕神社あり。絶壁幾十丈、奔流其麓を洗ひ、俯瞰神を戰かすも、仰げば眼界遠く開けて田園人里一眸の下に集り眺望の絶佳なること稀に見る所なり。

○古　塚　村内には古塚多し。縁塚と稱せらるゝもの、淺井、小向、横瀬才の神、同日照田、同岩木、同幕内、以上五ヶ所にあり。また古墳墓と見るべきものは、淺井、迎井澤、境、上外ヶ澤、横瀬、鹿野前、淺井、本杵、横瀬、掛の上（館主及川某の墳墓と傳ふ）横瀬、愛宕、下宿、下横瀬、字田中（文治の役、豐田城の老弱を携へて逃れしを屠りし所なりと）横瀬、一丈石、淺井、前村、若神子、妻之神（一の塚と稱す）にあれども由緒明かならず。又二重坂の上に五里塚、横瀬に七里塚と稱するあり。

伊　手　村

封内風土記に記せられたる本村内神社は、銚子權現社、新山權現社、稲荷社、戸隱神社にして、佛宇に藥師堂、觀音堂、毘沙門天堂、寺院に眞行寺、高林寺、的叟寺、明藏寺なるも、現今明細帳所載のものは戸隱神社、秋葉神社、八幡藥師、相殿神社、五十瀨神社、眞行寺、高林寺、明藏寺、的叟寺の四社、四寺と五十瀨境内神社稲荷三社、合殿藤原神社、菅原神社となり。又史蹟名稱として擧ぐべきものは、菊池館、荒谷館、陣場、伊手の玉川、伊手の大石等なり。今主なるものにつき其大要を記せん。

神　社

○村　社　戸　隱　神　社（祭神　手力雄尊）　字小中田　鎮　座

傳云、桓武天皇の御宇征夷大將軍坂上田村麻呂の勸請にして、其後鎮守府將軍源頼義同義家、奥羽前後の兩役に於て、當社に立願せりと。明治五年十六大區鄉社に列せられしが、同八年五月村社に改めらる境内六百六十二坪、氏子四百七十戸。

○無格社　秋　葉　神　社（祭神　火雷神）　字荒　谷　鎮　座

地頭藤田右兵衛宗親の觀請せるものなり。また同氏の祈願により、毎年國家安穩五穀成就火盜消除疫病退散の御輿巡行を行へりと。安永九年三月の棟札あり。境内五百八十坪。

○無格社　八幡藥師相殿神社（祭神　譽田別命　藥師如來）　字八　幡　鎮　座

以前は八幡神社といふ。源頼義奥州征伐の時、其臣坂戸判官則明此地に在陣し、宇佐八幡に祈願したる報賽として、勸請せるものなりといふ。明治十九年九月藥師如來を相殿して、八幡藥師相殿神社と改稱す。境内反別五百五十八坪、安永九年造營の棟札を存す。

○無格社　五十瀨神社（祭神　天照大神）　字隅川鎮座

征夷大將軍坂上田村麿蝦夷征伐のため此地に來り、天然の岩石自ら宮居の如くなるを見て、其所に大神の齋祀して國安穩の祈願をなせりと。源義家また坂戸則明をしし奉幣し、松杉梅櫻を社の四隅に手植せしめしと傳ふ。天正中菊池薩摩守恒一浪々の身を以て此地に止り、社殿を造營して氏神と崇敬せしも、其後頽廢せり。元祿三年後裔菊池清左衛門之を再興し、今日に至れり。境内反別六百五十五坪。社殿等略備はる。境内に稲荷三社合殿藤原神社、菅原神社あり。

寺　院

○眞言宗新義派　如意山眞行寺　字　町　裏

本尊は不動尊、山城國愛宕郡智積院末、境内反別三百五十三坪、擅家十九戸を有す。

○曹洞宗　太白山　高林寺　字　荒　谷

本尊は釋迦牟尼佛、岩代國信夫郡陽林寺末山なり。開基は盛南春畜、大檀那は當時の地頭藤田但馬なり境内六百七十九坪、境外所有耕地四段五畝十歩、擅家百六十戸を有す。

○曹洞宗　報恩山　明藏寺　字　大　中　田

本尊は釋迦牟尼佛、黑石正法寺末山なり。開基は良韶十三世の法孫槃至盛林、大檀那は藤原氏隆にして天永二年の草創なりといふも、前後貳回の火災に遭ひ、重寶記錄悉く燒失して、事實の徵すべきものなし。境内五百二十六坪、擅家六十戸を有す。

○曹洞宗　心相山　的雙寺　字　深　持

慶長の頃菊池薩摩守恒一の孫菊池信方大檀那となり、黑石正法寺第十七世格翁良逸を聘して開きし所なり。境内反別二百四十七坪、擅家百十戸を有す。本尊は釋迦牟尼佛なり。

明細帳以外の主なる神社佛宇

○熊　野　神　社　祭神　伊弉諾尊

字角屋にあり。聖武天皇の御宇按察使兼鎮守將軍大野東人の從者に、德民駿河といへるものあり。駿河故ありて久しく此地に住し、常に紀州熊野權現を崇信せるにより、同社を此所に勸請せりといふ。近時同社に於ては毎年勇壯なる豐年祭を行ふ。

○立　金　山　自性　院

字御堂にあり。本尊は聖觀音菩薩、羽前東田川郡羽黑山寂光寺末なり、傳云永承元年の頃藤原道長の庶子白糸姫事により奥州に下向し、道長の菩提のために此寺を創立せりといふ。其後江刺三河伽藍を再建し、春秋の觀音會をも再興するに至れり、伊達政宗また之を尊信し、定日の法會等をも怠らしめざりしといふ、然るに明暦二年回祿の災に遇ひ、一山烏有に歸し、今や僅かに礎址の假堂に其名を存するに過ぎず、江刺十七番の札所たり。

史　蹟　名　勝

○菊　池　館

上伊手字馬場先にあり、慶長の頃菊池恒一の孫信方地頭となり、此地に館せしより、維新前迄代々の住居となれり。菊池氏は肥後菊池の後裔なりと傳ふるも明ならず。文政の書上には館主を左膳と稱し、家中十二軒寺一ケ寺足輕二十軒とあり。

○荒　谷　館

古館ともいふ。伊手町畏の高地にあり。藤田右兵衛宗景の居館なり。藤田氏は正保二年養父但馬の時、上口内より移封せられたるものにして、延寶六年八月事により其家斷絶す。或云藤田氏の前に及川左近といへるもの居住せりと。

其他富飯戸隱下館下伊手建久館猪子中館林崎等の名見ゆるも詳ならず。

○戸　隱　杉

周圍二丈八尺戸隱社境内にあり、由來傳說なし。

米　里　村

封内風土記に擧げられたる本村内神社は、愛宕神社、諏訪神社、神明宮、白山權現社、稻荷社、山神社、白鳥神社、明祇權現社、熊野神社、八幡宮、石明神社、明神社、新山權現社、早山權現社にして佛宇に觀音堂、寺院には自德寺、福泉寺あり。又明治四年水澤縣書上には、神社に麓山神社、八幡神社、五十瀨神社、白山神社、出羽新山神社、館神神社を載せられたるも、現在明細帳所載のものは、村社麓山神社無格社麓山神社と、同神社境内五十瀨神社、津島神社、八幡神社、熊野神社り。寺院は自德寺のみにして、福泉寺は大正六年九月上閉伊郡松崎村に移轉せり。史蹟名勝として記すべきものは、人首古館、人首館、鳥矢森館、山居館、古歌葉館、人首丸墳墓等なり。今主なるものにつき其大要を記せん。

神　社

○村　社　麓　山　神　社　祭神　大山祇神　　字本小路鎭座

維新前は白山權現と稱し、人首館東南續きの丘にあり、元祿十五年十二月沼邊氏北野白山堂より遷座せるものなり、爾來一村の崇敬甚だ厚し。維新の際白山神社と改稱せしに、明治八年麓山神社と更に改稱して村社に列せらる。傍に白山神社、白鳥神社、天神社、妙祇權現社以上明細帳所載外等の神社あり。境内千四百三十五坪。氏子千三十一戸を有す。

○無格社　麓　山　神　社　祭神　大山祇神　　字中澤鎭座

傳云坂上田村麿大森山に人首丸を誅したる戰勝奉賽として建立せるものなりといふ。境内七百坪、境内神社四社あり。五十瀨神社、津島神社、八幡神社、熊野神社これなり。津島神社は健速須佐之雄命を祭り、明和中疫病流行の時、尾張の津島より奉遷せる所なりといふ。

寺　院

○曹洞宗　龍首山　自德寺　　字荒田表

本尊は藥師如來、伊達氏の臣沼邊攝津資仲、老母菩提の爲岩代國宇田郡小高村曹洞宗龍頭山洞慶寺二世仲庵存的を招請し、柴田郡沼邊村に龍首山自德寺を創立す。慶長十一年資仲の曾孫玄蕃重仲人首村に移封に際し、自德寺六世照山永文隨ひ來り、翌年三月之を創立す。境内七百五十九坪、阿彌陀あり、境外所有耕地七段五歩擅徒二千三百九十三人を有す。

明細帳以外の主なる神社佛宇

○大　森　觀　音

桓武天皇の御宇、坂上田村麿人首丸を誅して大森山に埋め、墓石を立て傍に觀音堂を創立し、京都より聖觀音像を下して安置せり。之即ち本觀音堂創始なり。後年數度の野火に遭ひ荒廢せしを以て、玉里村角懸に奉遷今の大森觀音之なり。因云坂上田村麿は夷賊征討の時、酋長を討取る毎に埋葬の地には必ず觀音堂を建立せり。牡鹿郡牧山の觀音、宮城郡富山觀音、栗原郡小迫村の觀音、遠田郡篭嶽の觀音等皆これなりと。

○愛宕神社

傳言、大同元年坂上田村麿勸請する所なり。

○諏訪神社

傳言、慶長十一年九月宥海法印の勸請する所なり。

○神明宮

元祿七年沼邊家施主となり、邑民の勸請する所なり。

○八咫神社

字九才坂にあり、田村麿の勸請と傳ふ、春秋の祭日に參拜者多し。

史蹟名勝

○人首古館

字古館にあり。大館南館に分たる、南に近く阿茶山を控へ、鳴瀬川を距て、東に山居館あり。北は鳥谷森館に對し、眼下に人首館を望む。傳曰弘長二年三月大原式部大夫三男阿部左衛門尉重胤東山大原より移封居館せし所なりといふ。

按ずるに江刺三河守隆之の二男に人首如綿といへるありて人首村を領せり本村古館址の何れにか居住せしならん。

○人首館

人首町東南丘上にあり。天正頃、葛西の臣安蘇修理の居館たりしが、葛西氏沒落と共に修理も亦此館を落つ。慶長中沼邊氏封を此地に受くるや、此所を居館と定め以て明治維新に至る。館の周圍に濠を圍らし有事に際しては直ちに水を湛へ、變に應ずる備をなせる跡ありといふ、近時館上に招魂社を造營す。

○鳥谷森館

天正中伊達政宗其臣藤田但馬をして、葛西の臣佐野某を此館に攻めしめ之を陷る、而して但馬を此館に置き、其領地を監せしめしが、數年ならずして之を膽澤郡金崎館に移せしといふ。以後荒廢す。

○山居館

字瀧壺にあり。藤原泰衡の臣吉田某の居館なりといふ。文治の役葛西清重の臣平澤某此所を攻め、激戰數日後落城せりと傳ふ。館は東西に分れ、高き方の西館を御殿と稱す。今に濠跡井戸跡を殘す。氏神は熊野神社なりといふ。

○古歌葉館

字館澤にあり。險要の地なり。藤原泰衡の臣門脇帶刀の居館なりしが、文治の役葛西氏に攻落され、其臣阿曾沼修理に隷屬して土着せりと。

其他川邊館坂本館小田館等あり。